



## 訳注 『宋書』 樂志二訳注稿 (四)

林, 香奈 ; 狩野, 雄 ; 佐藤, 大志 ; 佐竹, 保子 ; 釜谷, 武志 ; 柳川, 順子

---

**(Citation)**

未名, 40・41:49-151

**(Issue Date)**

2023-01

**(Resource Type)**

departmental bulletin paper

**(Version)**

Version of Record

**(JaLCD0I)**

<https://doi.org/10.24546/0100488493>

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100488493>



〔訳注〕

『宋書』 樂志二 訳注稿 (四)

林 香奈・狩野 雄・佐藤大志  
佐竹保子・釜谷武志・柳川順子

晋四廂樂歌<sup>①</sup>十六篇 張華<sup>②</sup>造 晋の四廂樂の歌十六篇 張華造る

稱元慶<sup>③</sup> 奉壽觴<sup>④</sup> 元慶を稱え 壽觴を奉る

后皇延遐祚<sup>⑤</sup> 安樂撫萬方<sup>⑥</sup> 后皇に遐祚を延べ 安樂もて萬方を撫す

右王公上壽詩一章 右は王公上壽の詩一章

晋の四廂樂の歌十六篇 張華の作

大いなる慶びを申しあげ、長寿を祝う杯を献上する。

天地に永遠の幸いを行き渡らせ、安樂によつて万邦の民をいつくしむ。

右は王公が長寿を祝い言祝ぐうた一章

○押韻 「觴・方」は下平10「陽」。

①四廂樂歌 「四廂樂」は東西南北の四廂に金石の樂器を配置

して演奏する歌曲。四箱樂歌とも言う。中華書局本・和刻

本は「廂」を「箱」に作る。張華が荀勗・傅玄らとともに四

廂樂を作ったことは、『宋書』樂志一に「晉武泰始五年（二六

九）、尚書奏使太僕傅玄・中書監荀勗・黃門侍郎張華各造正

日行禮及王公上壽酒食舉樂哥詩。詔又使中書郎成公綏亦作。

……九年（二七三）、荀勗遂典知樂事、使郭瓊・宋識等造正

德・大豫之舞、而勗及傅玄・張華又各造此舞哥詩。勗作新律

笛十二枚、散騎常侍阮咸識新律聲高、高近哀思、不合中和。」

また、『南齊書』樂志に「元會大饗四廂樂歌辭、晉泰始五年太

僕傅玄撰。正旦大會行禮歌詩四章、壽酒詩一章、食舉東西廂

樂十三章、黃門郎張華作。上壽食舉行禮詩十八章、中書監荀

勗、侍郎成公綏、言數各異。」

②張華 一三三二〜三三〇〇。『晉書』卷三六に伝がある。

③稱元慶 魏の王朗「冬臈不得朝表」（『芸文類聚』卷八〇）に

「履端於正、連歷天人三朝之元慶、而無緣祇奉玉爵、以獻萬

壽。」

④奉壽觴 『文選』卷一六・潘岳「閑居賦」に「稱萬壽以獻觴、

咸一懼而一喜。壽觴舉、慈顏和。」

⑤后皇延遐祚 『楚辭』九章・橘頌に「后皇嘉樹、橘徠服兮、

王逸注に「后、后土。皇、皇天也。」

陸雲「登遐頌」（『漢魏六朝百三家集』卷五〇）に「貽我則歌、

永揚遐祚。」「祚」はさいわい。

⑥撫萬方 『尚書』湯詔に「王歸自克夏、至于亳、誕告萬方、

偽孔伝に「誕、大也。以天命大義告萬方之衆人。」

明明在上<sup>①</sup> 丕顯厥繇<sup>②</sup> 明明たるは上に在り 丕に顯らかなるかな厥の繇<sup>③</sup>

翼翼三壽<sup>④</sup> 蕃后惟休 翼翼たる三壽 蕃后惟れ休す

羣生漸德<sup>⑤</sup> 六合承流<sup>⑥</sup> 羣生 德に漸い 六合 流れを承く

聖明なる皇帝は上位におわし、その道は大いに明らかであることよ。  
慎み深い大臣、諸侯はこれをよろこぶ。

人民はその徳に浴し、天地四方はその恩恵を受ける。

○押韻 「絲・休・流」は下平4「宵」。

①明明在上 「毛詩」大雅・常武に「赫赫明明、王命卿士」、毛  
伝に「明明然察也。」また『尚書』呂刑に「穆穆在上、明明在  
下」、孔穎達疏に「言堯躬行敬、敬之道在於上位。三后之徒  
躬秉明德、明君道在於下。」

なお、この歌から三章分を百衲本はまとめて一章とみな  
している。本来は底本に従うべきであるが、中華書局本は  
三章に分けている。「食挙東西箱歌詩十一章」とある以上、  
百衲本に従えば数が合わないため、中華書局本にひとまず  
従う。樂府詩集、和刻本も三章に分けるが、中華書局本と分  
け方が異なり、全二十六句を第一章十二句、第二章六句、第  
三章八句に分けている。

②不顯厥猷 「不顯」は、『尚書』文侯之命に「不顯文武、克慎

明德。昭升于上、敷聞在下」、『尚書』康誥に「惟乃丕顯考文  
王、克明德慎罰」とある。

「絲」は道。『文選』卷四八・班固「典引」に「孔絲先命、聖  
孚也」、蔡邕注に「絲、道也。言孔子先定道、誠至信也」、呂  
延濟注に「絲、道。孚、信也。」なお、『後漢書』班固伝では  
「絲」を「猷」に作る。李賢注には「猷、圖也。」

③翼翼三壽 「毛詩」大雅・常武に「緜緜翼翼、不測不克、濯  
征徐國」、毛伝に「緜緜、靚也。翼翼、敬也。濯、大也。」「毛  
詩」大雅・文王に「世之不顯、厥猶翼翼」、毛伝に「翼翼、恭  
敬」、鄭箋に「周之臣既世世光明、其爲君之謀事、忠敬翼翼  
然。」荀勗「食挙樂東西箱樂歌・翼翼一章」に「翼翼大君、民  
之攸暨」とみえる。当該歌注①参照。

「三壽」は、『毛詩』魯頌・閟宮に「三壽作朋、如岡如陵」、

毛伝に「壽、考也。」、鄭箋に「三壽、三卿也。』『文選』卷三・

張衡「東京賦」に「降至尊以訓恭、送迎拜乎三壽」、薛綜注に

「三壽、三老也。言天子尊而養此三老者、以教天下之敬、故  
來拜迎、去拜送焉。」

④蕃后 「蕃」はまもる。保衛する。「蕃后」は天子をまもる

立場にある者。「蕃」は「藩」「番」に通ずることから、諸侯

のほか異民族の王も含むか。荀勗「食举楽東西箱楽歌・隆化

一章」に「元侯列辟、四嶽蕃王」とある。『尚書』蔡仲之命に

「懋乃攸績、睦乃四鄰、以蕃王室、以和兄弟。』『宋書』礼志一

に「凡遣大使拜皇后、三公、及冠皇太子、及拜蕃王、帝皆臨

「承流」は、『史記』三王世家に「百蠻之君、靡不鄉風、承流  
稱意。』『後漢書』文苑伝・杜篤伝に「太宗承流、守之以文」、  
李賢注に「太宗、文帝也。繼體之君、以文德守之。」

三正元辰 朝慶鱗萃<sup>②</sup>

華夏奉職貢<sup>③</sup> 八荒覲殊類<sup>④</sup>

黻冕充廣庭 鳴玉盈朝位<sup>⑤</sup>

濟濟朝位 言觀其光<sup>⑥</sup>

儀序既以時 禮文渙以彰

思皇享多祐 嘉樂永無央<sup>⑦</sup>

三正元辰 朝慶鱗のごとく萃る<sup>あつまる</sup>

華夏 職貢を奉じ 八荒 殊類 覲ゆ<sup>まみ</sup>

黻冕 廣庭に充ち 鳴玉 朝位に盈つ<sup>よぶ</sup>

濟濟たる朝位 言に其の光を觀る<sup>み</sup>

儀序 既に時を以てし 禮文 渙として以て彰らかなり

皇の多祐を享<sup>う</sup>くることを思い 嘉樂 永く央<sup>あつ</sup>くること無し

軒。」

⑤羣生漸徳 『莊子』繕性に「四時得節、萬物不傷、羣生不夭。」

「漸」は潤う。水にひたす。『毛詩』衛風・氓に「淇水湯湯、

漸車帷裳。』『漢書』董仲舒伝に「漸民以仁、摩民以誼」、顔師

古注に「漸謂浸潤之、摩謂砥礪之也。」

⑥六合承流 「六合」は、『莊子』齊物論に「六合之外、聖人存

而不論。六合之内、聖人論而不議」、成玄英疏に「六合者、謂

天地四方也。」

「承流」は、『史記』三王世家に「百蠻之君、靡不鄉風、承流

稱意。』『後漢書』文苑伝・杜篤伝に「太宗承流、守之以文」、

李賢注に「太宗、文帝也。繼體之君、以文德守之。」

正月元旦には、朝賀に訪れる臣下が魚の鱗のごとく集まる。

中原の地からは貢ぎ物を献上し、八方の遠い地域からは異民族たちが朝見する。

礼服を身につけた者たちが宮廷に充ち、佩玉を帯びた者たちが朝会の位置に溢れている。

正しく整列するさまは見事で、朝廷の威光が見て取れる。

儀式の次第はしかるべき時にもとづき、その礼法威儀は輝き明らかである。

皇帝が多くのお受けになることを思い、天がよろこび福祿を与えることは、永遠に尽きることがない。

○押韻 「萃・類・位」は去声6「至」。「光」は下平11「唐」。「彰・央」は下平10「陽」。

①三正元辰 「三正」は夏・殷・周三代の曆。「正」は正月。 に「元辰、蓋郊後吉辰也」とあり、吉辰の意もある。

『尚書』甘誓に「有扈氏威侮五行、怠棄三正」、偽孔伝に「怠惰棄廢天地人之正道」、陸徳明釈文に「馬（融）云、建子、建丑、建寅、三正也。」また『史記』曆書四に「夏正以正月、殷

正以十二月、周正以十一月。蓋三王之正若循環、窮則反本。天下有道、則不失紀序。無道、則正朔不行於諸侯。」

『元辰』は元旦。晋の庾闡「揚都賦」（『太平御覽』卷二九）に「歲惟元辰、陰陽代紀。履端歸餘、三朝告始。」また、『礼記』月令に「（孟春之月）乃擇元辰、天子親載耒耜」、鄭玄注

②朝慶鱗萃 百納本では「鱗」の字を缺く。『三国志』蜀書・劉

琰伝に「琰竟棄市、自是大臣妻母朝慶遂絶。」

『文選』卷七司馬相如「子虚賦」に「珍怪鳥獸、萬端鱗萃」、張銑注に「言非常瑰美、珍怪寶物鳥獸之屬、萬端如魚鱗之聚、

充滿於山澤之中。」

③華夏奉職貢 『尚書』武成に「華夏蠻貊、罔不率俾、恭天成

命」、偽孔伝に「冕服采章曰華、大國曰夏」、疏に「釋詁云、

夏、大也。故大國曰夏。華夏謂中國也。」

「職貢」はみつぎもの。『左伝』襄公二十九年に「魯之於晉也、職貢不乏、玩好時至。」

④八荒觀殊類 『漢書』項籍伝贊に「并吞八荒之心」、顔師古注に「八荒、八方荒忽極遠之地也。」劉向『說苑』辨物に「八荒之内有四海、四海之内有九州、天子處中州而制八方耳。」

「殊類」は、『文選』卷七・司馬相如「子虛賦」に「若乃儼儼瑰偉、異方殊類、珍怪鳥獸、萬端麟萃、充仞其中、不可勝記。」

⑤黻冕 黻冕はひざかけと冠。いずれも祭服。『論語』泰伯に「惡衣服、而致美乎黻冕」、疏に「黻冕、皆祭服也。」

⑥鳴玉盈朝位 『國語』楚語下に「王孫圉聘於晉（王孫圉楚大夫也）、定公饗之。趙簡子鳴玉以相（定公、晉頃公之子午也。簡子、趙缺也。鳴玉、鳴其佩玉以相禮）。」〈内は韋昭注。

「朝位」は朝会における秩序だった位置をいう。『周礼』秋官・大行人に「上公之禮……其朝位賓主之間九十步、立當車軹。」「礼記』坊記に「子云、夫禮者、所以章疑別微、以爲民坊者也。故貴賤有等、衣服有別、朝廷有位、則民有所讓」、注に「位、朝位也。」

⑦濟濟 『毛詩』大雅・文王に「濟濟多士、文王以寧」、毛伝に

「濟濟、多威儀也。」『毛詩』大雅・公劉に「跄跄濟濟、俾筵俎几」、鄭箋に「濟濟、士大夫之威儀也。」

⑧言觀其光 『毛詩』小雅・庭燎に「君子至止、言觀其旂。」荀勗『食學樂東西箱歌十二篇』の「振鷺一章」にも「君子來朝、言觀其極」とみえる。当該歌注⑦参照。

⑨儀序既以時 「儀序」は儀式の次第。『後漢書』方術伝上・謝夷吾伝に「夷吾、後以行春乘柴車、從兩吏、冀州刺史上其儀序失中、有損國典、左轉下邳令。」

『周易』升に「象曰、柔以時升（柔以其時乃得升也。）巽而順、剛中而應、是以大亨。（純柔則不能自升、剛亢則物不從、既以時升。）」〈内は王弼注。

⑩禮文渙以彰 『毛詩』小雅・桑扈序に「桑扈、刺幽王也、君臣上下動無禮文焉」、鄭箋に「動無禮文、舉事而不用先王禮法威儀也。」「漢書』礼樂志二に「周監於二代、禮文尤具（師古曰、監、觀也。二代、夏殷也。言周觀夏殷之禮、而增損之。）。」

⑪思皇享多祜 『毛詩』周頌・載見に「永言保之、思皇多祜」、鄭箋に「言我皇君也。諸侯既以朝禮、見於成王、至祭時、伯

又率之見於武王廟、使助祭也。以致孝子之事、以獻祭祀之禮、以助壽考之福、長我安行此道、思成王之多福」とあるのに基づく。

に「假樂、嘉成王也」、毛伝に「假、嘉也」、鄭箋に「顯、光也。天嘉樂成王有光光之善德、安民官人、皆得其宜、以受福祿於天。」

⑫嘉樂永無央

『礼記』中庸に「詩曰、嘉樂君子、憲憲令德」、疏に「詩曰、嘉樂君子、憲憲令德者、此大雅嘉樂之篇、美成王之詩。」「毛詩』大雅・假樂に「假樂君子、顯顯令德」、小序

「央」は、つきる。『楚辭』離騷に「及年歲之未晏兮、時亦猶其未央」、王逸注に「央、盡也。」

九賓<sup>①</sup>在庭 臚讚<sup>②</sup>既通

九賓 庭に在り 臚讚<sup>ろさん</sup> 既に通ず

升瑞<sup>③</sup>奠贊<sup>④</sup> 乃侯乃公

瑞を<sup>あ</sup>上げて<sup>にえ</sup>贊を<sup>そな</sup>奠うるは 乃ち侯乃ち公

穆穆<sup>⑤</sup>天尊 隆禮<sup>⑥</sup>動容

穆穆たる天尊 禮を<sup>さかん</sup>動容に隆<sup>にす</sup>

履端<sup>⑦</sup>承元吉 介福<sup>⑧</sup>御萬邦

履端 元吉を承け 介福 萬邦を御す

九賓は朝廷に居並び、大鴻臚の讚（伝えることば）がすでに行われている。

五瑞をたてまつり贈り物を献上するのは、侯爵と公爵と。

素晴らしい貴き天子は、挙止容儀において礼を盛んにされる。

年の初めに大いなる吉を受け、この上ない福により万邦を統治する。

○押韻 「通・公」は上平1 「東」、「容」は上平3 「鍾」、「邦」は上平4 「江」。

①九賓 「九賓」は九種の賓客。『史記』廉頗藺相如伝に「今大

王亦宜齋戒五日、設九賓於廷、臣乃敢上璧」、集解に「韋昭

曰、九賓則周禮九儀。』『文選』卷三・張衡「東京賦」に「爾

乃九賓、重臚人列」、薛綜注に「言鴻臚所主、羌胡之人、皆羅

列於朝廷也」、李善注に「漢書曰、羣臣朝十月儀、大行人設九

賓、臚句傳。韋昭曰、九賓則周禮曰九儀、謂公、侯、伯、子、

男、孤、卿、大夫、士也。臚、傳也、次以傳上令也。蘇林曰、

上傳語告下臚、下傳告上句。臚、猶行也。二訓雖殊、皆以行

上語爲臚也。』『周礼』秋官・大行人に「以九儀辨諸侯之命、

等諸臣之爵、以同邦國之禮、而待其賓客」、鄭玄注に「九儀謂

命者五、公・侯・伯・子・男也。爵者四、孤・卿・大夫・士

也。』

②臚讀 『漢書』叔孫通伝に「大行設九賓、臚句傳」、顏師古注

に「蘇林曰、上傳語告下爲臚、下告上爲句也。」注①所引「東

京賦」注参照。「臚」は上から下に向けて伝える意を持つが、

ここでは儀式のことばを伝える大鴻臚を指すか。「讚」は

「贊」に通じ、告げること。『尚書』咸有一德に「伊陟贊于巫

咸」、偽孔伝に「贊、告也。巫咸、臣名、皆上。」

『宋書』礼志一に「晉武帝世、更定元會注、今有咸寧注是也。

……咸寧注、先正月一日、守宮宿設王公卿校便坐於端門外、

大樂鼓吹又宿設四廂樂及牛馬帷閣於殿前。夜漏未盡十刻、

羣臣集到、庭燎起火。上賀謁報、又賀皇后。還從雲龍東中華

門入謁、詣東閣下便坐。漏未盡七刻、羣司乘車與百官及受贊

郎下至計吏、皆入、詣陞部立。其陞衛者、如臨軒儀。漏未盡

五刻、謁者僕射、大鴻臚各奏、「羣臣就位定。」漏盡、侍中奏、

「外辦。」皇帝出。鍾鼓作、百官皆拜伏。太常導皇帝升御座。

鍾鼓止。百官起。大鴻臚跪奏、「請朝賀。」治禮郎讚、「皇帝

延王登。」大鴻臚跪讚、「蕃王臣某等奉白璧各一、再拜賀。」太

常報、「王悉登。」謁者引上殿、當御座。皇帝興、王再拜。皇

帝坐、復再拜、跪置璧御座前、復再拜。成禮訖、謁者引下殿、

還故位」とある。「臚」・「讚」は、元会の儀式において行われ

る最初のやりとりの中で、大鴻臚がことばを発するさまを

いうものか。

③升瑞奠贊 「升」は薦め献上する。『礼記』王制に「命鄉論秀

士、升之司徒曰選士」、鄭玄注に「移名於司徒也。秀士、鄉大夫所考、有德行道藝者。」「瑞」は五瑞。公侯伯子男の所持する瑞圭璧。『尚書』舜典に「正月上日、受終于文祖。……輯

五瑞、既月乃日、覲四岳羣牧、班瑞于羣后」、偽孔伝に「輯、斂。既、盡。覲、見。班、還。后、君也。舜斂公侯伯子男之瑞圭璧、盡以正月中、乃日日見四岳及九州牧監、還五瑞於諸侯、與之正始。』『周礼』大宗伯に「公執桓圭（公、二王之後及王之上公。雙植謂之桓。桓、宮室之象、所以安其上也。桓圭、蓋亦以桓爲瑑飾、圭長九寸長也）、侯執信圭、伯執躬圭（信當爲身、聲之誤也。身圭、躬圭、蓋皆象以人形爲瑑飾、文有羸縶耳。欲其慎行以保身。圭皆長七寸）、子執穀璧、男執蒲璧（穀所以養人、蒲爲席、所以安人。二玉蓋或以穀爲飾、或以蒲爲瑑飾。璧皆徑五寸、不執圭者、未成國也）」とある。〈 〉内は鄭玄注。また『史記』五帝本紀に「揖五瑞、擇吉月日、見四嶽諸牧、班瑞」、『集解』に「馬融曰……五瑞、公侯伯子男所執、以爲瑞信也。堯將禪舜、使羣牧斂之、使舜親往班之」とある。ここでいう「升瑞」は、元会において公侯伯子男の瑞圭璧を一旦収め、符信の玉をあらためた後に返却

する儀式をいうか。注②所引『宋書』礼志一を参照。但し、臣等が白璧を奉じたとはあるが、『尚書』に見えるような儀式は見当たらない。

「奠贄」については、『尚書』康王之誥に「賓稱奉圭兼幣、曰、一二臣衛、敢執壤奠」、偽孔伝に「贄、諸侯也。舉奉圭兼幣之辭。言一二、見非一也。爲蕃衛、故曰臣衛。來朝而遇國喪、遂因見新王、敢執壤地所出而奠贄也。』「奠」は献上する。『礼記』玉藻に「唯世婦命於奠爾、其他則皆從男子」、鄭玄注に「奠、猶獻也。』「贄」は贈り物。『尚書』舜典に「三帛、二生、一死贄」、偽孔伝に「二生、卿執羔、大夫執鴈。一死、士執雉。玉、帛、生、死、所以爲贄以見之。』『左伝』莊公二十四年に「男贄、大者玉帛、小者禽鳥、以章物也。女贄、不過榛、栗、棗、脩、以告虔也。』

④乃侯乃公 『尚書』大禹謨に「乃聖乃神、乃武乃文。』

⑤穆穆天尊 『毛詩』大雅・文王に「穆穆文王、於緝熙敬止、毛伝に「穆穆、美也。』

『周易』繫辭伝上に「天尊地卑、乾坤定矣。』『礼記』樂記に「天尊地卑、君臣定矣。卑高以陳、貴賤位矣。』

⑥隆禮動容 「隆禮」は、「礼記」経解に「是故隆禮、由禮、謂之有方之士。不隆禮、不由禮、謂之無方之民」、鄭玄注に「隆禮、謂盛行禮也。方、猶道也。」「荀子」議兵に「隆禮貴義者其國治、簡禮賤義者其國亂。」

「動容」については、「孟子」尽心下に「動容周旋中禮者、盛德之至也」、注に「人動作容儀周旋中禮者、盛德之至。」

⑦履端承元吉 「履端」は新年を迎えること。元日。「左伝」文公元年に「先王之正時也、履端於始、舉正於中、歸餘於終」、杜預注に「步曆之始、以爲術之端首」、孔穎達疏に「履、歩也、謂推步曆之初始、以爲術曆之端首。」

「元吉」は、『周易』坤に「象曰、黃裳元吉、文在中也」、王弼注に「用黃裳而獲元吉、以文在中也」、孔穎達疏に「元、大也。以其德能如此、故得大吉也。」

⑧介福御萬邦 「介福」は、『周易』晋に「受茲介福於其王母」、孔穎達疏に「受茲介福于其王母者、介者、大也。母者、處内而成德者也。」「毛詩」小雅・楚茨に「報以介福、萬壽無疆。」  
「萬邦」は、『尚書』堯典に「百姓昭明、協和萬邦、黎民於變時雍」、偽孔伝に「昭、亦明也。協、合。黎、衆。衆、衆。時、是。雍、和也。言天下衆民皆變化從上、是以風俗大和。」

(林 香奈)

- 朝享<sup>①</sup> 上下咸雍<sup>②</sup> 朝享 上下咸く雍らぐ  
崇多儀<sup>③</sup> 繁禮容<sup>④</sup> 多儀を崇くし 禮容を繁くす  
舞盛德<sup>⑤</sup> 歌九功<sup>⑥</sup> 盛德を舞い 九功を歌う  
揚芳烈<sup>⑦</sup> 播休蹤<sup>⑧</sup> 芳烈を揚げ 休蹤を播く  
皇化洽<sup>⑨</sup> 洞幽明<sup>⑩</sup> 皇化洽く 幽明を洞く  
懷柔百神<sup>⑪</sup> 輯祥禎<sup>⑫</sup> 百神を懷柔し 祥禎を輯む

潜龍躍 <sup>①</sup>	雕虎仁 <sup>①</sup>	潜龍躍り	雕虎仁あり
儀鳳鳥 <sup>⑤</sup>	届游麟 <sup>⑥</sup>	鳳鳥を儀せしめ	游麟を届らしむ <sup>⑧</sup>
枯蠹榮	竭泉流 <sup>⑦</sup>	枯蠹榮き	竭泉流る
菌芝茂 <sup>⑬</sup>	枳棘柔 <sup>⑨</sup>	菌芝茂り	枳棘柔らかし
和氣應 <sup>⑳</sup>	休徵滋 <sup>㉑</sup>	和氣應じ	休徵滋し
協靈符 <sup>㉒</sup>	彰帝期 <sup>㉓</sup>	靈符に協い <sup>かな</sup>	帝期を彰らかにす
綏宇宙 <sup>㉔</sup>	萬國和	宇宙を綏んじ <sup>やす</sup>	萬國和らぐ
昊天成命 <sup>㉖</sup>	賚皇家 <sup>㉗</sup>	昊天 命を成し	皇家に賚う <sup>たま</sup>
賚皇家		皇家に賚う	

朝享では、君臣はみな喜び和らぐ。

多くの儀式を立派にし、礼に則ったしつらえを盛んにする。

舞で盛んなる徳を表し、歌で九つのはたらきを讃える。

すぐれた勲功を称揚して、すばらしい事跡を敷き広める。

皇帝陛下の徳政による教化はあまねく行き渡り、有形無形・陰陽をも貫く。

多くの神霊を招き安らげ、吉祥を集める。

潜んでいた龍が躍り上がり、斑紋がある虎も仁義を備える。

鳳凰をやつてこさせ、麒麟を到らせる。

枯れて虫に食われた木に再び花が咲き、涸れた泉からまた水が流れ出す。

靈芝が茂り、枳や棘のとげも柔らくなる。

陰陽和合の気は応じて生じ、めでたきしるしは繁く現れる。

天から下された符命に合い、皇帝となるときを明らかにする。

宇宙を安んじて、よろずの国が調和する。

天はすでに定まっていた命を、わが晋王朝に下された、わが晋王朝に下された。

○押韻 「雍・容・蹤」は上平3 「鍾」、「功」は上平1 「東」。「明は」下平12 「庚」、「禎」は下平14 「清」。「仁・麟」は上平17

「眞」。「流・柔」は下平18 「尤」。「滋・期」は上平7 「之」。「和」は下平8 「戈」、「家」は下平9 「麻」。

①朝享 政を廟で受ける儀礼。朝廟。「周礼」春官・司尊彝に 於朝享、往時之失也。」

②上下咸雍 『礼記』経解に「發號出令而民說、謂之和。上下

「凡四時之間祀、追享・朝享、裸用虎彝・雉彝、皆有舟」、鄭玄注に「朝享、謂朝受政於廟、賈公彦疏に「云朝享謂朝受政

於廟者、謂天子告朔於明堂、因即朝享。朝享、即祭法謂之月

祭。」『宋書』樂志一に「魏雅樂四曲、一曰鹿鳴、後改曰於赫、

詠武帝。二曰騶虞、後改曰魏魏、詠文帝。三曰伐檀、後省除。

四曰文王、後改曰洋洋、詠明帝。騶虞・伐檀・文王竝左延年

改其聲。正旦大會、太尉奉璧、羣后行禮、東箱雅樂即作者是

也。今謂之行禮曲、姑洗箱所奏。按鹿鳴本以宴樂爲體、無當 惟曰不享」、偽孔伝に「奉上謂之享。言汝爲王、其當敬識百

句に付けている。

③多儀 多くの儀式。『尚書』周書・洛誥に「公曰、已、汝惟沖

子惟終。汝其敬識百辟享、亦識其有不享。享多儀、儀不及物、

惟曰不享」、偽孔伝に「奉上謂之享。言汝爲王、其當敬識百

君諸侯之奉上者、亦識其有違上者。奉上之道多威儀、威儀不及禮物、惟曰不奉上。」

④禮容 礼に則つたしつらえ。『史記』孔子世家に「孔子爲兒嬉戲、常陳俎豆、設禮容。」

⑤盛徳 高くすぐれた徳。『毛詩』大序に「頌者、美盛徳之形容、以其成功、告於神明者也。」

⑥九功 九つのはたらき。六府と三事を合わせて言う。『尚書』大禹謨に「禹曰、『於、帝念哉。徳惟善政、政在養民。水火金木土穀惟修（言養民之本在先修六府）、正徳・利用・厚生惟和（正徳以率下、利用以阜財、厚生以養民、三者和、所謂善政）、九功惟叙、九叙惟歌（言六府三事之功有次叙、皆可歌樂、乃徳政之致）。』」左伝「文公七年に「六府三事、謂之九功。水・火・金・木・土・穀、謂之六府。正徳・利用・厚生、謂之三事。」

⑦芳烈 すぐれた勲功。班固『典引』（『文選』卷四八）に「扇遺風、播芳烈、久而愈新、用而不竭。」蔡邕『郭林宗碑』（『蔡中郎集』卷二）に「俾芳烈奮乎百世、令聞顯于無窮。」

⑧休蹤 すぐれた事蹟。「休」はすばらしいこと。『毛詩』大

雅・江漢に「虎拜稽首、對揚王休、作召公考」、鄭箋に「對、荅。休、美。作、爲也。虎既拜而荅王策命之時、稱揚王之徳美、君臣之言宜相成也。」「蹤」は事蹟。王逸「九思」怨上に「進惡兮九句、復顧兮彭務。擬斯兮二蹤、未知兮所投」、注に「擬、則也。蹤、跡也。言願效此二賢之迹、亦當自沈。』樂府詩集」卷一三はこの歌辭を二章に分けて、ここまでを一章としている。

⑨皇化 皇帝の徳政の教化。『毛詩』大序に「周南・召南、正始之道、王化之基」と見える「王化」と同じに解した。

⑩幽明 有形・無形の事象。『周易』繫辭伝上に「仰以觀于天文、俯以察于地理、是故知幽明之故」、韓康伯の注に「幽明者、有形无形之象。」また、日月、陰陽を指す。『礼記』祭義に「祭日於壇、祭月於坎、以別幽明、以制上下」、鄭玄の注に「幽明者、謂日照晝、月照夜。」

⑪懷柔百神 さまざまな神靈を來たらしめて安んずる。『毛詩』周頌・時邁に「懷柔百神、及河喬嶽」、毛伝に「懷、來。柔、安。喬、高也。高岳、岱宗也」、鄭箋に「王行巡守、其至方岳之下、來安羣神、望于山川、皆以尊卑祭之。」

⑫祥禎 吉祥。『毛詩』周頌・維清に「迄用有成、維周之禎」、毛伝に「迄、至。禎、祥也。」

⑬潛龍 潜んでいてまだ天に昇らない龍。『周易』乾卦・文言伝に「初九潛龍勿用。……初九曰潛龍勿用、何謂也。子曰、『龍徳而隠者也。不易乎世、不成乎名、遯世无悶、不見是而

无悶、樂則行之、憂則違之、確乎其不可拔、潛龍也。』」

⑭彫虎 虎のこと。虎には斑紋があるので「彫」を用いる。『後漢書』張衡伝「思玄賦」に「執彫虎而試象兮、跼焦原而跟止」、李賢注に「彫虎、有文也。跼、臨也。焦原、原名也。跟、足踵也。尸子曰、『中黃伯曰、我左執大行之獲、右執彫虎、唯象之未試、吾或焉。有力者則又願爲牛、與象、自謂天下之義人也。惡乎試之。曰、夫貧窮、大行之獲也。跡賤者、義之彫虎也。吾日試之矣。』」

⑮儀鳳鳥 鳳凰がやってくることを。瑞祥とされる。「儀」は来儀。『尚書』益稷に「簫韶九成、鳳皇來儀」、偽孔伝に「韶、舜樂名。言簫、見細器之備。雄曰鳳、雌曰皇、靈鳥也。儀、有容儀。備樂九奏而致鳳皇、則餘鳥獸不待九而率舞」、孔穎達疏に「簫韶之樂作之九成、以致鳳皇來而有容儀也。」

⑯屆游麟 「屆」は至る。『尚書』大禹謨に「益贊于禹曰、『惟徳動天、無遠弗屆』」、偽孔伝に「贊、佐。屆、至也。益以此義佐禹、欲其修徳致遠。」「游麟」は外を歩く麒麟。『淮南子』覽冥訓に「鳳皇翔於庭、麒麟游於郊」、高誘注に「游、行也。郊、邑外也。」

⑰枯蠹・竭泉二句 「枯蠹」は枯れて虫に食われた木。「榮」は花が咲くこと。「竭泉」は涸れた泉。渴泉。曹植「七啓」(『文選』卷三四)に「鏡機子曰、『夫辯言之豔、能使窮澤生流、枯木發榮。』」

⑱菌芝茂 「菌芝」は靈芝。『列子』湯問に「朽壤之上有菌芝者、生於朝、死於晦。」ここではすぐに死んでしまうものが「茂」ることをいう。『後漢書』張衡伝の「思玄賦」に「漱飛泉之澀液兮、咀石菌之流英」、李賢注に「澀液、微流也。咀、嚼也。石菌、芝也。英、華也。」

⑲枳棘柔 「枳棘」はからたちといばら。とげが多いために悪木とされる。『韓非子』外儲説左下に「主俛而笑曰、『夫樹橘柚者、食之則甘。樹枳棘者、成而刺人、故君子慎所樹。』」ここではとげの多い木が「柔」らかであることをいう。

⑳和氣應 「和氣」は陰陽和合の氣。『論衡』講瑞に「且瑞物皆起和氣而生、生於常類之中、而有詭異之性、則爲瑞矣。」また、張華『博物志』卷一・物産に「和氣相感、則生朱草、山出象車、澤出神馬、陵出黑丹、阜出土怪、江出大貝、海出明珠、仁主壽昌、民延壽命。天下太平。」

㉑休徵滋 「休徵」は吉祥の兆候。『尚書』洪範に「曰休徵」、偽孔伝に「敍美行之驗。」「漢書」終軍伝に「故周至成王、然後制定、而休徵之應見」、顔師古注に「休、美也。徵、證也。」「滋」は底本は「絃」に作るが、中華書局本（修訂本）が殿本・局本・『樂府詩集』卷二三によつて改めたのに従う。

㉒靈符 神靈の符命。『宋書』樂志四・曹植「鞞舞歌・大魏篇」に「大魏應靈符、天祿方甫始。」「宋書」樂志四・傅玄「晋鞞舞歌五篇・洪業篇」に「宣文創洪業、盛徳在泰始。聖皇應靈符、受命君四海。」

世資聖哲<sup>①</sup>

三后在天<sup>②</sup> 啓鴻烈<sup>③</sup>  
啓鴻烈 隆王基<sup>④</sup>

世よ聖哲に資り

三后 天に在り 鴻烈を啓く  
鴻烈を啓き 王基を隆くす

㉓帝期 受命の時。『宋書』樂志四・繆襲「魏鼓吹曲十二篇・応帝期曲」に「應帝期、於昭我文皇」、序に「漢第十曲有所思、今第十曲應帝期、言曹文帝以聖徳受命、應運期也。」

㉔宇宙 天地古今。すべての存在物を包括する空間。『淮南子』原道訓に「横四維而含陰陽、絃宇宙而章三光。」、高誘注に「四方上下曰宇、古往今來曰宙、以喻天地。」

㉕昊天成命 「昊天」は、大空、天。『毛詩』周頌・昊天有成命に「昊天有成命、二后受之。成王不敢康、夙夜基命宥密」、毛伝に「二后、文武也。基、始。命、信。宥、寬。密、寧也」、鄭箋に「昊天、天大號也。有成命者、言周自后稷之生而已有王命也。」

㉖皇家 皇室。また王朝を指す。曹植「王仲宣誄」(『文選』卷五六)に「皇家不造、京室隕顛」、呂向の注に「皇家、漢室也。造、成也。京室、洛陽也。隕顛、謂墜落。」

率土謳吟<sup>⑤</sup> 欣戴于時<sup>⑥</sup>

率土謳吟して 時に欣戴す<sup>③</sup>

恒文示象<sup>⑦</sup> 代氣著期<sup>⑧</sup>

恒文象を示し 代氣期を著わす

代々道徳と才知に優れたお方を頼みとし、その三代（宣帝・景帝・文帝）の君主は天におわす、（その君たちが）大いなる功業を打ち立てられた。

大いなる功業を打ち立て、わが晋王朝の礎を盛んにされた。

天下中の人々は歌って讃え、いまこの時世を慶んで押し戴いている。

天のあやに徴が示され、天の運氣が（魏から晋へと）かわり晋は王朝の期を明らかにした。

○押韻 「哲・烈」は入声17「薛」。「基・時・期」は上平7「之」。

①資聖哲 聖哲なる君主を頼りとする。「資」はよる。『淮南 宣帝・景帝・文帝を指す。』

子 主術訓に「夫七尺之機而制船之左右者、以水爲資。」③鴻烈 大いなる功業。『漢書』揚雄伝下の「解難」に「典謨之

哲」は道徳と才知にすぐれた人物。『左伝』文公六年に「古 篇、雅頌之聲、不濫純深潤、則不足以揚鴻烈而章緝熙」、顔師

之王者、知命之不长、是以竝建聖哲」、孔穎達疏に「聖哲是人 古注に「造化鴻大也。烈、業也。緝熙、光明也。」

之偶者、故摠言之耳。」

②三后在天 三人の帝王がすでに物故して天に在る。『毛詩』 ④王基 帝王の基業。揚雄「蜀都賦」に「王基既夷、蜀侯尚叢。」

大雅・下武に「三后在天、王配于京」、毛伝に「三后、大王。 ⑤率土謳吟 「率土」は天下すべて。傅玄「晋天地郊明堂歌五

王季・文王也。王、武王也。」ここでは武帝に先立つ三代の 篇・明堂饗神歌」に既出。 「謳吟」は歌唱・吟詠すること。『漢書』叙伝上に「今民皆謳

吟思漢、郷仰劉氏、已可知矣。」

⑥欣戴于時 「欣戴」は喜んで推し戴く。『国語』周語上に「庶民不忍、欣戴武王。」

を指す。班固「典引」(『文選』卷四八)に「懸象闇而恒文乖、舜倫數而舊章缺」、呂向注に「懸象・恒文、日・月・星也。舜、常。倫、理。數、敗也。舊章、古書也。」

「于時」はここで、ここにおいて。『毛詩』大雅・公劉に「于時處處、于時廬旅、于時言言、于時語語」、鄭箋に「于、於。時、是也。」

⑧代氣著期 「代氣」は運氣がかわること。「著」は明らかに示すこと。『礼記』祭法に「帝嚳能序星辰以著衆」、鄭玄注に「著衆、謂使民興事、知休作之期也。」

⑦恒文示象 「恒文」は天にいつも懸かっているあや。日月星

泰始開元<sup>①</sup> 龍升在位<sup>②</sup> 泰始 元を開き 龍升して位に在り

四隩同風<sup>③</sup> 變寧殊類<sup>④</sup> 四隩 風を同くし 殊類を變寧す

五臚來備<sup>⑤</sup> 嘉生以遂<sup>⑥</sup> 五臚來たり備わり 嘉生以て遂る<sup>な</sup>

大いなる始め国の基が開かれ、主君は龍のごとく昇つて帝位に即いた。

四方の隅々まで風俗を同じくし、異民族を和らげ安んじた。

五つの氣候が正しくやってきて、豊かな実りがこうして育つ。

○押韻 「位・類・遂」は去声6「至」。

①泰始開元 「泰始」は西晋武帝(司馬炎)のときの年号(二六五―二七四)。この歌辭は泰始五(二六九)年に作られた。

また、大道のはじめ。「泰」と「大」は通じる。『周易』繫辭伝上に「乾知大始、坤作成物」、陸德明「經典釈文」に「大、王肅作泰。坤作、虞・姚作坤化。」

「開元」は基を開くこと。班固「東都賦」(『文選』卷二)に「夫大漢之開元也、奮布衣以登皇位」、呂延濟注に「元、始也。奮、起也。布衣、庶人之服。皇、大也。言漢始起庶人之服以登大位。」

②龍升 龍が天に昇ること。ここでは天子の位に即くことを指す。『三國志』蜀書・先主伝に「孝經援神契曰、『德至淵泉、則黃龍見、龍者、君之象也。易乾九五『飛龍在天』、大王當龍升、登帝位也。』」

③四隕同風 「四隕」は四方。『尚書』禹貢に「九州攸同(所同事在下)、四隕既宅(四方之宅已可居)、九山刊旅、九川滌源、九澤既陂、四海會同、六府孔修。」

「同風」は風俗を同じくすること。ここでは天下が統一されたことをいう。『漢書』王吉伝に「春秋所以大一統者、六合同風、九州共貫也。」

④變寧殊類 「變寧」は和らげ安んずること。『尚書』洪範に

「一、三徳。一曰正直、二曰剛克、三曰柔克(和柔能治、三者皆徳)。平康正直、彊弗友剛克、變友柔克(變、和也。世和順、以柔能治之)。」

「殊類」は類を異にする。西晋・石崇「王明君辭」(『文選』卷二七)に「殊類非所安、雖貴非所榮。」ここでは異民族を指すと解した。

⑤五臚來備 五つの氣候が正しくやってくる。「五臚」は雨。陽(はれ)・燠(あつさ)・寒(風五種の氣候。五是、五氏とも。『尚書』洪範に「八、庶徴。曰雨、曰暘、曰燠、曰寒、曰風、曰時。五者來備、各以其敍、庶草蕃廡、偽孔伝に「言五者備至、各以次序、則衆草蕃滋廡豐也。」また、『後漢書』荀爽伝に「人事如此、則嘉瑞降天、吉符出地、五臚咸備、各以其敍矣」、李賢注に「臚、是也。史記曰、『休徴。曰肅、時雨若。曰暘、時暘若。曰哲、時燠若。曰謀、時寒若。曰聖、時風若。』五是來備、各以其敍也。」

⑥嘉生以遂 「嘉生」はよく実った穀物。また、めでたいもの、瑞祥とされた。『国語』周語下に「陰陽序次、風雨時至、嘉生繁祉、人民歛利、物備而樂成、上下不罷、故曰樂止。」

「遂」は成る。「礼記」月令に「四方來集、遠鄉皆至、則財不匱、上無乏用、百事乃遂」、鄭注に「匱亦乏也。遂猶成也。」

『樂府詩集』卷一三は、本歌辭と次歌辭（泰始開元）から「惟晉之祥」まで）を続けて一章とする。

疑庶績<sup>①</sup> 臻大康<sup>②</sup>

庶績を疑し 大康を臻す

申繁祉<sup>③</sup> 胤無疆<sup>④</sup>

繁祉を申ね 無疆を胤ぐ

本枝百世<sup>⑤</sup> 繼緒不忘<sup>⑥</sup>

本枝百世 緒を繼ぎて忘れず

繼緒不忘 休有烈光<sup>⑦</sup>

緒を繼ぎて忘れず 休んに烈光有り

永言配命<sup>⑧</sup> 惟晉之祥<sup>⑨</sup>

永く言に命を配せられん 惟れ晉の祥あらん

百官の多くの功績を成就させ、人々が大いに安らぎ樂しむ世をもたらした。多くの福祿を重ねて、永遠につなぐ。

本家も分家もみないつまでも榮え、祖先の大業を受け継いで忘れぬ。

祖先の大業を受け継いで忘れずに、盛んに輝かしい実績を備えている。

永きにわたって天命に従わん、晋朝に幸いあれ。

○押韻 「康・光」は下平11「唐」、「疆・忘・祥」は下平10「陽」。

①疑庶績 「疑」を中華書局本は「凝」に作る。「凝」に通じ 工惟時、撫于五辰、庶績其凝、偽孔伝に「凝、成也。言百官

る。「庶績」は多くの功績。「尚書」皋陶謨に「百僚師師、百 皆撫順五行之時、衆功皆成。」

②大康 大いに楽しむ。社会が太平安楽であること。『毛詩』唐風・蟋蟀に「無已大康、職思其居」、毛伝に「已、甚。康、樂。職、主也。」

③申繁祉 多くの福を重ねる。「申」は重ねる。『毛詩』小雅・采芣に「樂只君子、福祿申之」、毛伝に「申、重也。」「繁祉」は多くの福。『毛詩』周頌・雝に「綏我眉壽、介以繁祉」、鄭箋に「繁、多也。文王之德、安及皇天、謂降瑞應、無變異也。又能昌大其子孫、安助之以考壽與多福祿。」

④胤無疆 永久に続く流れを継承する。「胤」は継ぐ。『尚書』洛誥に「予乃胤保、大相東土、其基作民明辟」、偽孔伝に「我乃繼文武安天下之道、大相洛邑、其始爲民明君之治。」「無疆」は限りないこと。『尚書』大誥に「延洪惟我幼冲人、嗣無疆大歷服」、偽孔伝に「言子孫承繼祖考無窮大數、服行其政。」⑤本枝百世 子孫がみないつまでも栄えること。「本枝」は本家と分家。樹木の幹と枝で表す。本文。「百世」は世々々々、いつまでも。『毛詩』大雅・文王に「陳錫哉周、侯文王孫子。文王孫子、本支百世」、毛伝に「哉、載。侯、維也。本、本宗也。支、支子也」、鄭箋に「哉、始。侯、君也。……乃由能敷

恩惠之施、以受命造始周國、故天下君之。其子孫適爲天子、庶爲諸侯、皆百世。」

⑥繼緒不忘 「繼緒」は祖先の功業を継承すること。『漢書』礼楽志・安世房中歌に「樂終産、世繼緒」、顔師古注に「言傳祚無窮。」この句全体としては、『毛詩』周頌・閔予小子に「維予小子、夙夜敬止。於乎皇王、繼序思不忘」、鄭箋に「我繼其緒、思其所行不忘也」とあるのを踏まえるか。

⑦休有烈光 盛んに輝かしい光があること。「休」はさかんに。「烈光」は明らかかなひかり。『毛詩』周頌・載見に「儻革有鶴、休有烈光」、毛伝に「儻革有鶴、言有法度也」、鄭箋に「儻革、鸞首也。鶴、金飾貌。休者、休然盛壯。」

⑧永言配命 『毛詩』大雅・文王に「無念爾祖、聿脩厥徳。永言配命、自求多福」、毛伝に「聿、述。永、長。言、我也。我長配天命而行、爾庶國亦當自求多福。」『毛詩』大雅・下武に「王配于京、世徳作求。永言配命、成王之孚。」

⑨惟晉之祚 晋王朝が天のさいわいを受けることをいう。『毛詩』周頌・維清に「維清緝熙、文王之典。肇禋、迄用有成、維周之禎」、毛伝に「迄、至。禎、祥也。」『宋書』楽志二・傅

玄「晋郊祀歌・饗天地五郊歌」に「皇極斯建、庶績咸熙。庶幾夙夜、惟晉之祺。」

聖明統世<sup>①</sup> 篤皇仁<sup>②</sup> 聖明世を統べ 皇仁を篤くす

廣大配天地<sup>③</sup> 順動若陶鈞<sup>④</sup> 廣大は天地に配し 順動は陶鈞の若し<sup>こと</sup>

玄化參自然<sup>⑤</sup> 至德通神明<sup>⑥</sup> 玄化 自然に參じ 至德 神明に通ず

清風暢八極<sup>⑦</sup> 流澤被無垠<sup>⑧</sup> 清風 八極に暢び 流澤 無垠に被る

英明で聖哲なる天子はこの世界を統べ、大いなる仁徳を厚く行き渡らせる。

天子の徳の広大さは天地に等しく、何の妨げもなく行動するのは（国を治めるはたらきを持つ）輓轡のようである。

玄妙なる教化は人為を加えない自然と並び、これ以上なく高い徳は明智ある神に通じる。

清らかな風は世界の果てまで伸びてゆき、後代に及ぶ恩沢はいつまでも途絶えることなくもたらされる。

○押韻 「仁・垠」は上平17「眞」、「鈞」は上平18「諄」、「明」は下平12「庚」。

①聖明統世 「聖明」は英明で聖哲なる天子。「漢書」晁錯伝 卷三七に「今陛下以聖明統世、將欲卒文武之功、繼成康之

に「以陛下之時、徙民實邊、使遠方無屯戍之事、塞下之民安 隆。簡賢授能、以方叔召虎之臣、鎮衛四境、爲國爪牙者、可

子相保、亡係虜之患、利施後世、名稱聖明、其與秦之行怨民、 謂當矣。」

相去遠矣。」 ②篤皇仁 おおいなる仁徳をあつくする。「篤」はあつくする。

「統世」は天下を統御すること。曹植「求自試表」（『文選』） 「史記」魯周公世家に「自文王在時、且爲子孝、篤仁、異於羣

子。「皇仁」は大いなる仁徳。「毛詩」小雅・楚茨に「先祖是皇、神保是饗」、毛伝に「皇、大。保、安也。」

③廣大配天地 易の広大さが天地に合致すること。『周易』繫辭伝上に「廣大配天地、變通配四時、陰陽之義配日月、易簡之善配至徳。」ここでは天子の徳が天地の広大さに等しいことをいう。

④順動若陶鈞 「順動」は順当に動くこと。『周易』豫卦・象伝に「天地以順動、故日月不過、而四時不忒。聖人以順動、則刑罰清而民服。豫之時義大矣哉。」

「陶鈞」は陶器をつくるのに用いる轆轤。大小の器を作れることから天に喩えられる。『史記』魯仲連鄒陽列伝に「是以聖王制世御俗、獨化於陶鈞之上」、集解の引く「漢書音義」に「陶家名模下圓轉者爲鈞、以其能制器爲大小、比之於天。」

⑤玄化參自然 玄妙なる徳教の感化が「自然」と並び合していること。「玄化」は道徳による教化。曹植「責躬詩」(「文選」卷二〇)に「玄化滂流、荒服來王」、李善注に「廣雅曰、玄、道也。謂道徳之化也。蔡邕陳留太守頌曰、玄化洽矣。」

「參」は等しくする。また、合する。揚雄「劇秦美新」(「文

選」卷四六)に「參天貳地、兼竝神明」、李善注に「難蜀父老曰、勤思乎參天貳地。周易曰、聖人以神明其徳」、劉良注に

「參、合也。言明德方於天、厚德比於地、如更有一地、故云貳地也。」「自然」は人為の加わらない本来の状態。『老子』二十五章に「人法地、地法天、天法道、道法自然。」

⑥至徳通神明 「至徳」はこれ以上なく高い徳。注③参照。「神明」は明智ある神。『周易』繫辭伝下に「於是始作八卦、以通神明之徳、以類萬物之情。」

⑦清風暢八極 清らかな教化が極遠の地にまで行き渡る。「清風」は清らかな風。ここでは清らかな教化をいう。後漢・張衡「東京賦」(「文選」卷三)に「清風協於玄徳、淳化通於自然」、薛綜注に「協、同也。淳、厚也。玄、天也。自然、通神明也。言帝如此清惠之風、同於天徳、淳厚之化、通於神明也。」

「八極」は八方の極遠の地。『莊子』田子方に「夫至人者、上闢青天、下潛黃泉、揮斥八極、神氣不變。」「淮南子」原道訓に「天道者、覆天載地、廓四方、析八極、高不可際、深不可測、包裹天地、稟授無形」、高誘注に「八極、八方之極也、言其遠。析讀重門擊柝之柝也。」「暢八極」の先行用例としては、

曹植「帝顛頊贊」(『芸文類聚』卷一一)に「以國爲號、風化  
神宣。威暢八極、靡不祇虔。」

世、有三乘之地者事二世、持手而食者不得立宗廟、所以別積  
厚者流澤廣、積薄者流澤狹也。」

⑧流澤被無垠 「流澤」は後代に布き及ぶ恩沢。『荀子』礼論

「無垠」は限りがないこと。『楚辭』九章・悲回風に「穆眇眇  
之無垠兮、莽芒芒之無儀」、王逸注に「天與地合、無垠形也。」

に「故有天下者事七世、有一國者事五世、有五乘之地者事三

於皇時晉<sup>①</sup> 奔世齊聖<sup>②</sup>

於皇あゝわおいなる時の晉 世をか奔ねて齊聖なり

惟天降嘏<sup>③</sup> 神祇保定<sup>④</sup>

惟これ天 嘏さいわいを降し 神祇保んじ定む

弘濟區夏<sup>⑤</sup> 允集大命<sup>⑥</sup>

弘く區夏を濟い 允まことに大命を集む

有命既集<sup>⑦</sup> 光帝猷<sup>⑧</sup>

命有り既に集り 帝の猷かぎを光かす

大明重耀<sup>⑨</sup> 鑑六幽<sup>⑩</sup>

大明 耀きを重ね 六幽を鑑くらす

聲教洋溢<sup>⑪</sup> 惠滂流<sup>⑫</sup>

聲教 洋溢して 惠 滂流す

惠滂流<sup>⑬</sup> 移風俗<sup>⑭</sup>

惠 滂流して 風俗を移す

多士盈朝<sup>⑮</sup> 賢俊比屋<sup>⑯</sup>

多士 朝に盈ち 賢俊 屋をなら比ぶ

敦世心<sup>⑰</sup> 斲彫反素樸<sup>⑱</sup>

世心を敦くし 彫を斲けずり素樸に反る

反素樸<sup>⑲</sup> 懷庶方<sup>⑳</sup>

素樸に反りて 庶方を懷かしむ

干戚舞階庭<sup>㉑</sup>

干戚 階庭に舞えば 疏狄 遐荒よつこに説ぶ

扶年假重譯<sup>㉒</sup>

扶南 重譯を假り 肅慎 衣裳かさを襲ぬ

雲覆雨施<sup>㉓</sup>

雲覆い雨施し 德治あまねく疆かきり無し

德洽無疆<sup>㉔</sup>

旁作穆穆<sup>㊦</sup>

仁化翔<sup>㊦</sup>

あまね  
旁く穆穆を作し<sup>な</sup> 仁化翔ける

ああ、大いなる晋王朝は、代々正しく優れた徳を備えた主君をいただいてきた。

天は福を降され、天地の神々は守つてくださる。

天下を広く護り救い、まことに天の天命をその身に集める。

天の命がすでに降り、皇帝の道を輝かせる。

日月が重なったような輝きが、天地四方を隈無く照らす。

天子の教化は広く溢れるように伝わり、仁愛の心が盛んに流れる。

仁愛の心が盛んに流れて、風俗をよいものへ改める。

多くの人材が朝廷に満ちあふれ、すぐれた人物たちが家を並べている。

世の人々の心を敦厚なものにし、文飾を削り落として素朴にかえる。

素朴にかえって、さまざまな所を心服させる。

干戚の武舞をきざはしの前庭で舞えば、はるか遠方の者たちが辺境で喜ぶ。

扶南国の使者は何人もの通訳を間に挟んで話をし、肅慎国の使いは中国の衣裳を身に着ける。

雲が覆い雨が降るようにひろく、晋朝の徳は限りなく行き渡っている。

四方から大勢の人が恭しくやってきて、仁徳ある教化は高く舞い上がって広がっていく。

○押韻 「聖」は去声45「勁」、「定」は去声46「徑」、「命」は去声43「映」。「猷・流」は下平18「尤」、「幽」は下平20「幽」。「俗」は入声3「燭」、「屋・樸」は入声1「屋」。「方・裳・疆・翔」は下平10「陽」、「荒」は下平11「唐」。

①於皇時晉 「於」は感嘆詞「ああ」。「時」は「この」。「毛詩」周頌・般に「於皇時周、陟其高山」、鄭箋に「於乎美哉、君是周邦。」「宋書」樂志二・傅玄「晋宗廟歌十一篇」其九に同一の句がある。

②弈世齊聖 「弈世」は代々。「弈」は「奕」に通じる。「国語」周語上に「昔我先王世后稷、以服事虞夏。及夏之衰也、棄稷弗務、我先王不畱用失其官、而自竄於戎狄之間、不敢忘業、時序其德、纂修其緒、修其訓典、朝夕恪勤、守以敦篤、奉以忠信、弈世載德、不忝前人。」「後漢書」楊震伝附子秉に「臣弈世受恩、得備納言」、李賢注に「弈猶重也。」「齊聖」は正しく優れた徳を備えていること。『尚書』微子之命に「乃祖成湯、克齊聖廣淵、皇天眷佑、誕受厥命」、偽孔伝に「言汝祖成湯、能齊德聖達、廣大深遠、澤流後世。」

③惟天降嘏 天がさいわいを降す。「惟」は発語の助字「これ」。「尚書」咸有一徳に「惟吉凶不僭在人、惟天降災祥在徳」、偽孔伝に「行善則吉、行惡則凶、是不差。徳一、天降之善、不

一、天降之災、是在徳。」「嘏」は福。『毛詩』小雅・賓之初筵に「錫爾純嘏、子孫其湛」、鄭箋に「純、大也。嘏、謂尸與主人以福也。湛、樂也。」

④神祇保定 天地の神々が安んじ守る。「神祇」は天の神と地の神。『尚書』湯誥に「爾萬方百姓、罹其凶害、弗忍荼毒、竝告無辜于上下神祇」、偽孔伝に「言百姓兆民竝告無罪、稱冤訴天地。」「毛詩』小雅・天保に「天保定爾、亦孔之固」、毛伝に「固、堅也」、鄭箋に「保、安。爾、女也。女、王也。天之安定女、亦甚堅固。」

⑤弘濟區夏 天下を広く護り救う。「弘濟」は広く救うこと。『尚書』顧命に「今天降疾殍、弗興弗悟。爾尚明時朕言、用敬保元子釗、弘濟于艱難。」「區夏」は天下。『尚書』康誥に「用肇造我區夏、越我一二邦以修」、偽孔伝に「用此明德愼罰之道、始爲政於我區域諸夏、故於我一二邦皆以修治。」

⑥允集大命 まことに天の大命をその身に集める。「允」はま

ことに。『毛詩』小雅・車攻に「允矣君子、展也大成」、鄭箋に「允、信。展、誠也。大成、謂致太平也。』『尚書』太甲上に「天監厥德、用集大命、撫綏萬方」、偽孔伝に「監、視也。天視湯德、集王命於其身撫安天下。」

⑦有命既集 天の命がすでに降った。「集」はつく。『毛詩』大雅・大明に「維此文王、小心翼翼。昭事上帝、聿懷多福。厥德不回、以受方國。天監在下、有命既集」、毛伝に「集、就」、鄭箋に「天監視善惡於下、其命將有所依就、則豫福助之。」

⑧光帝猷 皇帝の道を輝かせる。「帝猷」は皇帝の踏むべき道。後漢・蔡邕「釋誨」(『後漢書』蔡邕伝下)に「皇道惟猷、帝猷顯平、泝泝庶類、含甘吮滋。」

⑨大明重耀 「大明」は日月。『管子』内業に「鑑於大清、視於大明」、尹知章注に「大明、日月也。」「重耀」は輝きを重ねる。

⑩鑑六幽 「鑑」は照らす。『左伝』襄公二十八年に「獻車於季武子、美澤可以鑑」、杜預注に「光鑑形也。」

「六幽」は六合(天地四方)。『後漢書』章帝紀に見える元和四年を章和元年に改めた際の詔に「朕聞明君之德、啓迪鴻化、

緝熙康乂、光照六幽」、李賢注に「緝熙、光明也。六幽謂六合幽隱之處也。」

⑪聲教洋溢 「聲教」は天子の教化。『尚書』禹貢に「東漸于海、西被于流沙、朔南暨聲教、訖于四海」、偽孔伝に「漸、入也。被、及也。此言五服之外皆與王者聲教而朝見。」

「洋溢」は広く溢れるように伝わること。『礼記』中庸に「溥博如天、淵泉如淵、見而民莫不敬、言而民莫不信、行而民莫不説。是以聲名洋溢乎中國、施及蠻貊。」

⑫惠滂流 「惠」はめぐみ。仁愛。「滂流」は水が盛んに流れるさま。『漢書』宣帝紀の皇子壽を定陶王に立てた際の詔に「乃者鳳皇甘露降集、黃龍登興、醴泉滂流、枯槁榮茂、神光竝見、咸受禎祥。」

⑬移風俗 風俗をうつしかえて世を善くすること。『礼記』樂記に「故樂行而倫清、耳目聰明、血氣和平、移風易俗、天下皆寧。」

⑭多士盈朝 「多士」は多くの人材。『毛詩』大雅・文王に「濟濟多士、文王以寧。』『宋書』樂志二・成公綏「晋四箱歌十六篇・雅樂正旦大会行礼詩十五章」其一に「多士盈朝、莫匪俊

徳。」

⑮賢俊比屋 「賢俊」はすぐれた人物。『漢書』元帝紀の詔に「臨遣光祿大夫襲等十二人循行天下、存問耆老鰥寡孤獨困乏失職之民、延登賢俊、招顯側陋、因覽風俗之化。」

「比屋」はやなみ。『漢書』王莽伝上に見える上奏文に「明聖之世、國多賢人、故唐虞之時、可比屋而封、至功成事就、則加賞焉。」「宋書」樂志四・曹植「擊舞歌五篇・靈芝篇」に「戸有曾閔子、比屋皆仁賢。」

⑯斲彫反素樸 文飾を削り去って素朴にかえる。『史記』酷吏列伝に「漢興、破觚而爲圓、斲雕而爲朴」、索隱に「應劭云、『削珣爲璞也。』晉灼云、『凋、弊也。斲理凋弊之俗、使反質樸也。』」前句と合わせて、『論語』子路の「子曰、『剛毅木訥、近仁』」や学而の「子曰、『巧言令色、鮮矣仁』」、『老子』十五章の「敦兮其若樸、曠兮其若谷、混兮其若濁」や二十八章の「爲天下谷、常德乃足、復歸於樸」なども意識されているか。

⑰懷庶方 「庶方」はさまざまなる所。あるいは、そこにいる異民族を指すか。『礼記』曲礼下に「庶方小侯、入天子之國曰某人、於外曰子、自稱曰孤」、鄭注に「謂戎狄子男君也。男者

於外亦曰男、舉尊言之。」

⑱干戚舞階庭 「干戚」は盾と斧。武舞の際に手に持って舞った。『礼記』樂記に「比音而樂之、及干戚羽旄、謂之樂」、鄭注に「干、盾也。戚、斧也。武舞所執也。」「宋書」樂志一に「漢高祖改韶舞曰文始、以示不相襲也。又造武德舞、舞者悉執干戚、以象天下樂已行武以除亂也。」「階庭」はきざはしの前の庭。

⑲疏狄說遐荒 「疏狄」は疏逖、うとく遠いと通じる。荒遠の地をいう。『史記』司馬相如列伝に「將博恩廣施、遠撫長駕、使疏逖不閉、阻深闇昧得耀乎光明」、索隱に「逖、遠。言其疏遠者不被閉絕也。」「ここでは遠方の地にいる者、夷狄の意に解した。「遐荒」は支配の及ばない辺境の地。韋孟「諷諫」詩（『文選』卷一九）に「彤弓斯征、撫寧遐荒。」

⑳扶南假重譯 扶南国の人間は何人も通訳を間に挟んで話をする。「扶南」は扶南国。現在のインドシナ半島にあった。『晋書』四夷列伝・南蛮・扶南国に「扶南国 扶南、西去林邑三千餘里、在海大灣中、其境廣袤三千里、有城邑宮室。」「重譯」は通訳を重ねること。『尚書大伝』卷四に「成王之時、越

裳重譯而來朝、曰、「道路悠遠、山川阻深、恐使之不通、故重三譯而朝也。」『漢書』平帝紀にも越裳氏が來朝したことが記されている。「元始元年春正月、越裳氏重譯獻白雉一、黑雉二、詔使三公以薦宗廟」、顏師古注に「譯謂傳言也。道路絕遠、風俗殊隔、故累譯而後乃通。」

⑲肅慎襲衣裳 肅慎国の人間が中国の衣裳を着る。「肅慎」は肅慎国。東北部にいた異民族の国。『左伝』昭公九年に「肅慎・燕・亳、吾北土也」、杜預注に「肅慎、北夷、在玄菟北三千餘里。」

「襲」は重ね着すること、また、衣服を着ること。曹植「五遊詠」(『芸文類聚』卷七八)に「披我丹霞衣、襲我素霓裳。」「衣裳」は中国の衣裳。『後漢書』楊終伝の上書文に「故孝元弃珠崖之郡、光武絶西域之國、不以介鱗易我衣裳」、李賢注に「介鱗喻遠夷、言其人與魚鼈無異也。衣裳謂中國也。」

朝元日 賓王庭<sup>①</sup>  
承宸極<sup>②</sup> 當盛明<sup>③</sup>

元日に朝し 王庭に賓たり  
宸極を承<sup>いた</sup>き 盛明に當たる

⑳雲覆雨施 雲が空を覆い、雨が恵みをもたらすように。『周易』乾卦・彖伝に「大哉乾元、萬物資始。乃統天。雲行雨施、品物流形。」董仲舒『春秋繁露』暖煥孰多に「故聖王在上位、天覆地載、風令雨施。雨施者、布德均也。風令者、言令直也。」

㉑德洽無疆 徳があまねく行き渡って限りがない。『尚書』大禹謨に「好生之徳、洽于民心、玆用不犯于有司。」

㉒旁作穆穆 四方からやってきて恭しく敬う。『尚書』洛誥に「惟公德明、光于上下、勤施于四方、旁作穆穆迓衡、不迷文武勳教」、偽孔伝に「四方旁來爲敬敬之道、以迎太平之政、不迷惑於文武所勳之教。言化洽。」『宋書』樂志二・傅玄「晋宗廟歌・祠景皇帝登歌」に「旁作穆穆、惟祇惟畏」、荀勗「正徳舞歌」に「文武旁作、慶流四表。」

㉓仁化翔 「仁化」はめぐみによる教化。仁政。曹植「登台賦」(『芸文類聚』卷六二)に「揚仁化於宇内兮、盡肅恭於上京。」

(狩野 雄)

衍和樂 <sup>①</sup>	竭祇誠 <sup>⑤</sup>	和樂に行ち	祇誠を竭くし
仰嘉惠 <sup>⑥</sup>	懷德馨 <sup>⑦</sup>	嘉惠を仰ぎ	德馨を懷う
游淳風 <sup>⑧</sup>	泳淑清 <sup>⑨</sup>	淳風に遊び	淑清に泳ぎ
協億兆 <sup>⑩</sup>	同歡榮	億兆を協せ	歡榮を同にす
建皇極 <sup>⑪</sup>	統天位 <sup>⑫</sup>	皇極を建て	天位を統す
運陰陽	御六氣 <sup>⑬</sup>	陰陽を運らし	六氣を御す
殷羣生	成性類 <sup>⑭</sup>	羣生を殷んにし	性類を成す
王道浹	治功成	王道浹く	治功成り
人倫序 <sup>⑮</sup>	俗化清 <sup>⑯</sup>	人倫序あり	俗化清し
虔明祀 <sup>⑰</sup>	祇三靈 <sup>⑱</sup>	明祀を虔しみ	三靈を祇う
崇禮樂	式儀刑 <sup>⑳</sup>	禮樂を崇び	儀刑を式とす

年の初めに参内し、賓客として朝廷に侍り、

北極星の如く天子を奉戴し、いままさに盛んなる御代に会う。

心やわらぎ楽しみに満ちあふれ、深く慎みてまごころをこめ、

君の恩恵を思い、君徳の馨しきを慕う。

敦厚質朴な風俗を楽しみ、清らかな善政に浴し、

億万の民と心を合わせて、喜びと繁栄を同じくする。

天下統治の道を作りあげ、天子の位に即いて世を統治され、

陰と陽とを運用し、六つの氣象をあやつり、

多くの民を豊かにし、命あるものの生を全うさせる。

王道は広くゆきわたり、統治の功績は成就し、

人倫の道は秩序立てられ、風俗教化も清らかとなった。

代々受け継がれた祭祀をつつしんで行い、天地人の三靈を敬って祀り、

礼樂を尊び、先王を手本とした常典を法とする。

○押韻 「庭・馨」は下平15「青」、「明・榮」は下平12「庚」、「誠・清」は下平14「清」。「位・類」は去声6「至」、「氣」は去声8「未」。「成・清」は下平14「清」、「靈・刑」は下平15「青」。

①賓王庭 朝廷に賓客として参列する。『周易』觀・六四の爻辞に「觀國之光。利用賓于王」、王弼注に「觀國之光者也。」

居近得位明習國儀者也。故曰利用賓于王也」とある。また

張華「晋四箱樂歌十六篇・食琴東西箱樂詩十一章」其三に「九

賓在庭、臚讚既通」と類似的表現が見える。

②承宸極 「宸極」は皇帝の位又は居所。もと北極星を指し、帝位をこれになぞらえて言う。ここでは皇帝を遠くから拝することをいう。『三国志』呉書・虞翻伝の裴松之注に引く

『翻別傳』に「權即尊號、翻因上書曰……罪棄兩絕、拜賀無階、仰瞻宸極、且喜且悲」とある。また劉琨「勸進表」(『文選』卷三七)に「宸極失御、登遐醜裔」、李善注に「宸極、喻帝位。」

③當盛明 楊雄「解嘲」(『文選』卷四五)に「今吾子幸得遭明盛之世、處不諱之朝、與羣賢同行、歷金門、上玉堂有日矣」、また班婕妤「自傷悼賦」(『漢書』外戚伝)に「蒙聖皇之渥惠兮、當日月之盛明。」

④行和樂 「衍」は満ちあふれる。陸機「歎逝賦」(『文選』卷一六)に「居充堂而衍宇、行連駕而比軒」、李善注に「充滿於堂、盈衍於宇」とある。

「和樂」は心打ち解けて楽しむことを言う。『毛詩』小雅・鹿鳴に「我有嘉賓、鼓瑟鼓琴。鼓瑟鼓琴、和樂且湛。」

⑤祇誠 敬意とまごころ。「祇」は敬に同じ。『尚書』皋陶謨に「日嚴祇敬六德、亮采有邦」、偽孔伝に「有國諸侯。日日嚴敬其身、敬行六德、以信治政事、則可以爲諸侯。」また『礼記』祭統に「天子諸侯非莫耕也、王后夫人非莫蠶也、身致其誠信、誠信之謂盡、盡之謂敬、敬盡然後可以事神明、此祭之道也。」

⑥嘉惠 君主の恩徳。『左伝』昭公七年に「楚子成章華之臺、願以諸侯落之。大宰遽啓疆曰、『臣能得魯侯。』遽啓疆來召公辭曰、『……傳序相授、於今四王矣、嘉惠未至。唯襄公之辱臨我喪、孤與其二三臣、悼心失圖、社稷之不皇、況能懷思君徳。今君若步玉趾、辱見寡君、寵靈楚國、以信蜀之役、致君之嘉惠、是寡君既受貺矣。何蜀之敢望!』」とある。

⑦德馨 君子の徳が馨しく香る。『尚書』君陳に「我聞曰、至治馨香、感于神明、黍稷非馨、明德惟馨」とある。傅玄「前

所作天地郊明堂歌五篇・天地郊明堂夕牲歌」に「嘉牲匪歆、德馨惟饗」、同じく傅玄「地郊饗神歌」に「饗嘉豢、歆德馨」と既出。『宋書』樂志二詠注稿(一)「九三頁注⑩及び同一〇三頁注⑬参照。

⑧淳風 素朴で飾り気のない風俗。東晋以降に用例の多く見え始める語。『抱朴子』逸民に「淳風足以濯百代之穢、高標足以激將來之」とあり、『晋書』孝武帝紀に「咸安二年秋七月己未、立爲皇太子。是日、簡文帝崩、太子卽皇帝位。詔曰『……仰憑祖宗之靈、積徳之祀、先帝淳風玄化、遺詠在民!』」とある。

⑨淑清 清らかで汚れないさま。ここでは治政の清らかなことを言う。『楚辭』哀時命に「形體白而質素兮、中皎潔而淑清」、王逸注に「言己自念形體潔白、表裏如素、心中皎潔、内有善性、清明之質也」とある。また王褒「四子講徳論」(『文選』卷五一)「今海内樂業、朝廷淑清。天符既章、人瑞又明!」とある。

⑩億兆 多くの民。『尚書』泰誓中に「受有億兆夷人、離心離徳(平人凡人也。雖多而執心用徳不同)。予有亂臣十人、同

心同徳（我治理之臣、雖少而心徳同）」とある。『左伝』昭公二十一年に「雖其善祝、豈能勝億兆人之詛」、杜預注に「萬萬曰億。萬億曰兆。」

⑪皇極 大中の道。天下を統治する規則。『尚書』洪範に「五、皇極、皇建其有極」とあり、偽孔伝に「大中之道、大立其有中、謂行九疇之義」、孔穎達疏に「皇、大也。極、中也。施政教、治下民、當使大得其中、無有邪僻」とある。傳玄「晋郊祀歌五篇・饗天地五郊歌三篇」其二に「皇極斯建、庶績咸熙」と既出。『宋書』樂志二詛注稿（一）「八七頁注⑧参照。」

⑫天位 天子の位。『周易』需の彖伝に「需有孚、光亨貞吉、位乎天位、以正中也」、王弼注に「謂五位。位乎天位、用其中正、以此待物需道畢矣。故光亨貞吉」とある。張衡「東京賦」(『文選』卷三)に「歴載三六、偷安天位」、薛綜注に「載、年也。三六、十八年。謂王莽篡位一十八年也。天位、帝位也。」

⑬六氣 六つの氣象現象。陰・陽・風・雨・晦・明。『左伝』昭公元年に「天有六氣（謂陰陽風雨晦明也）。降生五味」とある。『莊子』逍遙遊に「若夫乘天地之正、而御六氣之辯、以遊無窮者、彼且惡乎待哉」、郭象注に「御六氣之辯者、即是遊變

化之塗也」、『莊子』在宥に「雲將曰、「天氣不和、地氣鬱結、六氣不調、四時不節。今我願合六氣之精、以育羣生、爲之奈何。」謝莊「宋明堂歌・迎神歌詩」に「駕六氣、乘綱緼」と既出。『宋書』樂志二詛注稿（一）「二二四頁注⑦参照。」

⑭成性類 「性類」は命あるもの。生き物。『風俗通』声音序に「夫樂者、聖人所以動天地、感鬼神、按萬民、成性類者也。」

⑮人倫序 人倫の道が秩序立てられる。傳玄「晋宣文舞歌二篇・羽鐸舞歌」に「人倫得其序、衆生樂聖君」とある。

⑯俗化 風俗の教化。『漢書』宣帝紀に「(地節三年)十一月、詔曰……唯恐羞先帝聖徳、故並舉賢良方正以親萬姓、歴載臻茲、然而俗化闕焉」とある。また何晏「景福殿賦」(『文選』卷一一)に「觀器械之良窳、察俗化之誠僞。」

⑰明祀 代々受け継がれた祭祀。『左伝』僖公二十一年に「任・宿・須句・顓臾、風姓也、實司大皞與有濟之祀、以服事諸夏。邾人滅須句、須句子來奔、因成風也。成風爲之言於公曰、崇明祀、保小寡、周禮也（明祀、大皞有濟之祀。保、安也）。蠻夷猾夏、周禍也」とある。

⑱三靈 天・地・人を言う。班固「典引」(『文選』卷四八)に

「順命以創制、因定以和神、答三靈之蕃祉、展放唐之明文」、  
李善注に「三靈、天地人也」とある。

⑬式儀刑 「儀刑」は先王の常典を手本とする。ここでは先王

の常典を手本とした儀式を指す。「式」は法とする。『毛詩』

大雅・文王に「上天之載、無聲無臭。儀刑文王、萬邦作孚」

とあり、毛伝に「載、事。刑、法。孚、信也」、鄭箋に「天之

道難知也。耳不聞聲音、鼻不聞香臭。儀法文王之事、則天下

慶元吉<sup>①</sup> 宴三朝

元吉を慶ことほぎ 三朝に宴す

播金石 詠冷簫<sup>②</sup>

金石に播しき 冷簫に詠ず

奏九夏<sup>③</sup> 舞雲韶<sup>④</sup>

九夏を奏し 雲韶を舞う

邁德音<sup>⑤</sup> 流英聲<sup>⑥</sup>

德音を邁おこない 英聲を流す

八紘一<sup>⑦</sup> 六合寧<sup>⑧</sup>

八紘一にして 六合寧やすんず

六合寧 承聖明<sup>⑨</sup>

六合寧やすんじ 聖明を承く

王澤洽 道登隆<sup>⑩</sup>

王澤あまね洽く 道隆に登る

綏函夏<sup>⑪</sup> 總華戎<sup>⑫</sup>

函夏を綏やすんじ 華戎を總ぶ

齊德教<sup>⑬</sup> 混殊風<sup>⑭</sup>

德教を齊ひとしくし 殊風を混す

混殊風 康萬國

殊風を混ぜ 萬國を康んず

咸信而順之」、また『毛詩』周頌・我将に「儀式刑文王之典、  
日靖四方。伊嘏文王、既右饗之」、毛伝に「儀、善。刑、法。  
典、常。靖、謀也」、鄭箋に「靖、治也。受福曰嘏。我儀則式  
象、法行文王之常道、以日施政于天下、維受福於文王。文王  
既右而饗之、言受而福之。」傳玄「晋四箱樂歌三首・正旦大会  
行札歌」に「儀刑聖皇、萬邦惟則」と既出。「宋書」樂志二  
詠注稿(三三)一〇三頁注⑬参照。

崇夷簡<sup>⑮</sup> 尚敦德<sup>⑯</sup> 夷簡を崇び 敦徳を尚ぶ

弘王度<sup>⑰</sup> 表遐則<sup>⑱</sup> 王度を弘め 遐則を表わす

右食舉東西箱樂詩十一章<sup>⑲</sup> 右は食舉東西箱樂詩十一章

大いなる吉兆を祝い、正月元旦の宴を挙行する。

金石の音に乗せて演奏し、伶人の簫に合わせて歌唱する。

周の「九夏」の樂を演奏し、黃帝の「雲門」と舜の「大韶」の樂を舞う。

天子の徳を表した音樂を敷きひろげ、功績を称える歌を行きわたらす。

八方の遙かな地域も一つとなり、天地四方は安定する。

天地四方は安定し、聖明な天子の徳を受ける。

王の恩沢はあまねく広がり、王の政道は隆盛にいたる。

中夏の地を落ち着かせ、中華と戎狄を束ねる。

道徳教化を等しく行きわたらせ、異なつた風俗を融和させる。

異なつた風俗を融和させ、万の国を安樂にする。

平易で簡素であることを重んじ、手厚い徳を大切にす。

王の法を大いに広め、遙か遠くに及ぶ手本を明かにする。

右は食舉東西箱樂の歌詞十一章

○押韻 「朝・韶」は下平4 「宵」、「簫」は下平3 「蕭」は下平14 「清」、「寧」は下平15 「青」、「明」は下平12 「庚」。「隆・戎・風」は上平1 「東」。「國・徳・則」は入声25 「徳」。

①元吉 大いなる吉兆。『周易』坤・六五の卦辞「黃裳元吉」の孔穎達疏に「元、大也。以其德能如此、故得大吉也」とある。

張華「晋四箱樂歌十六篇・食举東西箱樂詩十一章」其三に「履端承元吉、介福御萬邦」と既出。

②冷簫 「冷」は伶人。樂官。『左伝』成公九年に「召而弔之、再拜稽首、問其族、對曰「冷人也」」、杜預注に「冷人、樂官」。

「冷簫」は樂官の演奏する簫。『国語』魯語下に「今伶簫咏歌及鹿鳴之三」、韋昭注に「伶、伶人、樂官也。簫、樂器。編管爲之。言樂人以簫作此三篇之聲與歌者相應也。詩云簫管備舉」とある。また『後漢書』馬融伝に「元初二年、上廣成頌

以諷諫。其辭曰、「……然猶詠歌於伶簫、載陳於方策、豈不哀哉」。なお『莊子』逍遙遊に「夫列子御風而行、冷然善也、旬有五日而後反」、郭象注に「冷然、輕妙之貌」とあり、「冷」は簫の輕妙な音色をも想起させるか。

③九夏 周の樂。「夏」は大きい。『周礼』春官・鍾師に「掌金奏。凡樂事、以鍾鼓奏九夏、王夏・肆夏・昭夏・納夏・章夏・

齊夏・族夏・禘夏・鶩夏」、鄭玄注に「以鍾鼓者、先擊鍾、次擊鼓、以奏九夏。夏、大也。樂之大歌有九」とある。

④雲韶 黃帝の「雲門」樂と舜の「大韶」樂。『周礼』春官・大司樂に「掌成均之灋、以治建國之學政、而合國之子弟焉。……以樂舞教國子舞雲門・大卷・大咸・大磬・大夏・大濩・大武」、鄭玄注に「此周所存六代之樂。黃帝曰雲門・大卷。黃帝能成名萬物、以明民共財。言其德如雲之所出、民得以有族類。……大磬、舜樂也。言其德能紹堯之道也」とある。曹毗「晋江左宗廟歌十三篇・歌哀皇帝」に「愔愔雲韶、盡美盡善」と既出。『宋書』樂志二詛注稿(二)一一二九頁注⑫參照。

⑤邁德音 天下平定した君子の徳が表わされた音楽。『礼記』樂記に「天下大定、然後正六律、和五聲、弦歌詩頌、此之謂德音。德音之謂樂」、鄭玄注に「當謂樂不失其所」とある。また『尚書』大禹謨に「禹曰、朕徳罔克、民不依。皋陶邁種徳、徳乃降、黎民懷之」、孔伝に「邁、行。種、布。降、下。

懷、歸也。言己無德民所不能依。臯陶布行其德、下治於民、民歸服之」とある。

⑥流英聲 優れた功績を讃える声。司馬相如「封禪文」(「文選」

卷四八)に「將襲舊六爲七、據之亡窮、俾萬世得激清流、揚

微波、蜚英聲、騰茂實」とあり、また楊脩「答臨淄侯牋」(「文

選」卷四〇)に「若乃不忘經國之大美、流千載之英聲、銘功

景鍾、書名竹帛、斯自雅量、素所畜也」とある。

⑦八紘 九州の更に外側にある天涯の地。『淮南子』墜形訓に

「八殫之外、而有八紘、亦方千里」、高誘注に「紘、維也。維

落天地而爲之表、故曰紘也」とある。また『宋書』礼志三に

「魏元帝咸熙二年十二月甲子、使持節侍中太保鄭沖・兼太尉

司隸校尉李憙奉皇帝璽綬策書、禪帝位于晉。丙寅、晉設壇場

于南郊、柴燎告類、未有祖配。其文曰「……八紘同軌、遐邇

馳義、祥瑞屢臻、天人協應、無思不服」とある。

⑧六合 天地四方。『莊子』齊物論に「六合之外、聖人存而不

論。六合之内、聖人論而不議」、成玄英疏に「六合者、謂天地

四方也」とある。張華「晋四箱樂歌十六篇・食举東西箱樂詩

十一章」其一に「羣生漸德、六合承流」と既出。

⑨聖明 英智聡明な天子の徳。『漢書』晁錯伝に「以陛下之時、

徙民實邊、使遠方無屯戍之事、塞下之民父子相保、亡係虜之

患、利施後世、名稱聖明、其與秦之行怨民、相去遠矣」とあ

る。

⑩道登隆 潘岳「金谷集作詩」(「文選」卷二〇)に「飲至臨華

沼、遷坐登隆坻」とある。張華「大豫舞歌詩」に「淳化既穆、

王道協隆」(本訳注一〇四頁参照)とある。

⑪函夏 中華全体を指す。『漢書』楊雄伝上に「上河東賦以勸、

其辭曰、「……川遵逝虜歸來、以函夏之大漢兮、彼曾何足與

比功」(服虔曰、函夏、函諸夏也。師古曰、函、包容也。彼謂

堯・舜・殷・周也)とある。

⑫華戎 中華と戎狄。張衡「西京賦」(「文選」卷二)に「右有

隴坻之隘、隔閼華戎。」

⑬德教 『孟子』離婁に「孟子曰「爲政不難、不得罪於巨室、

巨室之所慕、一國慕之。一國之所慕、天下慕之。故沛然德教、

溢乎四海。』曹植「求自試表」(「文選」卷三七)に「今臣蒙

國重恩、三世于今矣。正值陛下升平之際、沐浴聖澤、潛潤德

教、可謂厚幸矣。」

⑭殊風 異なつた風俗。張衡「思玄賦」(『文選』卷一五)に「思九土之殊風兮、從靡收而遂徂」とある。

⑮夷簡 平易で簡素。『周易』繫辭伝上に「易則易知、簡則易

從。易知則有親、易從則有功。有親則可久、有功則可大。可久則賢人之德、可大則賢人之業。易簡而天下之理得矣。天下之理得而成位乎其中矣」とある。また陸機「君子行」(『文選』卷二八)に「天道夷且簡、人道峻而難」とあり、李善注

に引く「莊子」在宥に「何謂道。有天道、有人道。無爲而尊

者、天道也。有爲而繫者、人道也」とある。晋・傅玄「晋四箱樂歌三首・食舉東西箱歌」に「既夷既簡、其大不禦。風化

潛興、如雲如雨」とある。「宋書」樂志二「詠注稿(三三)一一四頁注⑬参照。

⑯敦德 民に手厚い仁徳。『論衡』恢国に「皇帝敦徳、俊父在官。」

於赫皇祖<sup>①</sup> 迪哲齊聖<sup>②</sup>  
經緯大業<sup>③</sup> 基天之命<sup>④</sup>  
克開洪緒<sup>⑤</sup> 誕篤天慶<sup>⑥</sup>

於赫たる皇祖 迪哲にして齊聖<sup>あは</sup>  
大業を經緯し 天の命を基む<sup>は</sup>  
克く洪緒を開き 誕いに天慶を篤くす<sup>お</sup>

⑰王度 王の法。『左伝』昭公十二年に「思我王度、式如玉、式

如金」、孔穎達疏に「思使我王之徳度、用如玉然、用如金然」とある。また張衡「東京賦」(『文選』卷三)に「奢末及侈、

儉而不陋。規遵王度、動中得趣」、薛綜注に「度、先王之法度、舉動合禮之意也」とある。また荀勗「晋正徳大豫二舞歌・大豫舞」に「濬邈幽遐、式遵王度」と既出。「宋書」樂志二「詠注稿(三三)一一七五頁注⑭参照。

⑱遐則 遙か遠くに行きわたる手本。張華「晋四箱樂歌十六

篇・王公上壽詩」に「后皇延遐祚、安樂撫萬方」とある。⑲食舉東西箱樂詩十一章 『南齊書』樂志に「元會大饗四箱樂

歌辭、晋泰始五年太僕傅玄撰。正旦大會行禮歌詩四章、壽酒詩一章、食舉東西箱樂十三章、黃門郎張華作」とあり、『宋書

樂志校注』の按語に「則齊梁時蕭子顯所見食舉詩之分合、与沈約所載有異同。」

旁濟彛倫<sup>⑦</sup> 仰齊七政<sup>⑧</sup> あまね 旁く彛倫を濟し 仰ぎて七政を齊う<sup>ととの</sup>

ああ盛んなる先祖、知徳を踏み行い正しく聡明。

国家統治の大いなる事業を織り成し、天命を受けて国の礎を起こし、先代から受け継いだ偉大な事業を開き、天から賜わる福を更に厚大とされた。

ひろく天が定めた道理を通じさせ、上には日月五星を観察して天下を治められた。

○押韻 「聖・政」は去声45「勁」、「命・慶」は去声43「映」。

①於赫皇祖 「於赫」は、ああ盛んなるの意。『毛詩』商頌・那

に「於赫湯孫、穆穆厥聲」、毛伝に「於赫湯孫、盛矣湯、爲人

子孫也」、鄭箋に「穆穆、美也。於盛矣、湯孫、謂太甲也」、

孔穎達疏に「於乎、赫然盛矣者、乃湯之爲人之子孫也」とあ

る。傳玄「前所作天地郊明堂歌五篇・天地郊明堂降神歌」に

「於赫大晉、膺天景祥」と既出。『宋書』樂志二詠注稿(一)

九四頁注①参照。

「皇祖」は、祖先。ここでは祖父の宣帝司馬懿を指す。『尚

書』五子之歌に「皇祖有訓、民可近不可下」、偽孔伝に「皇君

也。君祖禹有訓戒。近謂親之下謂失分」とある。また『左伝

哀公二年に「曾孫蒯聵、敢昭告、皇祖文王(周文王。皇、大

也)、烈祖康叔(烈、顯也)文祖襄公(繼業守文、故曰文祖。

蒯聵、襄公之孫)とある。また傳玄「晋宗廟歌・征西將軍登

歌」に「假哉皇祖、綏予孫子」と既出。『宋書』樂志二詠注

稿(二)「八五頁注⑤参照。

②迪哲齊聖 「迪哲」は智徳を実践すること。『尚書』無逸に

「周公曰、嗚呼自殷王中宗、及高宗及祖甲、及我周文王、茲

四人迪哲」、偽孔伝に「言此四人皆蹈智明徳以臨下」とある。

また班固「典引」(『文選』卷四八)に「故先命玄聖、使綴學

立制、宏亮洪業、表相祖宗、贊揚迪詰」、李善注に「相、助也。

始受命爲祖、繼中祖宗、皆不毀廟之稱也。言仲尼之作、亦顯助祖宗、揚明其賡喆之德」とある。

「齊聖」は、正しく聰明なこと。『尚書』微子之命に「乃祖成湯、克齊聖廣淵、皇天眷佑、誕受厥命」とあり、偽孔伝に「言汝祖成湯、能齊德聖達、廣大深遠、澤流後世」とある。また『毛詩』小雅・小宛に「人之齊聖、飲酒溫克」、毛伝に「齊、正。克、勝也」、鄭箋に「中正通知之人、飲酒雖醉、猶能溫藉、自持以勝」とある。曹毗「晋江左宗廟歌十三篇・歌太祖文皇帝」に「太祖齊聖、王猷誕融」と既出。

③經緯大業 「大業」は天子が国を統治する大事業。『尚書』盤庚上に「紹復先王之業、底綏四方」とある。また傳玄「晋宗廟歌十一篇・宣皇帝登歌」に「經始大業、造創帝基」と既出。『宋書』樂志二「詠注稿（二）」九四頁注⑭参照。

④基天之命 天命を受けて国を創建する。『尚書』武成に「公劉克篤前烈、至於大王、肇基王迹、王季其勤王家」とあり、偽孔伝に「大王修德、以翦齊商人、始王業之肇迹、王季續統其業、乃勤立王業」とある。曹毗「晋江左宗廟歌十三篇・歌高祖宣皇帝」に「肇基天命、道均唐虞」と既出。『宋書』樂

志二「詠注稿（二）」一〇七頁注⑮参照。

⑤洪緒 前代から継承された大いなる事業。『三国志』魏書・管寧伝に「横蒙陛下纂承洪緒、德侔三皇、化溢有唐」とある。曹毗「晋江左宗廟歌十三篇・歌世宗景皇帝」に「景皇承運、纂隆洪緒」と既出。『宋書』樂志二「詠注稿（二）」一〇九頁注⑯参照。

⑥誕篤天慶 天から賜る福を更に大きなものにする。『毛詩』大雅・皇夷に「則友其兄、則篤其慶、載錫之光」、毛伝に「因親也。善兄弟曰友。慶、善。光、大也」、鄭箋に「篤、厚。載、始也。王季之心親親而又善於宗族、又尤善於兄大伯、乃厚明其功美、始使之顯著也。大伯以讓爲功美、王季乃能厚明之、使傳世稱之、亦其德也」とある。

「天慶」は天から与えられる福。『儀礼』士冠礼に「以歳之正、以月之令、咸加爾服。兄弟具在、以成厥德。黃耆無疆、受天之慶」とある。また班固「東都賦・白雉詩」（『文選』卷一）「彰皇德兮侔周成、永延長兮膺天慶」とある。

⑦彝倫 「彝倫」は民の常道。天の定めた道理。『尚書』洪範に「惟十有三祀、王訪于箕子、王乃言曰『嗚呼箕子、……我

不知其彝倫攸敘（言、我不知天所以定民之常、道理次敘、問何由）とある。また応貞「晋武帝華林園集詩」（「文選」卷二〇）に「皇極肇建、彝倫攸敷」とある。荀勗「晋四箱樂歌十七篇・正旦大会行礼歌四篇・邦國」に「思我皇度 彝倫攸序」と既出。

⑧仰齊七政 動きの異なる日月五星を觀て天の心を察し世を統治する。『尚書』舜典に「正月上日受終于文祖。在璿璣玉

衡、以齊七政」、偽孔伝に「在、察也。璿、美玉。璣、衡。王者正文天之器、可運轉者。七政、日月五星、各異政。舜察天文、齊七政、以審己當天心與否」とある。曹毗「晋江左宗廟歌十三篇・歌中宗元皇帝」に「仰齊七政、俯平禍亂」、傅玄「晋四箱樂歌三首」に「時齊七政、朝此萬方」と既出。「宋書」樂志二詛注稿（二）一一六頁注⑥参照。

烈烈景皇<sup>①</sup> 克明克聰<sup>②</sup> 烈烈たる景皇 克く明 克く聰

靜封略<sup>③</sup> 定勳功<sup>④</sup> 封略を靜め 勳功を定む

成民立政<sup>⑤</sup> 儀刑萬邦<sup>⑥</sup> 民を成し政を立て 萬邦に儀刑たり

式固崇軌<sup>⑦</sup> 光紹前蹤<sup>⑧</sup> 式て崇軌を固くし 光おほいに前蹤つを紹介ぐ

威風烈々たる景皇帝は、徳明らから聡明。

国境の紛争を靜め、功績を建てられた。

民の生活を成り立たせ政治を確立させ、多くの国々に手本となる。

ここに前代の崇高な軌範を堅固にし、先祖の道を大いに繼承される。

○押韻 「聰・功」は上平1「東」、「邦」は上平4「江」、「蹤」は上平3「鍾」。

①烈烈景皇 「烈烈」は威武あるさま。『毛詩』小雅・黍苗「肅

肅謝功、召伯營之。烈烈征師、召伯成之」、毛伝に「謝、邑也」、鄭箋に「肅肅、嚴正之貌。營、治也。烈烈、威武貌。征、行也。美召伯治謝邑、則使之嚴正、將師旅行、則有威武也」とある。

「景皇」は、景帝司馬師のこと。傳玄「晋宗廟歌十一篇・祠景皇帝登歌」に「執競景皇、克明克哲」と既出。『宋書』樂志二詠注稿（二）九五頁注③参照。

②克明克聰 皇帝の智徳がすぐれることを言う。『毛詩』大雅・皇矣に「維此王季、帝度其心。緝其德音、其德克明。克明克類、克長克君」とあり、鄭箋に「德正應和曰緝。照臨四方曰明」とある。「克明克○」は前注①参照。

③封略 国境。『左伝』昭公七年に「古之制也、封畧之内、何非君土。食土之毛、誰非君臣」とある。

④定勳功 「定功」は功業を建てて。『尚書』泰誓中に「惟戊午王次于河朔、羣后以師畢會、王乃徇師而誓曰……、嗚呼、乃一德一心、立定厥功、惟克永世」、偽孔伝に「汝同心立功、則

能長世以安民」とある。

「勳功」は手柄。功績。王業を輔佐する功績を勳と言ひ、国家を保つ功績を功と言ふ。『周礼』夏官・司勳に「王功曰勳（輔成王業若周公）、國功曰功（保全國家若伊尹）」とある。

⑤成民立政 「成民」は民の生活を成り立たせる。『左伝』桓公六年に「是以聖王先成民、而後致力於神」、孔穎達疏に「言養民使成就、然後致孝享」とある。

「立政」は賢臣を登用して共に政治を確立する。周公が成王に政治の要諦を知らせ戒めた故事による。『尚書』立政に「周公作立政（周公既致政成王、恐其怠忽、故以君臣立政爲戒）、立政（言用臣當共立政、故以名篇。）……國則、罔有立政用儉人、不訓于徳。是罔顯在厥世（商周賢聖之國、則無有立政用儉利之人者、儉人不訓於徳、是使其君、無顯名在其世）。繼自今立政、其勿以儉人、其惟吉士、用勳相我國家（立政之臣、惟其吉士、用勉治我國家）」とある。

⑥儀刑萬邦 「儀刑」は手本とする。『毛詩』大雅・文王を踏まえた句。『毛詩』大雅・文王に「上天之載、無聲無臭。儀刑文

王、萬邦作孚」とあり、毛伝に「載事。刑、法。孚、信也」、鄭箋に「天之道難知也。耳不聞聲音、鼻不聞香臭。儀法文王之事、則天下咸信而順之」。傳玄「晋四箱樂歌三首・正旦大会行札歌」に「儀刑聖皇、萬邦惟則」と既出。

⑦式固崇軌 『毛詩』魯頌・泮水に「式固爾猶、淮夷卒獲」、鄭箋に「式、用。猶、謀也。用堅固女軍謀之故、故淮夷盡可獲服也」とある。

「崇軌」は前代から受け継がれてきた崇高な軌範。蔡邕「漢太尉楊公碑」（『蔡中郎集』卷三）に「祖司徒、考太尉、繼跡宰司、有助力。公承家崇軌、受天醇素」とあり、『晋書』潘岳伝に「爲乘輿箴、其辭曰、『……蓋帝王之事至大、而古今之變

允文烈考 濬哲應期  
參德天地 比功四時  
大亨以正 庶績咸熙  
肇啓晉宇 遂登皇基

至衆、文繁而義詭、意局而辭野、將欲希企前賢、髣髴崇軌、譬猶丘垤之望華岱、恒星之繫日月也、其不逮明矣」とある。

⑧光紹前蹤 「光紹」は大いに繼承する。陸機「愷懷太子誄」〔芸文類聚〕卷一六・儲宮に「茂德克廣、仁姿朗備。當克無疆、光紹有晉」とある。

「前蹤」は先祖の歩んだ道。陸機「遂志賦」〔芸文類聚〕卷二六・言志に「仰前蹤之綿邈、豈孤人之能冒」とある。また『晋書』張寔伝に「（張）軌卒、州人推寔攝父位。……下令國中曰、『悉紹前蹤、庶幾刑政不爲百姓之患、而比年飢旱、殆由庶事有缺。』」

ま

まこと

まこと

な

とお

みまひろ

まことに文徳のある輝かしき先帝、智慧深くして機運のめぐりに応じられ、仁徳を万物を育む天地と並べ、功業を秩序正しき四時の運行になぞらえる。万物は大いに通じて正しきを得、もろもろの功業がみな盛大となる。晋国の屋根をはじめて開き、いよいよ帝業の基礎を築かれた。

○押韻 「期・時・熙・基」は上平声7「之」。

①允文烈考 「允文」はまことに文の徳がある。『毛詩』周頌・武に「於皇武王、無競維烈。允文文王、克開厥後」、鄭箋に「信有文徳哉、武王也。能開其子孫之基緒」とある。傅玄「晋宗廟歌十一篇・祠文皇帝登歌」に「於皇時晉、允文文祖」と既出。『宋書』樂志二詛注稿(二)「九七頁注②参照。

「烈考」はかがやかしい功績の亡父。文帝を指す。『毛詩』周頌・雝に「既右烈考、亦右文母」、鄭箋に「烈、光也」とある。傅玄「前所作天地郊明堂歌五篇・明堂饗神歌」に「於皇烈考、光配上帝」、同「晋宗廟歌十一篇・祠廟迎送神歌」に「明明烈考、不承繼序」とある。『宋書』樂志二詛注稿(二)「一〇五頁注②及び『宋書』樂志二詛注稿(二)「八三頁注⑦参照。

②潛哲應期 「潛哲」は深い智慧。皇帝によく用いられる言葉。

『尚書』舜典に「潛哲文明、溫恭允塞」、偽孔伝に「潛、深。哲、智也。舜有深智文明、溫恭之徳。信允塞上下」とある。『毛詩』商頌・長發に「潛哲維商、長發其祥」、毛伝に「潛、深」、鄭箋に「長猶久也。……深知乎維商家之徳也。久發見其禎祥矣」とある。王延寿「魯靈光殿賦」(『文選』卷一一)に「粵若稽古、帝漢祖宗、潛哲欽明」、張載注に「若、順也。稽、考也。言能順天地、考行古之道者、帝也。潛、深也。哲、智也。又有深知欽明」とある。

「應期」は機運のめぐり合わせに応じて。『後漢書』伏隆伝に「隆移檄告曰、『乃者、猾臣王莽、殺帝盜位。宗室興兵、除亂誅莽、故羣下推立聖公、以主宗廟。而任用賊臣、殺戮賢良、

三王作亂、盜賊從橫、忤逆天心、卒爲赤眉所害。皇天祐漢、聖哲應期、陛下神武奮發、以少制衆」とある。曹毗「晋江左宗廟歌十三篇・歌世祖武帝」に「應期登禪、龍飛紫庭」と既出。

③參德天地 皇帝の徳が万物を育む天地と等しいことを言う。

『周易』乾の文言伝に「夫大人者、與天地合其徳、與日月合其明、與四時合其序、與鬼神合其吉凶」、孔穎達疏に「與天地合其徳者、莊氏云謂覆載也。與日月合其明者、謂照臨也。與四時合其序者、若賞以春夏、刑以秋冬之類也。與鬼神合其吉凶者、若福善禍淫也」、『莊子』天地に「夫子曰、夫道、覆載萬物者也、洋洋乎大哉。君子不可以不刳心焉。無爲爲之謂天、無爲言之謂徳、愛人利物之謂仁、不同同之謂大、行不崖異之謂寛、有萬不同之謂富」とある。傅玄「晋宣文舞歌二篇・羽鐸舞歌」に「參天地、陵三五」と既出。

④比功四時 皇帝の功業が秩序正しき四時の運行に等しいことを言う。前注の『周易』乾の文言伝を参照。また『莊子』知北遊に「天地有大美而不言、四時有明法而不議、萬物有成理而不説。聖人者、原天地之美而達萬物之理、是故至人無爲、

大聖不作、觀於天地之謂也」とある。成公綏「晋四箱歌十六篇」其六に「明耀參日月、功化俾四時」とある。

⑤大亨以正 君主の徳功が徐々に広まり、万物が大いに通じて正しきを得る。『周易』臨の彖伝に「臨剛浸而長、説而順、剛中而應。大亨以正、天之道也」、王弼注に「陽轉進長、陰道日消。君子日長、小人日憂。大亨以正之義」、孔穎達疏に「剛中而應、大亨以正、天之道者、天道以剛居中而下、與地相應、使物大得亨通而利正」とある。

⑥庶績咸熙 「庶績」は多くの職業の治績。『尚書』堯典に「允釐百工、庶績咸熙」、偽孔伝に「允、信。釐、治。工、官。績、功。咸、皆。熙、廣也。言定四時成歲歷、以告時授事、則能信治百官、衆功皆廣、歎其善」とある。傅玄「晋郊祀歌五篇・饗天地五郊歌三篇」其二に「皇極斯建、庶績咸熙」と既出。『宋書』樂志二訳注稿（一）一八八頁注⑨参照。

⑦肇啓晉宇 『毛詩』魯頌・閟宮に「王曰、叔父、建爾元子、俾侯于魯。大啓爾宇、爲周室輔」、毛伝に「王、成王也。元首、宇、居也」、鄭箋に「叔父謂周公也。成王告周公曰、叔父我立女首子、使爲君於魯。謂欲封伯禽也。封魯公以爲周公

後、故云大開女居、以爲我周家之輔。謂封以方七百里、欲其疆於衆國」とある。

⑧遂登皇基 「皇基」は王業の礎。班固「西都賦」(『文選』卷

一)に「圖皇基於億載、度宏規而大起」とある。張華「晉四箱樂歌十六篇・食拳東西箱樂詩十一章」其五に「啓鴻烈、隆王基」と既出。

「登」は、嵇康「琴賦」(『文選』卷一八)に「若夫三春之初、麗服以時。乃攜友生、以遊以嬉。涉蘭圃、登重基」、李善注

「春秋運斗樞曰、山者地之基」とあるように、文字通りに高い所に登るの意でも解釈できるが、ここでは前句の「啓晉宇」と対応させ、成就させる(基礎を築きあげる)の意で解釈した。『尚書』泰誓下に「時厥明、王乃大巡六師、明誓衆士、王曰、……爾衆士、其尚迪果毅、以登乃辟。……」、偽孔伝に「迪、進也。殺敵爲果、致果爲毅。登、成也、成汝君之功」とある。

明明我后 ① 玄徳通神 ②

受終正位 ③ 協應天人 ④

容民厚下 ⑤ 育物流仁 ⑥

躋我王道 ⑦ 暉光日新 ⑧

明明たる我が后 玄徳 神に通ず

終を受けて位を正し 天人に協應す

民を容れ下を厚くし 物を育み仁を流す

我が王道を躋りて 暉光 日に新たなり

右雅樂正旦大會行禮詩四章 右は雅樂正旦大會行禮の詩四章

明察なる我が君、奥深き徳は神靈に通じる。

帝位を禪讓されて正しい位に即き、天意と人心とを協和せられた。

民を包容して安寧にし、万物を養育し仁徳を世に行きわたらせる。

我が進むべき王道を登られて、輝きは日ごとに新しさを増していく。

右は雅楽正旦大会行礼の詩四章

○押韻 「神・人・仁・新」は上平17「眞」。

①明明我后 「明明」は明察なさま。『毛詩』大雅・大明に「明

明在下、赫赫在上」とある。傅玄「晋宗廟歌・祠廟迎送神歌」

に「明明烈考、丕承繼序」、曹毗「晋江左宗廟歌十三篇・歌肅

祖明皇帝」に「明明肅祖、闡弘帝祚」と既出。『宋書』樂志

二詠注稿（二）八三頁注⑥及び一一八頁注②参照。

②玄德通神 「玄德」は物事の奥深くを洞察する徳。『尚書』

舜典に「曰、重華協于帝、濬哲文明溫恭。允塞。玄德升聞、

乃命以位、偽孔伝に「玄謂幽潛、潛行道德。升聞天朝、遂見

微用」とある。

「通神」は神靈に通じる。『周易』繫辭下伝に「古者包犧氏之

王天下也、仰則觀象於天、俯則觀法於地。……於是始作八卦、

以通神明之徳、以類萬物之情」とある。劉琨「勸進表」（『文

選』卷三七）に「伏惟陛下、玄徳通於神明、聖姿合於兩儀」

とある。張華「晋四箱樂歌十六篇・食舉東西箱樂詩十一章」

其八に「玄化參自然、至徳通神明」と既出。

③受終正位 「受終」は帝位を禪讓される。『尚書』舜典に「舜

讓于徳、弗嗣。正月上日、受終于文祖」、偽孔伝に「上日、朔

日也。終謂堯終帝位之事。文祖者、堯文徳之祖廟」とある。

傅玄「晋郊祀歌五篇・饗天地五郊三篇」其一に「受終于魏、

奄有兆民」、傅玄「前所作天地郊明堂歌五篇・天地郊明堂夕

牲歌」に「受終于天、光濟萬國」と既出。

「正位」は位を正しくして尊卑の秩序を明らかにする。ここ

では帝位に即くことを言う。『周易』鼎の象伝に「木上有火

鼎。君子以正位凝命」、王弼注に「凝者、嚴整之貌也。鼎者、

取新成變者也。革去故而鼎成新。正位者、明尊卑之序也。

凝命者、以成教命之嚴也」とある。

④協應天人 天の意志と人の心とを協和させる。班固「西都

賦」（『文選』卷一）に「及至大漢受命而都之也、仰悟東井之

精、俯協河圖之靈。奉春建策、留侯演成。天人合應、以發皇明。乃眷西顧、寔惟作京」、李善注に「天、謂五星也。人、謂婁敬也。皇、謂高祖也」、王褒「四子講德論」(『文選』卷五一)に「浮遊先生陳丘子曰、……刺史見太上聖明、股肱竭力、德澤洪茂、黎庶和睦、天人並應、屢降瑞福、故作三篇之詩以歌詠之也」とある。また『宋書』礼志三に「魏元帝咸熙二年十二月)丙寅、晉設壇場于南郊、柴燎告類、未有祖配。其文曰「……八紘同軌、遐邇馳義、祥瑞屢臻、天人協應、無思不服。」

⑤容民厚下 「容民」は民を包容し安寧にする。『周易』師の象伝に「地中有水師、君子以容民畜衆」、孔穎達疏に「君子以容民畜衆者、言君子法此師卦、容納其民、畜養其衆。若爲人除害、使衆得寧、此則容民畜衆也」とある。

「厚下」は人々に手厚く施し豊かにする。『周易』剥の象伝に「山附於地剝。上以厚下安宅」とあり、王弼注に「厚下者、牀不見剝也。安宅者、物不失處也。厚下安宅、治剝之道也」とある。

⑥育物流仁 「育物」は万物を育てる。曹植「謝妻改封表」(『芸

文類聚』卷五一・婦人封)に「陛下體乾坤育物之德、東海合容之大」、『後漢書』輿服志上に「後世聖人、知恤民之憂思深大者、必饗其樂。勤仁毓物使不夭折者、必受其福」とある。「流仁」は仁徳を世に行きわたらせる。傅玄「食拳棗東西箱歌十二篇・時邕」に「媿媿文皇、邁德流仁」と既出。

⑦躋我王道 「王道」は先王が行った公正無私の理想的政治。『尚書』洪範に「無偏無陂、遵王之義(偏、不平。陂、不正。言當循先王之正義以治民)。無有作好、遵王之道、無有作惡、遵王之路(言無有亂爲私好惡、動必循先王之道路)。無偏無黨、王道蕩蕩(言開闢)、無黨無偏、王道平平(言辯治)、無反無側、王道正直(言所行無反道不正、則王道平直)」、孔穎達疏に「更言大中之體。爲人君者、當無偏私、無陂曲、動循先王之正義。無有亂爲私好、謬賞惡人、動循先王之正道。無有亂爲私惡、濫罰善人、動循先王之正路。無偏私、無阿黨、王家所行之道、蕩蕩然開闢矣。無阿黨、無偏私、王者所立之道、平平然辯治矣。所行無反道、無偏側、王家之道正直矣。所行得無偏私皆正直者、會集其中有中之道而行之。若其行必得中、則天下歸其中矣。言人皆謂此人爲大中之人也」。

⑧暉光日新 「周易」未濟・六五の象伝に「君子之光。其暉吉也」、孔穎達疏に「其暉吉者、言君子之德光暉著見、然後乃得吉也」、また「周易」繫辭伝上に「富有之謂大業、日新之謂

盛徳」、韓康伯注に「體化合變、故曰日新」とある。張華「勵志詩」(『文選』卷一九)に「進徳脩業、暉光日新」とある。

(佐藤大志)

晉正徳大豫二舞歌二篇 張華造 晉の正徳大豫二舞歌二篇 張華造る

正徳舞歌詩

正徳舞の歌詩

日皇上天 玄鑿惟光<sup>③</sup>

日に皇いなる上天は 玄鑿 惟れ光く

神器周回<sup>④</sup> 五徳代章<sup>⑤</sup>

神器は周回り 五徳は代も章らかなり

祚命于晉 世有哲王<sup>⑥</sup>

晉に祚命し 世よ哲王有り

弘濟區夏<sup>⑦</sup> 甄陶萬方<sup>⑧</sup>

區夏を弘濟し 萬方を甄陶す

大明垂曜<sup>⑨</sup> 旁燭無疆<sup>⑩</sup>

大明 曜きを垂れ 旁く燭らすこと疆り無く

崑崙庶類<sup>⑪</sup> 風徳永康<sup>⑫</sup>

崑崙たる庶類は 徳に風せられ永く康らぐ

皇道惟清<sup>⑬</sup> 禮樂斯經<sup>⑭</sup>

皇道 惟れ清く 禮樂 斯れ經なり

金石在縣<sup>⑮</sup> 萬舞在庭<sup>⑯</sup>

金石は縣に在り 萬舞は庭に在り

象容表慶<sup>⑰</sup> 協律被聲<sup>⑱</sup>

容を象り慶びを表し 律に協い聲に被らしめ

軼武超濩<sup>⑲</sup> 取節六英<sup>⑳</sup>

武を軼え濩を超え 六英に取節す

同進退讓<sup>㉑</sup> 化漸無形<sup>㉒</sup>

同に進み退讓し 化は無形に漸み

大和宣洽<sup>②</sup> 通于幽冥<sup>③</sup>

大和は宣洽<sup>あまね</sup>く 幽冥に通ず

晋の正徳・大豫の二舞歌二篇 張華の作

正徳舞の歌詩

大いなる上天は、玄妙なるみそなわしが広がり充ちており、  
神秘の器がめぐり、五行の徳がわかるがわる顕れた。

幸いなる天命が晋にくんだり、代々智慧ある王者が出て、

中夏の区域を大いに救い、すべての方面の人々を化育した。

大いなる明るさが輝きを垂れ、あたりを限りなく照らしたので、

敦厚なすべての者たちは、徳に感化されとわに安らいだ。

大いなる道は清らか、礼樂は常なるもの、

金石の樂器はかね懸けに、万舞の舞いは宗廟の庭に。

舞いは天下の樂しむさまをかたどり慶びをあらわし、音律にかなないメロディを付されて、

周の武王の「武」の舞いや殷の湯王の「濩」の舞いを超え、帝嚳（堯帝の父）の「六英」から善さを取る。

ともに進み退けば、教化は形無きものをも浸<sup>ひた</sup>しゆき、

大いなる和があまねく広がり、おぐらき世界にも通じる。

○押韻 「光・康」は下平11「唐」、「章・王・方・疆」は下平10「陽」。「經・庭・形・冥」は下平15「青」、「聲」は下平14「清」、「英」は下平12「庚」。

①晉正徳大豫二舞歌 『宋書』樂志二に「晉武帝泰始」九年

(二七三)、荀勗遂典知樂事、使郭瓊・宋識等造正徳・大豫之舞、而勗及傅玄・張華又各造此舞哥詩。……咸寧元年(二七

五)、詔定祖宗之號、而廟樂同用正徳・大豫之舞。……宋武

帝永初元年(四二〇)七月、……又改正徳舞曰前舞、大豫舞

曰後舞。』『宋書』樂志二には、「傅玄造」の「晉正徳大豫二舞

歌二篇」と「荀勗造」の「晉正徳大豫二舞歌二篇」がすでに掲出されている。

②張華 二二三―三〇〇。『晉書』張華伝に「張華字茂先、范

陽方城人也。……及(趙王)倫・(孫)秀將廢賈后……遂害之

於前殿馬道南、夷三族、朝野莫不悲痛之。時年六十九。」

③玄鑿惟光 「玄鑿」の語は、『宋書』樂志収録の樂府に見当た

らない。「神鑿」「天鑿」「天鑑」は、以下のように傅玄と王珣

の作にあるが、どちらも主述構造で、「玄鑿」のような修飾・

被修飾構造ではない。『宋書』樂志二・傅玄「晉宗廟歌十一

篇・祠廟夕牲歌」に「神鑿厥誠、博碩斯歆。祖考降饗、以虞

孝孫之心」(『宋書』樂志二訳注稿(二)七九頁)、同・傅玄

「晉四箱樂歌三首・天鑑・正且大舍行礼歌」に「天鑿有晉、

世祚聖皇」(同(三)一〇〇頁)、同・王珣「晉江左宗廟歌十

三篇・歌烈宗孝武皇帝」に「天鑿有晉、欽哉烈宗。」(同(二)一三三頁)

「光」は、『尚書』の「光」と同じく、広がり充つる意と取っ

た。『尚書』洛誥に「惟公德明、光于上下、勤施于四方」、偽

孔伝に「言公德、光於天地、勤政施於四海萬邦、四夷服仰、

公德而化之」、孔穎達疏に「堯典訓光爲充、此光亦爲充也。

言公之明德、充滿天地、……」、『尚書』堯典には「昔在帝堯、

聰明文思、光宅天下(偽孔伝、言聖德之遠著)《孔疏、故此

德、充滿居止於天下、而遠著。德既如此、政化有成、……》。

ただ この「光」が句中の「鑿」字の縁語として配されてい

るなら、「輝く」意でもありうる。

④神器周回 「神器」は、天下、ひいては帝王の位。『老子』二

九章に「將欲取天下(河上公注、欲爲天下主也)而爲之(欲

以有爲治民」、吾見其不得已（我見其不得天道人心已明矣、天道惡煩濁、人心惡多欲）。天下神器（王弼注、神、無形無方也。器、合成也。無形以合、故謂之神器也）、不可爲也。爲者敗之、執者失之。『後漢書』崔駰傳・崔駰「慰志賦」に「愍余生之不造兮、丁漢氏之中微。……六柄制于家門兮、王綱濯以陵遲（李賢注、國語……韋昭注云「六柄、生殺貧賤富貴也」）。……賭嫚賊而乘釁兮、竊神器之萬機（易曰「嫚賊誨盜」。釁、隙也。神器、帝王之位。老子曰「天下神器、不可爲也」）。」「周回」は、より遅い例だが『文選』卷二五・盧諶「贈劉琨詩」に「天地盈虛、寒暑周迴。」

⑤五德代章 「五德」は五行、ひいてはその徳を体现する王朝。『文選』卷四八・班固「典引」に「太極之原、兩儀始分、……肇命民主、五德初始」、李善注所引蔡邕注に「民主者、天子也。尚書曰、成湯簡代夏作民主。五德、五行之徳。自伏羲已下、帝王相代、各據其一行、始於木、終於水、則復始也。」「章」は、『易』姤の彖辭に「姤。遇也。柔遇剛也。勿用取女、不可與長也。天地相遇、品物咸章也」、孔穎達疏に「天地若各允所處、不相交遇、則萬品庶物、无由彰顯。」

⑥哲王 智を有するすぐれた王。『尚書』酒誥に「王曰、封我聞惟曰在昔、殷先哲王、迪畏天、顯小民（偽孔伝、聞之於古、殷先智王、謂湯、蹈道畏天、明著小民）、經德秉哲、自成湯咸至于帝乙、成王畏相（能常德持智、從湯至帝乙、中間之王、猶保成其王道、畏敬輔相之臣、不敢爲非）。」

⑦弘濟區夏 「弘濟」は、『尚書』顧命に「成王將崩、命召公畢公（二公爲二伯、中分天下、而治之）、率諸侯、相康王、作顧命（臨終之命曰顧命）。……今天降疾、殆、弗興弗悟。爾、尚明時朕言（今天下疾、我身甚危殆、不起不悟、言必死。汝當庶幾、明是我言、勿忽略）、用敬保元子釗、弘濟于艱難（用奉我言、敬安太子釗。釗、康王名。大度於艱難、勤德政）。」「區夏」は、『尚書』康誥に「成王既伐管叔蔡叔（滅三監）。以殷餘民、封康叔、作康誥。……不敢侮鰥寡、庸庸祇祇、威威顯民（惠恤窮民、不慢鰥夫寡婦、用可用、敬可敬、刑可刑、明此道、以示民）、用肇造我區夏、越我二邦以修（用此明德慎罰之道、始爲政於我區域諸夏、故於我二邦、皆以修治）。」「甄陶萬方 「甄陶」は、揚雄『法言』先知に「聖人樂陶成天下之化、使人有士君子之器者也。……甄陶天下者、其在和平。」

剛則颯、柔則壞。」

「萬方」は、『尚書』湯誥に「王歸自克夏、至于亳、誕告萬方（誕、大也。以天命大義、告萬方之眾人）。」

⑨大明 『易』乾の彖辭に「大哉乾元、萬物資始、乃統天。雲行雨施、品物流形。大明終始、六位時成、時乘六龍、以御天。乾道變化、各正性命（天也者、形之名也。健也者、用形者也。夫形也者、物之彙也。有天之形、而能永保无虧、爲物之首。統之者、豈非至健哉。大明乎終始之道、故六位不失其時而成、升降无常、隨時而用。處則乘潛龍、出則乘飛龍、故曰「時乘六龍」也。乘變化而御大器、靜專動直、不失大和。豈非正性命之情者邪。）」

⑩旁燭無疆 揚雄「法言」の「問明」篇の解題として『漢書』揚雄伝下に「譎以爲十三卷、象論語、號曰法言。法言文多不著、獨著其目。……明哲煌煌、旁燭亡疆（師古曰、煌煌、盛貌也。燭、照也。無疆、猶無極也）、遜于不虞、以保天命。譎問明第六。」

⑪蚩蚩庶類 「蚩蚩」は、敦厚なさま。『毛詩』衛風・氓に「氓之蚩蚩、抱布貿絲（氓、民也。蚩蚩者、敦厚之貌。布、幣也。

箋云、幣者、所以質買物也。季春始蠶、子孟夏賣絲。）」

「庶類」は、『国語』鄭語に「桓公……問于史伯曰『王室多故、余懼及焉、其何所以逃死。』史伯對曰『……夏禹能單平水土、以品處庶類者也（韋昭注、單、盡也。庶、眾也。品、高下之品也。禹除水災、使萬物高下各得其所。）」

⑫風德永康 「風德」は、徳を風のように及ぼす。『国語』晋語八に「平公說新聲（韋昭注、說、樂也）、師曠曰『公室其將卑乎。君之明兆於衰矣。夫樂以開山川之風也（開、通也。故八音以通八風）、以耀徳於廣遠也。風徳以廣之（風、風宣其徳、廣之於四方也。作樂各象其徳、韶・夏・護・武是也）、風山川以遠之（遠、遠其徳。周禮、每樂一變、各有所致、謂鱗介毛羽之物、山林川澤天地之神祇也）、風物以聽之（言風化之動物莫不傾耳而聽。）」発想のものは、『論語』顔淵篇の「君子之徳風、小人之徳草。草上之風必偃（孔曰、亦欲令康子先自正偃、仆也。加草以風、無不仆者、猶民之化於上）」であろう。

『宋書』樂志二・荀勗「晋正徳舞歌」にも「上化如風、民應如草。穆穆斌斌、形于綴兆」とある。

「永康」は、永くやすらか。『尚書』周官に「成王既黜殷命、

滅淮夷（黜殷、在周公東征時。滅淮夷、在成王卽政後。事相因、故連言之）。還歸在豐、作周官（成王雖作洛邑、猶還西周）。……嗚呼三事暨大夫、敬爾有官、亂爾有政（歎而勸之。公卿已下、各敬居汝所有之官、治汝所有之職）。以佑乃辟、永康兆民、萬邦惟無斁（言當敬治官政、以助汝君、長安天下兆民、則天下萬國、惟乃無厭我周德）。

⑬皇道 『文選』卷一・班固「西都賦」に「有西都賓問於東都主人曰『蓋聞皇漢之初經營也、嘗有意乎都河洛矣。輟而弗康、寔用西遷、作我上都。主人聞其故而睹其制乎。』」主人曰『未也。原賓據懷舊之蓄念、發思古之幽情。博我以皇道、弘我以漢京（廣雅曰、據、舒也。孔安國尚書傳曰、蓄、積也。論語、顏淵曰、夫子博我以文）。』

⑭禮樂斯經 「禮樂」は、『礼記』樂記に「知樂、則幾於禮矣。禮樂皆得、謂之有德。」  
「〇〇惟〇〇」と「〇〇斯〇〇」が呼応する構文は、『毛詩』小雅・采芣に「彼爾維何、維常之華（毛伝、爾、華、盛貌。常、常棣也。鄭箋、此言彼爾者、乃常棣之華、以興將率車馬服飾之盛）。彼路斯何、君子之車（鄭箋、斯、此也。君子謂將率）。

⑮金石 樂器の「鍾」と「磬」。『国語』楚語上に「靈王爲章華之臺、與伍舉升焉、曰『臺美夫。』」對曰「臣……不聞其以土木之崇高形鏤爲美、而以金石匏竹之昌大鞀庶爲樂（韋昭注、金、鍾也。石、磬也。匏、笙也。竹、簫管也。昌、盛也。鞀、譚也。庶、眾也）。」

⑯萬舞 宗廟の公庭で、盾や鳥の羽を持つて舞う舞。『毛詩』邶風・簡兮に「簡兮簡兮、方將萬舞（毛伝、簡、大也。方、四方也。將、行也。以干羽爲萬舞、用之宗廟山川。故言於四方）。……碩人僕僕、公庭萬舞（碩人、大德也。僕僕、容貌大也。萬舞、非但在四方、親在宗廟公庭）。」

⑰象容 「象」はかたどる。『漢書』礼樂志に「高（祖）廟奏武德・文始・五行之舞。……武德舞者、高祖四年作、以象天下樂已行武以除亂也。」

⑱軼武超濩 「武」は周の武王の舞、「濩」は殷の湯王の舞。『論語』八佾に「子謂韶、盡美矣、又盡善也（孔曰、韶、舜樂名。謂以聖德受禪、故盡善）。謂武、盡美矣、未盡善也（孔曰、武、武王樂也。以征伐取天下、故未盡善）。」「周礼」春官・大司樂に「以樂舞、教國子舞雲門・大卷・大咸・大磬・

大夏・大濩・大武（鄭玄注、此周所存六代之樂。……大濩、湯樂也。湯以寬治民、而除其邪、言其德能使天下得其所也。

大武、武王樂也。武王伐紂、以除其害、言其德能成武功。」

①⑨取節六英 「取節」は善い部分を取ること。『左伝』僖公三

十三年に「詩曰『采芣采芣、無以下體』。君取節焉、可也（杜預注、詩國風也。芣菲之菜、上善下惡。食之者、不以其惡而棄其善、言可取其善節）。」

「六英」は、堯帝の父の帝嚳の音楽。『呂氏春秋』古楽に「帝嚳命咸黑作爲聲歌、九招・六列・六英。」

②⑩同進退讓 舞人たちが一斉に進退する舞い姿をいうか。「退讓」は、『礼記』曲礼上に「道德仁義、非禮不成。……是以君子恭敬、撝節退讓以明禮（鄭玄注、撝、猶趨也。陸德明音義、撝、祖本反。趨、士俱反、就也、向也）《退讓以明禮者、應進

而遷曰退、應受而推曰讓。以明禮者、既道德仁義已下、並須禮以成。故君子之身行恭敬、趨法度及退讓之事以明禮也。』

また「古楽」の音の「進退」がそろうことは、『礼記』楽記に「子夏對曰『今夫古楽、進旅退旅、和正以廣（旅、猶俱也。

俱進俱退、言其齊一也。和正以廣、無姦聲也）《進旅退旅者、

旅謂俱齊。言古樂進則俱齊、退亦俱齊、進退如一、不參差也。』」

②⑪化漸無形 「漸」は、しだいにある場所に進みゆく。『易』漸

に「女歸吉。利貞（漸者、漸進之卦也）《正義曰、漸者、不速之名也。凡物有變移、徐而不速、謂之漸也》。……初六。鴻

漸于干。小子厲有言。无咎（鴻、水鳥也。適進之義、始於下而升者也、故以鴻爲喻之）《正義曰、鴻漸于干者、鴻、水鳥

也。干、水涯也。……初之始進、未得祿位、上无應援、體又窮下、若鴻之進于河之干、不得安寧也》。……六二。鴻漸于

磐（磐、山石之安者）。……九三。鴻漸于陸（陸、高之頂也。

進而之陸、與四相得、不能復反者也）。……六四。鴻漸于木（鳥而之木、得其宜也）。……九五。鴻漸于陵（陵、次陸者也。

進得中位、而隔乎三四不得與其應合）。……上九。鴻漸于陸。其羽可用爲儀。吉（進處高潔、不繫於位、无物可以屈其心而

亂其志、峨峨清遠、儀可貴也。故曰、其羽可用爲儀吉。』また『晋書』楽志上・張華「中宮所歌」に「先王統大業、玄化

漸八維。儀刑乎萬邦、内訓隆壺闈。」

「無形」は、形に現れないもの。『礼記』の「視於無形」は、

見えない父母の姿を心に見ること。「礼記」曲礼上に「爲人子者、……聽於無聲、視於無形（恒若親之將有教使然）」《聽於無聲者、謂聽而不聞父母之聲、此明人子常禮也。視於無形者、謂視而不見父母之形。雖無聲無形、恒常於心想像、似見形聞聲。謂父母將有教使已然也。》

②②大和宣洽 「大和」は、『易』乾の彖辭に「大哉乾元。……保合大和、乃利貞」、王弼注に「不和而剛暴」、孔穎達疏に「此二句、釋利貞也。純陽剛暴、若无和順、則物不得利、又失其正。以能保安合會大和之道、乃能利貞於萬物。言萬物得利而貞正也。」

「宣洽」は、『後漢書』張衡伝、張衡「応問」に「今也、皇澤宣洽、海外混同、萬方億醜、并質共劑（李賢注、質・劑、猶今分支契也。并・共、猶言交通也）。」

②③幽冥 「幽冥」は、『淮南子』説山訓では「道」の状態を指すが、『宋書』所収の晋代の詔や傅玄の樂府では、冥界や鬼神

の世界を指すように見える。「淮南子」説山訓に「魄問於魂曰「道何以爲體。」曰「以無有爲體。」魄曰「無有有形乎。」魂曰「無有。」「何得而聞也。」魂曰「吾直有所遇之耳。視之無形、聽之無聲、謂之幽冥。幽冥者、所以喻道、而非道也。」他方『宋書』礼志二には、「及（晉）文帝崩、國內行服三日。武帝亦遵漢魏之典、既葬除喪、然猶深衣素冠、降席撤膳。太宰司馬孚……等奏曰「……輒敕御府易服、内省改坐、太官復膳。諸所施行、皆如舊制。」詔曰「每感念幽冥、而不得終直經於草土、以存此痛。」同・礼志四には「晉武帝泰始元年十二月、詔「昔聖帝明王、修五嶽四瀆、名山川澤、各有定制。所以報陰陽之功、而當幽明之道故也。然以道莅天下者、其鬼不神、其神不傷人也。故祝史薦而無媿詞、是以其人敬慎幽冥、而淫祀不作。」同・樂志四・傅玄「晋鼓吹歌曲」二十二篇「於穆我皇 古雉子行」には「天地合德、日月同榮。赫赫煌煌、燿幽冥。三光克從、於顯天垂景星。」

大豫舞歌詩<sup>①</sup>

大豫舞の歌詩

惟天之命<sup>②</sup> 符運<sup>③</sup>有歸

惟れ天の命 符運に歸する有り

赫赫大晉<sup>④</sup> 三后重暉<sup>⑤</sup>

赫赫たる大晉 三后は暉りを重ぬ

繼明昭世<sup>⑥</sup> 光撫九圍<sup>⑦</sup>

明を繼ぎ世を昭らし 光く九圍を撫ず

我皇紹命<sup>⑧</sup> 遂在璿璣<sup>⑨</sup>

我が皇は期を紹ぎ 遂に璿璣を在せり

羣生屬命<sup>⑩</sup> 奄有庶邦<sup>⑪</sup>

羣生 屬命され 庶邦を奄有す

慎徽五典<sup>⑫</sup> 玄教遐通<sup>⑬</sup>

慎みて五典を徽みし 玄教は遐かに通ず

萬方同軌<sup>⑭</sup> 率土咸雍<sup>⑮</sup>

萬方は軌を同じくし 率土は咸な雍らぐ

爰制大豫<sup>⑯</sup> 宣德舞功<sup>⑰</sup>

爰に大豫を制り 德を宣べ功を舞う

淳化既穆<sup>⑱</sup> 王道協隆<sup>⑲</sup>

淳きは既に穆しく 王道は協い隆ん

仁及草木<sup>⑳</sup> 惠加昆蟲<sup>㉑</sup>

仁は草木にも及び 惠は昆蟲にも加う

億兆夷人<sup>㉒</sup> 說仰皇風<sup>㉓</sup>

億兆の夷人は 說びて皇風を仰ぐ

丕顯大業<sup>㉔</sup> 永世彌崇<sup>㉕</sup>

丕に大業を顯らかにし 永世に彌よ崇し

大豫舞の歌詩

ああ天命よ、受命の符のめぐりには帰するところがあり、

盛んなる大晋が、三人の王者の光を重ね、

明るさを継ぎ世を昭らし、広く天下を安んじ、

我が君がめぐりを紹ぎ、かくて天文を察した。

万物に直接に命ぜられ、諸侯の国々を保有し、

つつしんで五常の教えを美みし、玄妙なる教化がはるかにいきわたり、

あらゆる地域が車の幅を同じくし、全土がみな和らぎ、

かくて大豫の舞を定め、君徳を宣べ君功を舞にあらわした。

厚き教化はすでにうるわしく、王道は協いさかん、

仁愛は草木にも及び、恩恵は昆虫にも加わり、

億兆の平凡な人々も、喜んで君の徳化を仰ぎ、

おおいに大業を明らかにし、永遠にますます高い。

○押韻 「歸・暉・園・璣」は上平8「微」。「邦」は上平4「江」、「雍」は上平3「鍾」、「通・功・隆・蟲・風・崇」は上平1「東」。

①大豫舞歌詩 前作の注①を参照。

②惟天之命 「天命」は、『尚書』盤庚上に「先王有服、恪謹天命」、偽孔伝に「先王有所服行、敬謹天命。」「維天之命」は、

『毛詩』周頌・維天之命に「維天之命、於穆不已」、毛伝に「孟

仲子曰、大哉、天命之無極、而美周之禮也」、鄭箋に「箋云、

命、猶道也。天之道、於乎美哉、動而不止、行而不已」、孔疏

命、猶道也。天之道、於乎美哉、動而不止、行而不已」、孔疏

に「孟仲子、孟子從昆弟、學於孟子者也。」

「惟○之□」の構文は、現行の『毛詩』に見当たらないが「維

○之□」は多数。『宋書』樂志所収樂府では王韶之「宋宗廟

登歌」其七に「惟天有命、眷求上哲」（『宋書』樂志二訳注稿

（二）一五一頁）。

③符運 受命の瑞祥のめぐり。『漢書』董仲舒伝・董仲舒「対

策」に「臣聞、天之所大奉使之王者、必有非人力所能致而自至者、此受命之符也。天下之人同心歸之、若歸父母、故天瑞應誠而至。書曰『白魚入于王舟、有火復于王屋、流爲烏』、此蓋受命之符也。」

④赫赫 盛んなさま。『毛詩』大雅・常武に「赫赫明明、王命卿士」、毛伝に「赫赫然、盛也。明明然、察也」、鄭箋に「顯著乎、昭察乎、宣王之命卿士爲大將也。」

⑤三后重暉 「三后」は、周の大王・王季・文王に重ねつつ、司馬懿、司馬師・司馬昭を暗示。『毛詩』大雅・下武に「三后在天、王配于京」、毛伝に「三后、大王・王季・文王也。王、武王也」、鄭箋に「此三后、既没登遐、精氣在天矣。武王又能配行其道、於京、謂鎬京也。」

「重暉」は、「重光」として『尚書』顧命に「昔君文王武王、宣重光」、偽孔伝に「言昔先君文武、布其重光纘聖之德」、陸徳明音義に「重光、馬云、日月星也。」

⑥繼明昭世 「繼明」は、『易』離卦に「象曰、明兩作離、大人以繼明照于四方（繼、謂不絶也。明照相繼、不絶曠也）」。「昭世」は、世を明るくする。『尚書』康王之誥に「昔君文

武、丕平富、不務咎（偽孔伝、言先君文武、道大政化平美、不務咎惡）、底至齊（陸音義、馬讀絶句）信、用昭明于天下（致行至中信之道、用顯明於天下、言聖德治）。」なお中華書局標点本校勘記に「昭」、晉書卷二二樂志上、樂府詩集卷五二作「紹」とあるが、『易』離の「照于四方」、『尚書』康王之誥の「昭明于天下」から「紹」（繼ぐ）に改めなくとも読める。また次次句には「我皇紹期」と「紹」字がある。

⑦光撫九圍 「光」については、前作の注③を参照。

「九圍」は九州、天下。『毛詩』商頌・長髮に「上帝是祗、帝命式于九圍（九圍、九州也。箋云、……祗、敬。式、用也。……天命是故愛敬之也。天於是又命之、使用事於天下、言王之也）」。

⑧我皇紹期 「皇」は君、「紹」は繼ぐ。『毛詩』周頌・桓に「於昭于天、皇以間之（間、代也。箋云、于、曰也。皇、君也。於明乎曰天也、紂爲天下之君、但由爲惡、天以武王代之。）」『尚書』盤庚上に「紹復先王之大業、底綏四方（我今遷向新都、上天其必長我殷之王命於此新邑、繼復先王之大業、致行其道以安四方之人）」。

⑨遂在璿璣 「在」は察す、「璿璣」は天文を觀察する機器。堯

の帝位を継いだ舜の行為になぞらえた句。『尚書』舜典に「正月上日、受終於文祖（上日、朔日也。終、謂堯終帝位之事。

文祖者、堯文德之祖廟）。在璿璣玉衡、以齊七政（在、察也。

璿、美玉、璣、衡玉者、正天文之器、可運轉者。七政、日月

五星、各異政。舜察天文、齊七政、以審已當天心與否。』

⑩羣生屬命 万物が皇帝から直接命を受ける臣下となること。

『儀禮』特牲饋食礼に「衆賓及衆兄弟内賓宗婦、若有公有司私臣、皆殺脅」、鄭注に「……凡骨有肉曰殺。……公有司、亦

士之屬命於君者也。私臣、自己所辟除者」、賈公彥疏に「云己所辟除者、則府史之等不命於君者也」。鄭注と賈疏は、經

文の「公有司」と「私臣」を對蹠的にとらえ、前者を君主に直接命を受ける直參の士とする。「羣生」は樂志二所収の傳

玄や荀勗の樂府にも多いが、「屬命」はここにのみ見え、それ以前の用例も乏しい。のちの例になるが、『芸文類聚』卷

一三・劉琨「勸進元帝表」に「加以王室中微、邦基將絶、遣

民元元、屬命陛下。陛下以德則無所與讓。」

⑪奄有庶邦 「奄有」は、あまねく有する。『毛詩』商頌・玄鳥

に「古帝命武湯、正域彼四方。方命厥后、奄有九有（正、長。域、有也。九有、九州也。箋云、古帝、天也。天帝命有威武之德者成湯、使之長有邦域、爲政於天下。方命其君、謂徧告諸侯也。湯有是德、故覆有九州、爲之王也。）」

「庶邦」は、諸侯の国々。『尚書』武成に「庶邦冢君暨百工、受命于周（諸侯與百官、受政命於周、明一統。）」

⑫愼微五典 「微」は「美（よみ）す」、「五典」は五常の教え。

注⑨同様に、舜になぞらえた句。『尚書』舜典に「愼微五典、五典克從（微、美也。五典、五常之教、父義母慈兄友弟恭子

孝。舜愼美篤行斯道、舉八元、使布之於四方、五教能從無違命。）」

⑬玄教遐通 「玄教」は、十三經注疏に見えず、『宋書』樂志では荀勗「食舉樂東西廂歌十二篇」其六とこれのみ。

「遐通」は、『文選』卷五六・曹植「王仲宣誄」に「自君二祖、爲光爲龍（李善注、張璠漢紀曰、王龔、字伯宗、有高名於天下、順帝時爲太尉。暢字叔茂、名在八俊、靈帝時爲司空。魏

志曰、祭會祖父龔、祖父暢、皆爲漢三公。……或統太尉、或

掌司空。百揆惟叙、五典克從（尚書曰、納于百揆、百揆時敘。

又曰、慎微五典、五典克從。天靜人和、皇教遐通。」「皇教遐通」には李善注が無い。

⑭萬方同軌 「萬方」は、『尚書』湯詁に「王歸自克夏、至于亳、誕告萬方〔誕、大也。以天命大義、告萬方之眾人〕。」「

「同軌」は、聖徳ある天子が制度を統一することの提喻か。

「礼記」中庸に「子曰、……非天子不議禮、不制度、不考文〔此天下所共行、天子乃能一之也。禮、謂人所服行也。度、

國家宮室及車輿也。文、書名也〕。今天下車同軌、書同文、

行同倫。雖有其位、苟無其徳、不敢作禮樂焉。雖有其徳、苟無其位、亦不敢作禮樂焉〔言作禮樂者、必聖人在天子之位〕。』

⑮率土咸雍 「率土」は、『詩經』小雅・北山に「溥天之下、莫非王土。率土之濱、莫非王臣〔溥、大。率、循。濱、涯也。箋云、此言、王之土地廣矣、王之臣又眾矣。何求而不得、何

使而不行〕。』

「雍」は、『尚書』堯典に「百姓昭明協和、萬邦黎民、於變時雍〔昭、亦明也。協、合。黎、眾。時、是。雍、和也。言天

下眾民、皆變化化上、是以風俗大和〕。』

⑯爰制大豫 「制」は、作る。音楽や舞を作る意でも用いられ

る。『宋書』樂志一に「明帝太和初、……公卿奏曰『……而未制樂舞、非所以昭徳紀功。夫哥以詠徳、舞以象事。於文、文武爲斌、兼秉文武、聖徳所以章明也。臣等謹制樂舞名章斌之舞。』」

「大豫」は、ここでは舞名を指す固有名詞か。先の傅玄「晋

正徳大豫二舞歌二篇」大豫舞歌の「嘉樂大豫」句で、「大豫」を固有名詞ではなく「大いにやわらぐ」とした(『宋書』樂志

二 訳注稿(三)一三二頁)のは、直前の「正徳舞歌」が、詩

篇中に「正徳」を固有名詞で用いず、三聯目に「在天斯正、在地成徳」と、「正」と「徳」を句中に詠じこむ手法を採って

おり、それに合わせたため。なお「大豫」は樂志二にあつて例、王韶之「宋前舞後舞歌三篇」後舞歌一章に「乃舞大豫、欽若天人」とあり、この「大豫」も固有名詞か。

⑰宣徳舞功 「宣徳」は、『史記』三王世家に「褚先生曰、……

宣帝初立、推恩宣徳、以本始元年中盡復封燕王且兩子、一子爲安定侯、立燕故太子建爲廣陽王、以奉燕王祭祀。」

「舞功」は、『史記』孝文本紀に「孝景皇帝元年十月、制詔御

史』蓋聞古者祖有功而宗有徳、制禮樂各有由。聞歌者、所以

發德也、舞者、所以明功也。』〔後漢書〕孝明帝紀にも「（永平二年）使尚書令持節詔驃騎將軍・三公曰『今令月吉日、宗祀光武皇帝於明堂、以配五帝。禮備法物、樂和八音、詠祉福、舞功德（李賢注、社亦福也。……景帝詔曰、歌者所以發德、舞者所以明功。）』」

⑱淳化既穆 「淳化」は、『史記』五帝本紀黃帝本紀に「時播百穀草木（集解、王肅曰、時、是也。索隱、爲一句。正義、言順四時之所宜、而布種百穀草木也）、淳化鳥獸蟲蛾。」

「穆」は、『尚書』舜典に「慎徽五典、五典克從。納于百揆、百揆時敘。賓于四門、四門穆穆（穆穆、美也。四門、四方之門。舜流四凶、族四方。諸侯來朝者、舜賓迎之、皆有美德無凶人。）」注⑳も参照。

⑲王道協隆 「王道」は、『尚書』洪範に「箕子乃言曰『……無偏無黨、王道蕩蕩（言開闢）。無黨無偏、王道平平（言辯治）。無反無側、王道正直（言所行無反道不正、則王道平直）。會其有極、歸其有極（言會其有中而行之、則天下皆歸其有中矣。）」

「協」は、徳が先代に合致すること。『尚書』舜典に「堯

曰、重華協于帝（華、謂文徳。言其光文重、合於堯俱聖明）  
《曰、此舜能繼堯重其文徳之光華、用此徳合於帝堯、與堯俱聖明也。》」注⑨⑫⑱も参照。

⑳仁及草木 「毛詩」大雅・行葦の毛序に「行葦、忠厚也。周家忠厚、仁及草木。故能内睦九族、外尊事黃耆、養老乞言、以成其福祿焉。」

㉑惠加昆蟲 「毛詩」大雅・靈台の毛序に「靈臺、民始附也。文王受命、而民樂其有靈徳、以及鳥獸昆蟲焉。」注⑱の『史記』五帝本紀黃帝本紀も参照。また『宋書』樂志三「相和」武帝詞「対酒歌太平時・対酒」に「耄耆皆得以壽終、恩徳廣及草木昆蟲。」同・樂志四・韋昭「呉鼓吹曲十二篇」「從曆教」に「徳澤浸及昆蟲、浩蕩越前代。」

㉒億兆夷人 偽孔伝や孔疏によれば、大勢の凡人。それぞれに考えや行動を異にする一般人たち。『尚書』泰誓中に「受（殷の紂王）有億兆夷人、離心離徳（平人凡人也。雖多、而執心用徳不同）《正義曰、昭二十四年左傳、此文、服虔杜預以夷人爲夷狄之人。即如彼言、惟云億兆夷人、則受率其旅若林、即曾無華夏人矣。故傳、訓夷爲平、平人爲凡人、言其智慮齊、

識見同、人數雖多、執心用德不同。心謂謀慮、德謂用行。智識既齊、各欲申意、故心德不同也。予有亂臣十人、同心同德。〔我治理之臣、雖少而心德同。〕

也。顯、光也。光、亦明也。於夜昧冥之時、思欲大明其德。〔大業〕は、先王の大いなる功業。『尚書』盤庚上に「紹復先王之業、底綏四方。」

②皇風 『文選』卷一・班固「東都賦」に「於是薦三犧、效五牲。禮神祇、懷百靈。觀明堂、臨辟雍。揚緝熙、宣皇風。登靈臺、考休徵」とあり、「皇風」には付注なし。

⑤永世 永遠。『尚書』說命下に「(傅) 說曰『……事不師古、以克永世、匪說攸聞(事不法古訓、而以能長世、非說所聞、言無是道)』」微子之命に「殷王元子。惟稽古崇德象賢、統承先王、修其禮物。作賓于王家、與國咸休、永世無窮(爲時

④不顯大業 「丕顯」は、大いに明らかにする。『尚書』太甲上に「伊尹乃言曰『先王昧爽丕顯、坐以待旦(爽、顯、皆明也。言先王昧明、思大明其德、坐以待旦而行之)』」

王賓客、與時皆美、長世無竟。』

(佐竹保子)

晉四箱歌十六篇 成公綏造 晉の四箱歌十六篇 成公綏造る

上壽酒 樂未央 ④ 壽酒を 上り 樂は未だ央きず

大晉應天慶 皇帝永無疆 大晉 天慶に應じ 皇帝 永えに無疆ならん

右詩一章 王公上壽酒所用 右詩一章 王公の壽酒を上るに用うる所なり

晉の四箱歌 十六篇 成公綏の作

長寿を言祝ぐ酒を献上し、樂しみは尽きることがない。

大いなる晋は天の幸いを受け、皇帝はとこしえに長寿を保たれん。

右の詩一章は王公が長寿を言祝ぐ酒をささげる時に奏せられるもの。

○押韻 「央・疆」は下平10「陽」。

①晋四箱歌 「四箱」は東西南北四方のオーケストラボックス。

「晋四箱樂歌三首 傅玄造」(『宋書』樂志二詁注稿(三))一

○○頁)と既出。

成公綏が晋四箱歌を作った経過については、『宋書』樂志一

に「晋武泰始五年(二六九)、尚書奏使太僕傅玄・中書監荀

勗・黃門侍郎張華各造正旦行禮及王公上壽酒食舉樂哥詩。

詔又使中郎成公綏亦作。張華表曰『按魏上壽食舉詩及漢氏

所施用、其文句長短不齊、未皆合古。蓋以依詠弦節、本有因

循、而識樂知音、足以制聲、度曲法用、率非凡近所能改。二

代三京、襲而不變、雖詩章詞異、興廢隨時、至其韻逗曲折、

皆繫於舊、有由然也。是以一皆因就、不敢有所改易。』荀勗

則曰『魏氏哥詩、或二言、或三言、或四言、或五言、與古詩

不類。』以問司律中郎將陳頌、頌曰『被之金石、未必皆當。』

故勗造晉哥、皆爲四言、唯王公上壽酒一篇爲三言五言、此則

華・勗所明異旨也。……太元(三七六―三九六)中、破苻堅、

又獲樂工楊蜀等、閑練舊樂、於是四箱金石始備焉。」

②成公綏 二三一―二七三。字は子安、東郡(河南省)の人。

張華の推輓で太常となり、のち中書郎となる。また前注①

を参照。『晋書』文苑伝に「成公綏字子安、東郡白馬人也。

幼而聰敏、博涉經傳。性寡欲、不營資產、家貧歲飢、常晏如

也。少有俊才、詞賦甚麗、閑默自守、不求聞達。……張華雅

重綏、每見其文、歎伏以爲絕倫、薦之太常、徵爲博士。歷祕

書郎、轉丞、遷中書郎。每與華受詔並爲詩賦、又與賈充等參

定律律。泰始九年卒、年四十三、所著詩賦雜筆十餘卷行於

世。」

③上壽酒 酒を奉じて天子の長寿を祝う。「右於赫一章、八句。

上壽酒歌」(『宋書』樂志二詁注稿(三))一〇四頁)と既出。

④樂未央 樂しみが永遠に続く。漢代の吉祥語。劉楨「公讌

詩」(『文選』卷二〇)に「永日行遊戲、懽樂猶未央。」

考無疆、受天之慶(黃、黃髮也。考、凍梨也。皆壽徵也。疆、

⑤應天慶 上天の福を受ける。「儀礼」士冠礼に「三加曰、以

竟。」班固「東都賦」白雉詩に「彰皇德兮侔周成、永延長兮

歲之正、以月之令、咸加爾服(正猶善也。咸、皆也。皆加女

膺天慶。」

之三服、謂緇布冠・皮弁・爵弁也)。兄弟具在、以成厥德。黃

穆穆天子 光臨萬國②

穆穆たる天子 萬國に光臨す

多士盈朝 莫匪俊德①

多士朝に盈ち 俊德に匪ざる莫し

流化罔極 王猷允塞⑤

流化 極罔く 王猷 允に塞つ

嘉會置酒 嘉賓允庭⑦⑧

嘉會 置酒し 嘉賓 庭に充つ

羽旄耀辰極 鐘鼓振泰清⑨

羽旄 辰極に耀き 鐘鼓 泰清に振るう

百辟朝三朝 彘彘明儀形⑪⑫

百辟 三朝に朝し 彘彘として儀形を明らかにす

濟濟鏘鏘 金振玉聲⑬⑭

濟濟鏘鏘たり 金振 玉聲

うやうやしい天子は、よろずの国をお治めになる。

りっぱな士が朝廷に満ち、すぐれた徳の人でないものはない。

教化を広げることが窮まりなく、王のはかりごとはまことに世界に充ちている。

よきうたげに酒をしつらえ、よきまろうどが宮廷に充ちる。

文舞の飾りは北極星まで輝き、鐘鼓の音は天空にもとどろく。

大臣・高官は元朝に朝見し、うるわしく規範にかなっている。

大夫・士はりっぱに居並び、シャンシャンと響いて、鐘の音と玉の音で演奏が始まる。

○押韻 「國・徳・塞」は入声25「徳」。「庭・形」は下平15「青」、「清・聲」は下平14「清」。

①穆穆天子 「穆穆」はつつしむさま。天子の所作の形容。傳

玄「祠廟饗神歌」(『宋書』樂志二詠注稿(二)一〇二頁)

に「肅肅在位、有來雍雍。穆穆天子、相維辟公」と既出。『毛

詩』周頌・離に「有來離離、至止肅肅。相維辟公。天子穆穆。」

②光臨萬國 「光臨」はひろく治める。張華「大豫舞歌詩」に

「繼明昭世、光撫九圍」(本詠注稿一〇六頁注⑦参照)。また

天子を敬う意を含む。曹植「七啓」に「吾子整身倦世、探隱

拯沈、不遠遐路、幸見光臨。」「周易』乾卦の彖伝に「乾道變

化、各正性命、保合大和。乃利貞。首出庶物、萬國咸寧。」

③多士盈朝 『毛詩』大雅・文王に「濟濟多士、文王以寧。穆

穆文王、於緝熙敬止。」張華「食拳東西箱歌樂詩」其九(本詠

注稿七一頁参照)に「聲教洋溢、惠滂流。惠滂流、移風俗。

多士盈朝、賢俊比屋。」

④莫匪俊徳 『毛詩』周頌・思文に「思文后稷、克配彼天。立

我烝民、莫匪爾極。」

「俊徳」は徳にすぐれた人。『尚書』堯典に「允恭克讓、光被

四表、格于上下。克明俊徳、以親九族。」

⑤流化罔極 「流化」は教化を流す。『漢書』王吉伝に載せる

王吉の上疏に「臣聞、聖王宣徳流化、必自近始。朝廷不備、

難以言治。」「史記』太史公自序に「漢興以來、至明天子、獲

符瑞、封禪、改正朔、易服色、受命、於穆清、澤流罔極、海

外殊俗、重譯款塞、請來獻見者、不可勝道。」

⑥王猷允塞 荀勗「食拳樂東西箱歌」嘉會(『宋書』樂志二詠

注稿(三)一六三頁)に「愔愔嘉會、有聞無聲。……愔樂飲

酒、酣而不盈。率土歡豫、邦國以寧。王猷允塞、萬載無傾」

と既出。『毛詩』大雅・常武に「王猶允塞、徐方既來。」

⑦嘉會 すばらしい者が集った宴。前注⑥の用例を参照。『周

易』乾卦の文言伝に「亨者、嘉之會也。……嘉會足以合禮。」

⑧嘉賓 この上ない賓客。『毛詩』小雅・鹿鳴に「呦呦鹿鳴、食野之苹。我有嘉賓、鼓瑟吹笙。」

⑨羽旄燿辰極 「羽旄」は雉の羽と牛の尾。文舞で手にするもの。『礼記』樂記に「變成方、謂之音。比音而樂之、及干戚羽旄、謂之樂。干、盾也。戚、斧也。武舞所執也。羽、翟羽也。旄、旄牛尾也。文舞所執」。……然後發以聲音、而文以琴瑟、動以干戚、飾以羽旄、從以簫管。奮至德之光、動四氣之和、以著萬物之理（奮猶動也。動至德之光、謂降天神出地祇、假祖考。著猶成也）。」

「辰極」は北極星。嵇康「琴賦」に「披重壤以誕載兮、參辰極而高躡。」「晋書」天文志上に「故辰極常居其所、而北斗不與衆星西沒也。」「晋書」樂志上は本句を「羽旄燿辰極」に作る。

⑩泰清 大空。「太清」とも表記する。『楚辭』九歎・遠遊に「譬若王僑之乘雲兮、載赤霄而凌太清（言己志意高大、上切於天、譬若仙人王僑乘浮雲載赤霄、上凌太清、遊天庭也）。」曹植「又贈丁儀王粲詩」に「員闕出浮雲、承露暨泰清。」「鸚冠子」度万に「唯聖人能正其音調其聲、故其德上反太清、下及泰寧、

中及萬靈。」

⑪百辟朝三朝 「百辟」はもと諸侯をいい、のちに卿大夫をいう。『毛詩』大雅・假樂に「百辟卿士、媚于天子（箋云、百辟畿内諸侯也。卿士、卿之有事也）。」同・周頌・烈文に「無競維人、四方其訓之。不顯維德、百辟其刑之。於乎前王不忘（競、彊。訓、道也。前王、武王也。箋云、無疆乎、維得賢人也。得賢人則國家彊矣、故天下諸侯順其所爲也。不勤明其德乎、勤明之也。故卿大夫法其所爲也。於乎、先王文王武王、其於此道、人稱頌之、不忘）。」

『漢書』孔光伝に「光對曰『……歲之朝曰三朝、其應至重。乃正月辛丑朔日有蝕之、變見三朝之會』」、師古注に「歲之朝、月之朝、日之朝、故曰三朝。」

⑫彘明儀形 「彘」はうるわしく盛んなさま。『毛詩』小雅・信南山に「疆場翼翼、黍稷彘彘（場、畔也。翼翼、讓畔也。彘、茂盛貌）。」「儀形」は規範にしたがう。「儀刑」に通じる。

⑬濟濟鏘鏘 「濟濟」は大夫が、「鏘鏘」は士が、それぞれ威儀さかんなさま。「鏘鏘」は「踴踴」に通じる。また「鏘鏘」は

馬車の手綱に附けた鈴が鳴るさまで、次句の金玉の音をみちびく。『毛詩』大雅・丞民に、仲山甫につきしたがう人々のことを「征夫捷捷、每懷靡及。四牡彭彭、八鸞鏘鏘（箋云、彭彭、行貌。鏘鏘、鳴聲。以此車馬命仲山甫使行、言其盛也。）」左思「魏都賦」に「於前則宣明・顯陽、順德・崇禮。重闈洞出、鏘鏘濟濟」、「礼記」曲礼下に「天子穆穆、諸侯皇皇、大夫濟濟、士踰踰、庶人僬僬。」

⑭金振玉聲 中華書局標点本は「玉振金聲」に作る。もともと

「金聲」は鐘を鳴らして演奏を始めること、「玉振」は玉器を鳴らして演奏を終えること。金と玉の音は徳をそなえていることの象徴。『孟子』万章下に「孔子之謂集大成。集大成也者、金聲而玉振之也。金聲也者、始條理也。玉振之也者、終條理也。始條理者、智之事也。終條理者、聖之事也。」「漢書」兒寬伝に「唯天子建中和之極、兼總條貫、金聲而玉振之（師古曰、言振揚德音、如金玉之聲也）、以順成天慶、垂萬世之基。」

禮樂具 宴嘉賓<sup>①</sup>

禮樂具わり 嘉賓を宴す

眉壽胙聖皇<sup>②</sup> 景福惟日新<sup>③</sup>

眉壽は聖皇に胙し 景福は惟れ日びに新たなり

羣后戾止<sup>④</sup> 有來雍雍<sup>⑤</sup>

羣后 戾止し 來たる有りて雍雍たり

獻酬納贄<sup>⑥</sup> 崇此禮容<sup>⑦</sup>

獻酬して贄を納れ 此の禮容を崇ぶ

豐肴萬俎<sup>⑧</sup> 旨酒千鐘<sup>⑨</sup>

豐肴萬俎 旨酒千鐘

嘉樂盡樂宴<sup>⑩</sup> 福祿咸攸同<sup>⑪</sup>

嘉樂 盡く宴を樂しみ 福祿 咸な同じくする攸なり

礼と樂がそなわって、よき賓客をうたげでもてなす。

すぐれた天子に長寿が与えられ、大いなる福は日に日に新たになる。

諸侯が至り、客人がおだやかにそろう。

酒を酌み交わして贈り物を納め、この礼にかなった容儀を尊ぶ。

ごちそうが万を数える台に並び、美酒が千もの杯にそろっている。

よき音楽ですべてのものがうたげを楽しみ、福祿をみながともに受ける。

○押韻 「賓・新」は上平17「眞」。「雍・容・鐘」は上平3「鍾」、「同」は上平1「東」。

①宴嘉賓 『晋書』樂志上に「及管初、食舉亦用鹿鳴。至泰始

五年、尚書奏、使太僕傅玄・中書監荀勗・黃門侍郎張華各造

正旦行禮及王公上壽酒・食舉樂歌詩。荀勗云『魏氏行禮・食

舉、再取周詩鹿鳴以爲樂章。又鹿鳴以宴嘉賓、無取於朝、考

之舊聞、未知所應。』勗乃除鹿鳴舊歌、更作行禮詩四篇、先陳

三朝朝宗之義。又爲正旦大會・王公上壽歌詩并食舉樂歌詩、

合十三篇。』

②眉壽昨聖皇 「眉壽」は長寿。『毛詩』小雅・南山有台に「南

山有栲、北山有杻。樂只君子、遐不眉壽。樂只君子、德音是

茂（栲、山栲。杻、櫛也。眉壽、秀眉也。箋云、遐、遠也。

遠不眉壽者、言其近眉壽也。茂、盛也。』

「昨」は「祚」に通じる。傅玄「晋四箱樂歌三首」天鑑に「天

鑿有管、世祚聖皇。時齊七政、朝此萬方。」「宋書』樂志二記

注稿（三）一〇〇頁參照。

③景福性日新 『毛詩』周頌・潛に「以享以祀、以介景福。」曹

植「鞞舞歌」精微篇に「刑措民無枉、怨女復何爲。聖皇長壽

考、景福常來儀。」

「日新」は張華「雅樂正旦大會行禮詩」其四に「容民厚下、

育物流仁。躋我王道、暉光日新」と既出。本訳注稿九三頁參

照。『周易』大畜に「豕曰、大畜、剛健篤實、輝光日新。」

④羣后戾止 「群后」は諸侯。『宋書』樂志一に「正旦大會、太

尉奉璧、羣后行禮、東箱雅樂郎作者是也。今謂之行禮曲。」

「戾止」はいたる。「止」は句末の助字。『毛詩』周頌・有瞽

に「嗶嗶厥聲、肅雝和鳴。先祖是聽、我客戾止、永觀厥成（箋

云、我客、二王之後也。長多其成功、謂深感於和樂、遂入善道、終無愆過。』傳玄「晋宗廟歌十一篇」祠征西將軍登歌（『宋書』樂志二詁注稿（二）八三頁）の「經始宗廟、神明反止。申錫無疆、祇承享祀」では「来たり至る」と訓んでいる。

- ⑤有來雍雍 「雍雍」はおだやかなさま。傳玄「晋宗廟歌十一篇」祠廟饗神歌に「肅肅在位、有來雍雍。穆穆天子、相惟辟公。』『宋書』樂志二詁注稿（二）一〇一頁参照。『毛詩』周頌・離に「有來離離、至止肅肅。相維辟公、天子穆穆（箋云、離離、和也。肅肅、敬也。有是來時、離離然既至止而肅肅然者、乃助王禘祭、百辟與諸侯也。天子是時則穆穆然、於進大牡之牲、百辟與諸侯、又助我陳祭祀之饌、言得天下之歡心。）」
- ⑥獻酬納贄 「獻酬」は主人と賓客が杯を酌み交わす。『毛詩』小雅・楚茨に「爲豆孔庶、爲賓爲客。獻酬交錯、禮儀卒度（東西爲交、邪行爲錯。度、法度也。箋云、始主人酌賓爲獻、賓既酌主人、主人又自飲、酌賓曰釀。至旅而爵交錯以徧。）」
- 「贄」は君主や年長者に初めて会う時に贈る礼物。『楚辭』九思・守志に「謁玄黃兮納贄、崇忠貞兮彌堅（玄黃、中央之帝也。）」

⑦崇此禮容 曹植「文帝誄」に「緋冕宗麗、衡紘維新、尊肅禮容、矚之若神。』

⑧豐肴 たくさんの料理。左思「魏都賦」に「豐肴衍衍、行庖皤皤。』

⑨旨酒千鐘 「旨酒」はよい酒。『礼記』投壺に「主人請曰「某有枉矢・哨壺。請以樂賓。」賓曰「子有旨酒・嘉肴。某既賜矣。又重以樂、敢辭。』

「千鐘」は千杯の酒。「鐘」は「鍾」に通じる。『孔叢子』儒服に「平原君與子高飲、強子高酒曰「昔有遺諺、堯舜千鍾、孔子百觚。』

⑩嘉樂盡樂宴 「嘉樂」は金石の樂器。傳玄「晋郊祀歌」祠天地五郊迎送神歌に「光天之命、上帝是皇。嘉樂殷薦、靈祚景祥。』『宋書』樂志二詁注稿（一）八三頁注⑦参照。

「樂宴」は酒宴を楽しむ。『論語』季氏に「益者三樂、損者三樂。樂節禮樂、樂道人之善、樂多賢友、益矣。樂驕樂、樂佚遊、樂宴樂、損矣。』

⑪福祿咸攸同 『毛詩』小雅・采芣に「樂只君子、天子命之。樂只君子、福祿申之（申、重也。箋云、只之言、是也。古者

天子賜諸侯也、以禮樂樂之、乃後命予之也。天子賜之神則以福祿申重之、所謂人謀鬼謀也。……樂只君子、萬福攸同。

平平左右、亦是率從。」「左伝」襄公十一年に「詩曰、樂只君子、殿天子之邦。樂只君子、福祿攸同。便蕃左右、亦是帥從。」

樂哉 天下安寧<sup>①</sup>

樂しき哉 天下安寧なり

道化行 風俗清<sup>②</sup>

道化行われ 風俗清し

簫韶作 詠九成<sup>④</sup>

簫韶作り 詠九たび成る

年豐穰 世泰平<sup>⑤</sup>

年は豊穰にして 世は泰平なり

至治哉 樂無窮<sup>⑥</sup>

至治なる哉 樂しきこと無窮

元首聰明 股肱忠<sup>⑦</sup>

元首は聰明にして 股肱は忠なり

澍豐澤 揚清風<sup>⑧⑨</sup>

豊澤を澍ぎ 清風を揚ぐ

楽しいことよ、天下が安らかに治まり、

道の教化がゆきわたり、習俗は清らか。

簫での韶の樂が始まり、祝い歌は九たびなされる。

稔りは豊穰で、世の中は泰平。

この上ない善政であることよ、樂しみはきわまりがない。

元首たる君主は賢明で、股肱たる臣下は忠実。

豊かな恩沢が国中に注がれて、清らかな風が吹きあがる。

○押韻 「寧」は下平15「青」、「清・成」は下平14「清」、「平」は下平12「庚」。「窮・忠・風」は上平1「東」。

①天下安寧 「安寧」は落ち着いていて太平である。『史記』

周本紀に「康王即位、徧告諸侯、宣告以文・武之業以申之、作康誥。故成・康之際、天下安寧、刑錯四十餘年不用。」「莊子」天下に「願天下之安寧、以活民命、人我之養畢足而止。」

②道化行 『毛詩』周南・汝墳の小序に「汝墳、道化行也。文王之化行乎汝墳之國、婦人能閔其君子、猶勉之以正也（言此婦人被文王之化、厚事其君子）。」

③風俗清 『後漢書』陳寔伝の論に「唯陳先生進退之節、必可度也。據於德故物不犯、安於仁故不離羣、行成乎身而道訓天下、故凶邪不能以權奪、王公不能以貴驕、所以聲教廢於上、而風俗清乎下也。」

④簫韶作 詠九成 「簫」は笛の一種、「韶」は舜帝の作った音楽。「九成」は九度繰り返し奏する。簫をまじえて韶を奏し、泰平を言祝ぐ歌を何度も繰りかえずとは、今の統治を舜帝の治世になぞらえていう。『尚書』益稷に「夔曰、……下管鼗鼓、合止柷敔。笙鏞以間、鳥獸賡賡。簫韶九成、鳳皇來儀

（韶、舜樂名。言簫見細器之備。雄曰鳳、雌曰皇、靈鳥也。儀、有容儀。備樂九奏而致鳳皇、則餘鳥獸不待九而率舞。）」

揚雄「解難」（『漢書』揚雄伝下）に「今夫弦者、高張急徽、追趨逐者、則坐者不期而附矣。試爲之施咸池、掄六莖、發簫韶、詠九成、則莫有和也（師古曰、掄、引也。和、應也。）」

⑤年豐穰 世泰平 「年」は穀物の実り。『左伝』桓公六年に、隨王に賢臣の季梁の言ったことば「奉盛以告曰、黎黍豐盛、謂其三時不害、而民和年豐也」を載せる。『漢書』食貨志上に「宣帝即位、用吏多選賢良、百姓安土、歲數豐穰。」二句はあるいは年々豊作、代々泰平の意か。

⑥至治 最上の統治。『尚書』君陳に「成」王若曰、……懋昭周公之訓、惟民其乂。我聞曰、至治馨香、感于神明。黍稷非馨、明德惟馨（所聞之古聖賢之言、政治之至者、芬芳馨氣、動於神明、所謂芬芳非黍稷之氣、乃明德之馨、勵之以德。）」

⑦元首聰明 股肱忠 『尚書』益稷に「乃賡載歌曰、元首明哉。股肱良哉。庶事康哉（賡、續。載、成也。帝歌歸美、股肱義

未足、故續歌先君後臣、衆事乃安、以成其義。」

⑧澗豐澤 「澗」は注いでうるおす。「豐澤」は多くのめぐみ。

⑨揚清風 「毛詩」大雅・烝民に「四牡騤騤、八鸞喈喈。仲山

甫徂齊、式邁其歸。吉甫作誦、穆如清風（騤騤、猶彭彭也。

喈喈、猶鏘鏘也。邁、疾也。言周之望仲山甫也。箋云、望之

故欲其用是疾歸。毛傳、清微之風、化養萬物者也。箋云、穆、和也。吉甫作此工歌之誦、其調和人之性、如清風之養萬物。」張華「食舉東西箱樂詩」其八（本訳注稿六九頁参照）に「清風暢八極、流澤被無垠。」

嘉瑞<sup>①</sup>出 靈應<sup>②</sup>彰

麒麟見<sup>③</sup> 鳳皇翔<sup>④</sup>

醴泉涌<sup>⑤</sup> 流中唐<sup>⑥</sup>

嘉禾生<sup>⑦</sup> 穗盈箱<sup>⑦</sup>

降繁祉<sup>⑧</sup> 胙聖皇<sup>⑧</sup>

承天位<sup>⑨</sup> 統萬國<sup>⑨</sup>

受命應期<sup>⑩</sup> 授聖德<sup>⑩</sup>

四世重光<sup>⑪</sup>

宣開洪業<sup>⑫</sup> 景克昌<sup>⑫</sup>

文欽明<sup>⑬</sup> 德彌彰<sup>⑬</sup>

肇啓晉邦<sup>⑭</sup> 流胙無疆<sup>⑭</sup>

嘉瑞 出で 靈應 彰らかなり

麒麟 見われ 鳳皇 翔く

醴泉 涌き 中唐に流る

嘉禾 生じ 穂箱に盈つ

繁祉を降し 聖皇に胙す

天位を承け 萬國を統ぶ

命を受けて期に應じ 聖徳に授く

四世 光を重ね

宣は洪業を開き 景は克く昌んにし

文は欽明にして 徳彌いよ彰らかなり

肇めて晉邦を啓き 胙を流すこと無疆なり

瑞祥があらわれて、くすしきしるしが明らかになる。

麒麟が姿を見せ、鳳凰が空を翔る。

甘き泉が湧き出て、中庭に流れる。

めでたい穀物が生じ、穂が車の荷台いっぱいになり満ちるほど。

おびただしい幸いが降り、聖なる君主に帝位が命じられた。

天子の位を受けて、よろずの国を統轄する。

天の命を受けて期運のめぐり合わせに応じ、聖なる徳のある身に授けられた。

四代にわたって輝かしさを重ね、

宣帝は大いなる帝業を始め、景帝はよく盛んにして、

文帝はつつしんで聡明、徳はいやましにかがやく。

晋の国を創建して、幸いを後々まで限りなく伝える。

○押韻 「彰・翔・箱」は下平10「陽」、「唐・皇」は下平11「唐」。「國・徳」は入声25「徳」。「光」は下平11「唐」、「昌・彰・疆」は下平10「陽」。

①嘉瑞 めでたいしるし。『漢書』宣帝紀の元康元年の詔に「承

天順地、調序四時、獲蒙嘉瑞、賜茲祉福。」

②靈應 不思議な感心。

③麒麟見 「麒麟」は想像上の動物で、瑞獣の一。『管子』封禪

に「今鳳凰麒麟不來、嘉穀不生而蓬蒿藜莠茂、鳴鳧數至、而

欲封禪、母乃不可乎。於是桓公乃止。」「三国志」呉書・呉主

伝に「赤烏元年春、鑄當千大錢。夏、呂岱討廬陵賊、畢、還

陸口。秋八月、武昌言麒麟見。有司奏言麒麟者太平之應、宜

改年號。」

④鳳皇翔 「鳳皇」は鳳凰、想像上の鳥で百鳥の王。瑞鳥の一。

『史記』賈生伝の賈誼「弔屈原文」に「鳳皇翔于千仞之上兮、覽惠輝而下之。」

⑤醴泉涌 甘い水が湧いて出る。『礼記』礼運に「故天不愛其

道、地不愛其寶、人不愛其情、故天降膏露、地出醴泉、山出器車、河出馬圖、鳳皇麒麟、皆在郊極。」『後漢書』光武帝紀

下の中元元年（五六）に「是夏、京師醴泉涌出（『尚書中候』曰「俊乂在官、則醴泉出」也）、飲之者固疾皆愈、惟眇・瘖者不瘳。」

⑥中唐 中庭。『毛詩』陳風・防有鵲巢に「中唐有甃、邛有旨鵲。誰侑予美、心焉惕惕（中、中庭也。唐、堂塗也。甃、瓠甌也。鵲、綬草也。惕惕、猶切切也）。」

⑦嘉禾生 穗盈箱 「嘉禾」は多くの穂のついた稲、瑞祥の一。

『尚書』微子之命に「唐叔得禾、異畝同穎、獻諸天子。王命唐叔、歸周公于東、作歸禾。周公既得命禾、旅天子之命、作嘉禾（唐叔、成王母弟、食邑内得異禾也。……禾各生一壟而合爲一穗。異畝同穎、天下和同之象、周公之德所致）。」『後漢

書』光武帝紀下の論に「建平元年……是歲縣界有嘉禾生、一

莖九穗、因名光武曰秀。「箱」は車の荷物を載せる部分。『毛

詩』小雅・甫田に「乃求千斯倉、乃求萬斯箱。」曹植「魏德論謳」（『芸文類聚』卷八五）に「猗猗嘉禾、惟穀之精。其洪盈箱、協穗殊莖。昔生周朝、今植魏庭。獻之廟堂、以昭祖靈。」

『晋起居注』（『芸文類聚』卷八五）に「武帝世、嘉禾三生、元帝世、嘉禾三生、其莖七穗。」

⑧降繁祉 胙聖皇 「胙」は「祚」に通じる。本詩其二に既出。

また『宋書』樂志二の傅玄「天郊饗神歌」（『宋書』樂志二詠注稿（一）九六頁）に「神說饗、歆禮祀。祐大晉、降繁祉。

祚京邑、行四海。保天年、窮地紀。」

⑨承天位 張華「食拳東西箱樂詩」其一〇（本詠注稿七七頁）に「建皇極、統天位。運陰陽、御六氣」と既出。

⑩受命應期 張華「雅樂正旦大会行禮詩」其三（本詠注稿九〇

頁）に「允文烈考、潛哲應期」と既出。『三国志』魏書・賈詡伝に「（文）帝問詡曰「吾欲伐不從命以一天下、吳、蜀何先。」對曰「攻取者先兵權、建本者尚德化。陛下應期受禪、撫臨率土、若綏之以文德而俟其變、則平之不難矣。」」

⑪授聖德 徳ある聖人に授ける。

⑫四世重光 「四世」は宣帝以前の四人の祖先(征西將軍司馬

鈞・豫章太守司馬量・潁川太守司馬儁・京兆尹司馬防)を指す。「重光」は先祖が代々すぐれた徳を継ぐことをいう。傳

玄「天地郊明堂降神歌」(『宋書』樂志二詠注稿(一))九三頁)に「二帝邁徳、宣茲重光」と既出。袁宏『後漢紀』獻帝

紀四、建安三年九月に「(袁)術與楊彪婚親也、操忌彪忠正、收彪付獄、將殺之。孔融聞之、不及朝服、往見操曰『楊彪曩

世清徳、四葉重光。』」

⑬開洪業 『漢書』武帝紀の元光元年の詔に「何行而可以章先

帝之洪業休徳(師古曰、章、明也。洪、大也。休、美也)。」  
⑭克昌 傳玄「饗天地五郊歌」(『宋書』樂志二詠注稿(一))

八八頁)に「克昌厥後、永言保之」と既出。なお『毛詩』周頌・雝では、子孫を盛んにする意で用いられる。

⑮欽明 つつしみ深く、世のことからに明らかである。『尚書』堯典に「曰、若稽古帝堯。曰、放勳、欽明文思、安安(勳、功。欽、敬也。言堯放上世之功化、而以敬明文思之四徳、安

天下之當安者。……欽明文思、馬云、威儀表備謂之欽、照臨

四方謂之明、經緯天地謂之文、道徳純備謂之思)。」  
⑯肇啓晉邦 張華「正旦大会行札詩」其三(本詠注稿九〇頁)

に「肇啓晉宇、遂登皇基」と既出。

⑰流胙 『後漢書』黃瓊伝に「昔高皇帝應天順民、奮劍而王、

掃除秦・項、革命創制、降徳流祚。至於哀・平、而帝道不綱、  
秕政日亂、遂使姦佞擅朝、外戚專恣。」

(釜谷武志)

泰始建元<sup>①</sup> 鳳皇龍興<sup>②</sup>

龍興伊何<sup>③</sup> 享胙萬乘<sup>④</sup>

奄有八荒<sup>⑤</sup> 化育黎蒸<sup>⑥</sup>

圖書煥炳<sup>⑦</sup> 金石有徵<sup>⑧</sup>

泰始 元を建て 鳳皇 龍のごとく興る

龍のごとく興るとは伊れ何ぞ 胙を享けて萬乗たるなり

八荒を奄有し 黎蒸を化育す

圖書は煥炳として 金石には徴有り

徳光大<sup>⑧</sup> 道熙隆<sup>⑨</sup>

徳は光大にして 道は熙隆し

被四表<sup>⑩</sup> 格皇穹<sup>⑪</sup>

四表を被いて 皇穹に格<sup>いた</sup>る

奕奕萬嗣<sup>⑫</sup> 明明顯融<sup>⑬</sup>

奕奕たる萬嗣 明明として顯融たり

高朗令終<sup>⑭</sup>

高朗にして終を令<sup>よ</sup>くし

保茲永祚<sup>⑮</sup> 與天比崇

茲の永祚を保ちて 天と崇を比せん

万物生成の初め、泰始という年号を立てて、鳳凰にも比すべき方が、龍のごとく興った。

龍のごとく興るとはさてどういふことか。天子の位を授かつて、万乗の車を動かす国の主となったのだ。

八方の地の果てまでも広く世界を手中に収め、民衆を教化し養い育てる。

その帝業を称える河図洛書は明々と光り輝き、金石にも瑞祥が現れる。

皇帝の徳は広く輝きわたり、徳治の道は盛大に興隆して、

四方の外にまで行き渡り、大いなる天にまで至る。

万世に続く偉大なる王朝は、明々と輝いてとこしえに続き、

高らかに朗らかにすばらしき成就を遂げられよう。

この永遠なる幸いを保ち、天とその崇高さで肩を並べられよう。

○押韻 「興・蒸・微」は下平16「蒸」、「乘」は去声47「證」。「隆・穹・融・終・崇」は上平1「東」。

①泰始建元 「泰始」は、西晋王朝の初め、武帝(司馬炎)の ときの年号(二六五―二七四)で、万物が生じる初めの状態

を意味する。「周易」繫辭伝上に「乾知大始、坤作成物。」「泰」は「大」と音義ともに通ず。「建元」は、王朝を開いて初めて年号を建てること。類似句が、張華「食季東西箱樂詩十一章」其六（本訳注稿六五頁）に「泰始開元」と。

②鳳皇龍興 「鳳皇」は、伝説上の百鳥の王。傑出した人物の表象。直前の詩（本訳注稿一二〇頁）に見えていた瑞祥「麒麟見、鳳皇翔」の「鳳皇」を受けるか。類似句が、傅玄「上寿酒歌」（『宋書』樂志二訳注稿（三）一〇四頁）に「聖德龍興」と。また、鳳凰と龍とを並置する「龍興鳳舉」が、『論衡』齊世、『後漢書』馮衍伝等に、光武帝を形容する語として見えている。

③享胙萬乘 「享胙」は、天から幸いを下されて帝位を授かる。「胙」は「祚」と音義ともに通ず。「萬乘」は、兵車一万台を發動できる国。そこから敷衍して天子をいう。『孟子』梁恵王上に「萬乘之國、弑其君者、必千乘之家」、趙岐注に「萬乘、兵車萬乘、謂天子也。」

④奄有八荒 「奄有」は、広く覆うようにもれなく手中に収める。『尚書』大禹謨に「皇天眷命、奄有四海、爲天下君。」「毛

詩」商頌・玄鳥に「古帝命武湯、正域彼四方、方命厥后、奄有九有。」「八荒」は、八方の果て。全世界をいう。張華「食季東西箱樂詩十一章」其二（本訳注稿五二頁）に既出。類似句が、傅玄「天地郊明堂降神歌」（『文選』注稿（一）九三頁）に「我皇文命、奄有萬方」と。

⑤化育黎蒸 「化育」は、教化し育成する。『礼記』中庸に「能盡物之性、則可以贊天地之化育、可以贊天地之化育、則可以與天地參矣。」「黎蒸」は、民衆。司馬相如「封禪文」（『文選』卷四八）に「正陽顯見、覺悟黎蒸。」

⑥圖書煥炳 「圖書」は、河図洛書の略語。瑞祥として黄河や洛水から現れる。『周易』繫辭伝上に「河出圖、洛出書、聖人則之。」「煥炳」は、明々と光り輝くさま。前掲注⑤の司馬相如「封禪文」に「宛宛黃龍、興德而升。采色炫燿、煥炳輝煌。」  
⑦金石有徵 金属や石に、瑞祥が刻まれて現れる。たとえば、魏の明帝の青龍三年（二三五）、張掖郡刪丹県金山の川から現れた、司馬晋の台頭を予言する石（『三國志』魏書・明帝紀・裴松之注に引く『魏氏春秋』）などがこれに当たる。

⑧德光大 皇帝の徳が広く輝きわたる。『周易』坤卦の象伝に

「坤厚載物、徳合无疆。含弘光大、品物咸亨。」

⑨道熙隆 徳の道が盛大に興る。「熙隆」の語は、泰始元年（二

六五）冬十二月十七日、武帝司馬炎が魏から受禪したことを

上帝に告類する文章に「昔者唐堯、熙隆大道、禪位虞舜、舜

又以禪禹、邁徳垂訓、多歴年載」（『晋書』武帝紀）、東哲「玄

居釈」（『晋書』東哲伝）に「今大晉熙隆、六合寧靜」とある。

⑩被四表 「四表」は、四方の外。敷衍して天下をいう。「尚

書」堯典に「允恭克讓、光被四表、格于上下（光、充。格、

至也）。」

⑪格皇穹 「皇穹」は、大いなる天。「格」については前掲注⑩

の「尚書」堯典の偽孔伝を参照。

⑫奕奕萬嗣 「奕奕」は、盛大なさま。「広雅」釈訓に「奕奕

……、盛也。」「毛詩」小雅・巧言に「奕奕寢廟（奕奕、大貌）。」

「萬嗣」は、万世に続く王朝の未来をいう。たとえば、班固

「典引」（『文選』卷四八）に「將紆萬嗣、揚洪輝、奮景炎。」

⑬明明顯融 「顯融」は、輝かしく長く続くこと。『国語』周語

下に「度於天地而順於時動、和於民神而儀於物則、故高朗令

終、顯融昭明」、韋昭注に「融、長也。」類似句が、傅玄「明

堂饗神歌」（『詠注稿（一）』一〇四頁）に「明德顯融」と。

⑭高朗令終 同一句が、『毛詩』大雅・既醉に「昭明有融、高朗

令終」と。毛伝に「朗、明也」、鄭箋に「令、善也。」前掲注

⑬の『国語』周語下の記述はこれに基づく。「終」は、成就を

いう。前掲『国語』韋昭注に「終、成也。」

⑮保兹永昨 「永昨」は、永遠に続くさいわい。一句は、前掲

注⑭の「毛詩」大雅・既醉に「君子萬年、永錫祚胤」を

念頭に置くか。「昨」は、「祚」に同じ。

聖皇君四海 順人應天期

三葉合重光 泰始開洪基

明耀參日月 功化侔四時

宇宙清且泰 黎庶咸離熙

聖皇 四海に君たり 人に順したがい天期に應こたはず

三葉 重光を合して 泰始 洪基を開く

明耀 日月に參じ 功化 四時に侔ひとし

宇宙は清く且つ泰く 黎庶は咸みな離熙す

聖なる皇帝が四海に君臨した。人々の声に従い、天が定めた時期に応じたのだ。

三代の君主が相次いで輝かせた徳を重ね合わせて、万物生成の初め、泰始の時に、大いなる基礎が開かれた。

その明るく輝くことでは日月と肩を並べ、万物を感化することでは四時に等しい働きを為す。

全世界が澄みわたって安定し、民たちはみな和らいで伸びやかな様子だ。

素晴らしきかな、和らいで伸びやかな民たちの暮らしは。

○押韻 「期・基・時・熙・熙」は上平7「之」。

①聖皇君四海 「聖皇」は皇帝の尊称。一句は、『尚書』大禹謨にいう「皇天眷命、奄有四海、爲天下君」を意識するか。

②順人應天期 『周易』革卦の彖伝に「湯武革命、順乎天而應

乎人」、班彪「王命論」(『文選』卷五二)に「雖其遭遇異時、

禪代不同、至于應天順人、其揆一焉」とあるのを踏まえる。

「應天期」は、天が運命として定めた時期に応じる。本訳注

稿二二二頁の注⑩「受命應期」を参照。一句に類似する表現

として、荀勗「食拳樂東西箱歌十二篇」の「時豈」(『訳注稿

(三)』一五八頁)に「應乾順民」と。

③三葉台重光 「三葉」は、三代。宣帝司馬懿、その子の景帝

司馬師及び文帝司馬昭の三祖の時代をいう。「重光」は、本

訳注稿一二三頁の注⑫「四世重光」を参照。

④泰始開洪基 「泰始」は、前詩に既出。「洪基」は大いなる基

礎。多くは世襲の帝業についていう。

⑤明燿參日月 「參日月」は、日月と肩を並べて三つになる。

『周易』乾卦の文言伝に「夫大人者、與天地合其徳、與日月合

其明、與四時合其序、與鬼神合其吉凶。」傳玄「晋鼓吹歌曲二

十二篇」の「金靈運」(『宋書』樂志四)にも、「聖徵見、參日

月」と。

⑥功化侔四時 「功化」は、皇帝としての功業と民たちへの教化。「侔四時」については、前掲注⑤の『周易』乾卦文言伝を

参照。類似句が、張華「雅樂正旦大会行礼詩四章」其三（本

訳注稿九〇頁）に「參德天地、比功四時」と。

⑦宇宙 全世界をいう。『淮南子』原道訓に「絃宇宙而章三光」、

於饒術、上下共其雍熙」を踏まえる。

高誘注に「四方上下曰宇、古往今來曰宙、以喻天地。」

⑧黎庶咸離熙 「黎庶」は、人民大衆。「黎民」に同じ。「離熙」

は、和らぎ、伸び伸びとすること。「離」は、「雍」に同じ。

一句は、『尚書』堯典にいう「黎民於變時雍」「允釐百工、庶

績咸熙」、及び張衡「東京賦」（『文選』卷三）にいう「百姓同

惟天降命 翼仁祐聖<sup>②</sup>

惟れ天は命を降し 仁を翼け聖を祐けしむ

於穆三皇 載德彌盛<sup>④</sup>

於穆たる三皇 徳を載ねて 彌盛んなり

總齊璿璣 光統七政<sup>⑤</sup>

總て璿璣を齊え 光く七政を統ぶ

百揆時序 化若神聖<sup>⑦</sup>

百揆 時に序べ 化すること神聖の若し

四海同風 興至仁<sup>⑧</sup>

四海 風を同じくし 至仁に興る

濟民育物 擬陶鈞<sup>⑩</sup>

民を濟い物を育つること 陶鈞に擬す

擬陶鈞 垂惠潤

陶鈞に擬して 惠潤を垂る

皇皇羣賢 峨峨英雋<sup>⑩</sup>

皇皇たる羣賢 峨峨たる英雋

德化宣 芬芳播來胤<sup>⑩</sup>

德化 宣べられ 芬芳 來胤に播かる

さて、天が命を降されて、魏の皇帝たちを補佐することとなった、

ああ素晴らしき三人の先代たちは、徳を積んでいよいよ隆盛を極めてゆかれた。

玉づくりの天体観測器を手中に収めて操り、広く日月五星の運行を把握して地上の政を整える手がかりとした。

諸々の職を統べる者（三人の先代たち）は順序正しくことを運び、教化は神聖なる皇帝のごとくに行われた。

感化された四海はその気風を同じくし、最大級の仁徳に民たちは奮い立つ。

民たちを困難から救い、生ける者たちを育み養うことは、陶器を作り成すろくろに似ている。

陶器を作り成すろくろのように、天下に恵みの潤いをしたたらせるのだ。

壮麗なる立ち居振る舞いの賢者たち、勢い盛んな様子の英俊たち。

徳による教化は世に広められ、香り立つ崇高な徳は未来の子孫に播き広げられる。

○押韻 「命」は去声43「映」、「聖・盛・政・聖」は去声45「勁」。「仁」は上平17「眞」、「鈞」は上平18「諄」。「潤・備」は去

声22「稔」、「胤」は去声21「震」。なお、「眞」「諄」及び「稔」「震」は、すべて眞部に属する。

①惟天降命 同一句が、『尚書』酒誥に「惟天降命、肇我民、惟

元祀」と。

③於穆三皇 「於」は、感嘆詞。「穆」は、讚美の形容詞。「毛

②翼仁祐聖 「仁」「聖」はともに皇帝を形容する常套語。た

とえば、『礼記』経解に「天子者……其在朝廷、則道仁聖禮義

之序。」ここでは、魏朝の三人の少帝、曹芳・曹髦・曹奂を指

す。「翼」「祐」はともに輔政の意。ここでは、司馬懿、司馬

師、司馬昭の三人が、前掲の魏朝の少帝たちを補佐したこと

④載徳 徳を積む。『国語』周語上に、先王の事績について「奕

也。」

⑤總齊璿璣・光統七政 「璿璣」は、玉でできた天体観測器。

「七政」は、日・月、及び水・木・金・火・土の五星それぞれ  
の法則性。『尚書』舜典に「正月上日、受終于文祖。在璿璣

玉衡、以齊七政」、偽孔伝に「在、察也。璿、美玉。璣、衡。

王者、正天文之器、可運轉者。七政、日月五星、各異政。舜  
察天文、齊七政、以審己當天心與否。」「總齊」は、統べて整  
える。「光統」も、広く統治することをいうが、「光」は、「七  
政」の縁語でもあるだろう。

⑥百揆時序 「百揆」は、諸々の事業を統括する者。「時序」

は、順序正しくことを行う。『尚書』舜典に「納于百揆、百揆  
時敘」、偽孔伝に「揆、度也。度百事、摠百官。納舜於此官、  
舜舉八凱、使揆度百事。百事時敘、無廢事業。」「序」は「敘」  
に同じ。同一句が、「晋江左宗廟歌十三篇」の曹毗「歌世祖  
武皇帝」〔訳注稿(二)一―一二頁〕に既出。

⑦神聖 皇帝の完全無欠の人格をいう。『尚書』大禹謨に「都

帝德廣運、乃聖乃神、乃武乃文。」傅玄「晋鼓吹歌曲二十二  
篇」の「金靈運」〔『宋書』樂志四〕にも「惟我皇、體神聖」

と。

⑧四海同風 天下が同じ気風のもとに統一されたことをいう。

類似句が、張華「食拳東西箱樂詩十一章」其六(本訳注稿六  
五頁)に「四隩同風」と。

⑨興至仁 「至仁」は、最大級の仁徳。「莊子」天運に、「至仁」  
をめぐる商の太宰蕩と莊子との対話が見える。一句は、「論  
語」泰伯にいう「君子篤於親、則民興於仁」を踏まえる。あ  
るいは、『礼記』大學にいう「一家仁、一國興仁」を念頭に置  
いているなら、この句の主語は、民ではなく王朝となる。

⑩濟民育物 「濟民」は、民衆を困難から救う。『尚書』武成に  
「惟爾有神、尚克相予以濟兆民、無作神羞。」「育物」の語は、  
張華「雅樂正旦大会行礼詩四章」其四(本訳注稿九三頁)に  
既出。

⑪陶鈞 陶器の成形に用いるろくろ。国を治めることを喩え  
る。鄒陽「獄中上書自明」〔『文選』卷三九〕に「聖王制世御  
俗、獨化於陶鈞之上」、張晏注に「陶家名模下圓轉者爲鈞。  
以其能制器爲大小、比之於天也。」張華「食拳東西箱樂詩十  
一章」其八(本訳注稿六九頁)に既出。

⑫ 皇皇羣賢 「皇皇」は、莊重なさま。諸侯の立ち居振る舞い

萬國齊同」と。

を形容する。「礼記」曲礼下に「天子穆穆、諸侯皇皇、大夫濟濟、士跼蹐、庶人僬僬（皆行容止之貌也）」。

④ 芬芳播來胤 「芬芳」は、香りの高いさま。双声語。高い徳

を喻える。たとえば、曹植「娛賓賦」（『曹子建集』卷二）に

⑬ 嘒嘒英雋 「嘒嘒」は、勢い盛んなさま。英俊の所作を形容

「欣公子之高義兮、徳芬芳其若蘭。」

する。「毛詩」大雅・棫樸に「濟濟辟王、左右奉璋。奉璋嘒

「來胤」は、子孫。たとえば、蔡邕「胡公（太傅胡広）碑

嘒、髦士攸宜（嘒嘒、盛壯也。髦、俊也）」。

（『蔡中郎文集』卷四）に「榮祚統業、垂乎來胤。」なお、和刻

⑭ 徳化宣 「徳化」は、徳による教化。これが動詞「宣」と合

本はこの一句を以て一章を区切り、続く「播來胤、垂後昆」

わさると、臣下が天子の「徳化」を広める意となる。たとえ

を次の章に組み入れる。押韻から見ても、妥当と判断される。

ば、「漢書」平帝紀に「太僕王憚等八人使行風俗、宣明徳化、

今、これに従う。

播來胤 垂後昆<sup>①</sup>

來胤に播き 後昆に垂る

清廟何穆穆<sup>②</sup> 皇極關四門<sup>③</sup>

清廟 何ぞ穆穆たる 皇極 四門を關く<sup>ひち</sup>

皇極關四門

皇極 四門を關く

萬機無不綜<sup>④</sup> 媿媿翼翼<sup>⑤</sup>

萬機 綜べざるは無く 媿媿翼翼たり

樂不及荒<sup>⑥</sup> 饑不遑食<sup>⑦</sup>

樂しむも荒には及ばず 饑うるも食するに遑あらず<sup>いとま</sup>

大禮既行 樂無極<sup>⑧</sup>

大禮 既に行われ 樂しみは極まり無し

(先代の徳は) 未来の子孫に敷き広げられ、後の世の子孫に継承される。

清き廟の何と美しいことか、中正なる道を取る天子は四方の門を開け放たれる。

中正なる道を取る天子は四方の門を開け放たれる。

政務上に生起する様々な徴候をすべて掌握され、恭しく努め励んでいらつしやる。

楽しんで荒淫に及ぶことはなく、空腹でも食事に割く時間を惜しまれる。

元旦の典礼はすでに盛大に行われ、宴の楽しみは尽きることがない。

○押韻 「昆・門・門」は上平23「魂」。「翼・食・極」は入声24「職」。

①播來胤・垂後昆 「播來胤」は、前詩の末句を繰り返したも

の。「後昆」は、子孫。「來胤」と同義。『尚書』仲虺之誥に

「王懋昭大徳、建中于民、以義制事、以禮制心、垂裕後昆。」

②清廟何穆穆 「穆穆」は美しいさま。『毛詩』周頌・清廟に

「於穆清廟（於、歎辭也。穆、美）。『尚書』舜典に「賓于四

門、四門穆穆（穆穆、美也。四門、四方之門）。」

③皇極闢四門 「皇極」は、天子が取るべき大きいなる中正の道。

『尚書』洪範に「次五曰建用皇極（皇、大。極、中也。凡立事

當用大中之道）。」「五、皇極、皇建其有極。」敷衍して天子を

も指す。

「四門」は前掲注②を参照。四方の門を開くのは、賢人を招

くためである。『尚書』舜典に「月正元日、舜格于文祖、詢于

四岳、闢四門、明四目、達四聰。」

④萬機 皇帝の様々な政務上に起きる、見逃してはならない

微細な兆候。『尚書』皋陶謨に「無教逸欲有邦、兢兢業業、一

日二日萬幾（兢兢、戒慎。業業、危懼。幾、微也。言當戒懼

萬事之微）。」これを皇帝から臣下に問うことが、張衡「東京

賦」（『文選』卷三）に「天子）乃羨公侯卿士、登自東除、訪

萬機、詢朝政」と見える。

⑥媿媿翼翼 「媿媿」は、努め励むさま。「翼翼」と音義通ず。

『毛詩』大雅・文王に「臺臺文王、令聞不已（臺臺、勉也）。」

「翼翼」は、恭しく慎むさま。『毛詩』大雅・大明に「維此文王、小心翼翼（箋云、小心翼翼、恭慎貌）。」荀勗「食拳樂東西箱歌十二篇」の「時豈」（訳注稿（三）一五八頁）、「翼翼」（同一五二頁）にそれぞれ既出。

⑥ 樂不及荒 『毛詩』唐風・蟋蟀にいう「好樂無荒」を踏まえる。同一句が、『孔叢子』連叢子上に引く孔臧「楊柳賦」に「飲不至醉、樂不及荒」と。

登崑崙<sup>①</sup> 上増城<sup>②</sup>  
乘飛龍<sup>③</sup> 升泰清<sup>④</sup>  
冠日月 佩五星<sup>⑤</sup>  
揚虹蜺 建捰旌<sup>⑥</sup>  
披慶雲 蔭繁榮<sup>⑦</sup>  
覽八極 游天庭<sup>⑧</sup>  
順天地 和陰陽<sup>⑨</sup>  
序四氣 耀三光<sup>⑩</sup>  
張帝網<sup>⑪</sup> 正皇綱<sup>⑫</sup>

崑崙に登り 増城に上る  
飛龍に乗りて 泰清に升る  
日月を冠し 五星を佩ぶ  
虹蜺を揚げ 捰旌を建つ  
慶雲を披き 繁榮を蔭う  
八極を覽て 天庭に遊ぶ  
天地に順い 陰陽に和す  
四氣を序し 三光を耀かす  
帝網を張り 皇綱を正す

⑦ 饑不遑食 『尚書』無逸にいう「自朝至于日中昃、不遑暇食、

用咸和萬民」を踏まえる。同一句が、曹植「応詔詩」（『文選』卷二〇）に「雖有糗糧、飢不遑食」と。「饑」は本来、作物が実らないことをいい、空腹を意味する「飢」とは別の字だが、音が近く、通じて用いられることも少なくない。

⑧ 樂無極 同一の辞句が、『漢鼓吹鐃歌十八曲』の「上之回曲」（『宋書』樂志四）の末尾にも「千秋萬歲樂無極」と。

播仁風<sup>⑬</sup> 流惠康<sup>⑭</sup>

仁風を播<sup>し</sup>き 惠康を流す

邁洪化<sup>⑮</sup> 振靈威

洪化に邁<sup>つと</sup>め 靈威を振るう

懷萬方<sup>⑯</sup> 納九夷<sup>⑰</sup>

萬方を懷<sup>なぐ</sup>かしめ 九夷を納る

朝閩闔<sup>⑱</sup> 宴紫微<sup>⑲</sup>

閩闔に朝<sup>まね</sup>き 紫微に宴す

崑崙山に登り、その一角にある増城に上る。

飛ぶ龍に乗って、天空に駆け上る。

日月を頭上に戴き、五星を身に帯びて、

虹を高くかかげ、彗星の旗を立てる。

慶雲を敷き広げ、繁茂する草木を恵みで被いつつ、

世界の果てまでも見て回り、天帝の宮殿に遊ぶ。

天地のあり様に従い、陰陽の推移に和し、

四季の氣候を秩序立てて、日月星辰を輝かす。

寛大な統治を敷き、天下を治める綱紀を正し、

仁愛あふれる風を吹きわたらせ、民への恵みを広く行き届かせる。

大いなる教化に励み、靈妙なる威徳を發揮して、

世界のあらゆる地域を手なづけ、様々な異民族を受け入れて、

彼らを閩闔に招き入れ、紫微宮にて宴を催す。

○押韻 「城・清・旌」は下平14「清」、「星・庭」は下平15「青」、「榮」は下平12「庚」。「陽」は下平10「陽」、「光・綱・康」は下平11「唐」。「威・微」は上平8「微」、「夷」は上平6「脂」。

①登崑崙 「崑崙」は、中国のはるか西方にあると考えられていた靈山。同一句が、『楚辭』九歌・河伯、九章・涉江、九歎・遠遊に見える。

②上増城 「増城」は、崑崙山の一角を為す、切り立った九重の城郭のようなところ。『楚辭』天問に「崑崙縣圃、其尻（尻）安在。増城九重、其高幾里」、『淮南子』墜（地）形訓に「掘崑崙虛以下地、中有増城九重、其高萬一千里百一十四步二尺六寸」と。一説に、崑崙山の最高峰をいう。『水経注』河水一に引く『崑崙説』に「崑崙之山三級、……上曰増城、一名天庭、是謂天帝之居。」

③乘飛龍 「飛龍」は、天子の乗り物。『周易』乾卦、九五の爻辭に「飛龍在天、利見大人」、同卦の彖伝に「時乘六龍以御天。」また、神仙界の乗り物でもある。たとえば、『莊子』逍遙遊に「藐姑射之山、有神人居焉。……乘雲氣、御飛龍、而遊乎四海之外。」同一の辭句が、曹植「平陵東」（『樂府詩集』

卷二八）に「閭闔開、天衢通、被我羽衣乘飛龍」と。

④泰清 天空をいう。『鶡冠子』度方に、聖人の徳について「上及太清、下及泰寧、中及萬靈」と。「泰」は「太」に同じ。用例として、成公綏「嘯賦」（『文選』卷一八）にも「飄遊雲於泰清、集長風乎萬里」と。

⑤冠日月・佩五星 「日月」「五星」が、もし前々詩に見える「七政」に当たるならば、それらを「冠」「佩」するとは、広く天下を統括するの意となる。なお、これより以下の數句、類似する発想の表現が、曹植「与陳琳書」（『太平御覽』卷六八四）に「夫披翠雲以爲衣、戴北斗以爲冠、帶虹蜺以爲紳、連日月以爲珮」と見える。

⑥揚虹蜺・建彗旌 「虹蜺」「彗」ともに、地上にある陰陽の精が天上に現れたもの。『漢書』天文志に、「彗孛」「彗孛」などについて「此皆陰陽之精、其本在地、而上發于天者也。政失於此、則變見於彼、猶景之象形、鄉之應聲。是以明君觀之而

寤、飭身正事、思其答謝、則禍除而福至、自然之符也」と。  
「兩句は、天子が善政を敷くことを意味する。」

⑦披慶雲・蔭繁榮 「慶雲」は、恵みをもたらす喜ばしい雲。

『漢書』天文志に「若煙非煙、若雲非雲、郁郁紛紛、蕭索輪  
困、是謂慶雲。慶雲見、喜氣也。」「蔭繁榮」は、雲の恵みで  
草木が盛んに繁榮することをいう。

⑧覽八極・游天庭 「八極」は、世界の果て。『淮南子』原道訓  
に「天道者、覆天載地、廓四方、柝八極」、高誘注に「八極、  
八方之極也。言其遠。」「天庭」は、天帝の宮廷。崑崙山の最  
高峰でもある。前掲注②の『崑崙說』を参照。類似する発想  
として、曹操「氣出倡・駕六龍」（『宋書』樂志三）に「遨游  
八極、乃到崑崙之山、西王母側。」

⑨順天地・和陰陽 発想として、『周易』乾卦の文言伝にいう  
「夫大人者、與天地合其德、與日月合其明、與四時合其序、  
與鬼神合其吉凶」を踏まえるか。

⑩序四氣・耀三光 「四氣」は、四季それぞれの気候。「序」  
は、順序だてる。前掲注⑨の『周易』乾卦文言伝にいう「與  
四時合其序」を意識する。「三光」は、日月星の三つの光。

『淮南子』原道訓に「横四維而含陰陽、絃宇宙而章三光（章、  
明也。三光、日月星）」。

⑪張帝網 皇帝の寛大な統治をいう。『史記』殷本紀に「湯出、  
見野張網四面、祝曰、『自天下四方、皆入吾網。』湯曰、『嘻、  
盡之矣。』乃去其三面、祝曰、『欲左、左。欲右、右。不用命、  
乃入吾網。』」

⑫皇綱 皇帝が天下を治める綱紀。班固「答賁戲」（『文選』卷  
四五）に「方今大漢……廓帝絃、恢皇綱、基隆於義農、規廣  
於黃唐。」

⑬仁風 天子の仁政を風に喩える。たとえば、班固「典引」（『文  
選』卷四八）に「仁風翔乎海表、威靈行乎鬼區、忠貞「晋武  
帝華林園集詩」（『文選』卷二〇）に「玄澤滂流、仁風潛扇。」  
⑭惠康 天子が庶民に安樂をもたらすこと。『尚書』文侯之命  
に「柔遠能邇、惠康小民。」

⑮邁洪化 「邁」は、励行する。『尚書』大禹謨に「臯陶邁種德  
（邁、行。種、布）、これを引く『左伝』莊公八年の杜預注に  
「稱臯陶能勉種德。邁、勉也。」「洪化」は、皇帝による大いな  
る教化。

⑯懷萬方 「懷」は、帰順させる。前掲注⑮に引いた『尚書』

大禹謨の後に「德乃降、黎民懷之（懷、歸也）。「萬方」は天下。『尚書』太甲上に「天監厥德、用集大命、撫綏萬方」、偽

孔伝に「監、視也。天視湯德、集王命於其身、撫安天下。」

⑰納九夷 「九夷」は、様々な異民族。『尚書』旅獒に「惟克

商、遂通道于九夷八蠻」、偽孔伝に「四夷慕化、貢其方賄。九  
八言非一。皆通道路、無遠不服。」

⑱閭闔 天上の門。『楚辭』離騷に「吾令帝閭開關兮、倚閭闔

而望予」、王逸注に「閭闔、天門也。」また、西晋時代、洛陽  
の西門のひとつとして実在した（『晋書』地理志上）。

⑲紫微 天帝の居場所である北極星を囲む星座群、紫宮。『史

記』天官書に「中宮。天極星、其一明者、太一常居也。旁三  
星三公、或曰子屬。後句四星、末大星正妃、餘三星後宮之屬  
也。環之匡衛十二星、藩臣。皆曰紫宮。」地上界の宮城に対  
応する。

（柳川順子）

建五旗<sup>①</sup> 羅鐘虞<sup>②</sup>

列四縣<sup>③</sup> 奏韶武<sup>④</sup>

鏗金石<sup>⑤</sup> 揚旌羽<sup>⑥</sup>

縱八佾<sup>⑦</sup> 巴渝舞<sup>⑧</sup>

詠雅頌<sup>⑨</sup> 和律呂<sup>⑩</sup>

于胥樂<sup>⑪</sup> 樂聖主<sup>⑫</sup>

五旗を建て 鐘虞を羅<sup>②</sup>ね

四縣を列ね 韶武を奏す

金石を鏗<sup>⑤</sup>ち 旌羽を揚ぐ

八佾を縦にす 巴渝の舞

雅頌を詠じ 律呂を和す

于<sup>⑪</sup>に胥<sup>⑪</sup>な樂しむ 聖主を樂しむ

五色の旗を建て、鐘虞をつらね、

四縣の樂をならべて、韶と武の樂を演奏する。

鐘や磬を鳴らし響かせ、羽根飾りのついた旗を掲げる。

八佾の舞をほしのままに舞い、巴渝の舞を舞う。

雅頌を詠じ、律呂を調和させる。

ああここにみな楽しむ、聖なる君主のおわすことを楽しむ。

○押韻 「虞・呂」は上声8「語」、「武・羽・舞・主」は上声9「麋」。

①建五旗 『漢書』揚雄伝上に「鳴洪鐘、建五旗」、顔師古注所

引『漢旧儀』に「皇帝車駕建五旗、蓋謂五色之旗也。以木牛

承其下、取其負重致遠。」

②羅鐘虞 鐘虞は鐘を懸けるもの。その横木を筥、縦木を虞

という。『宋書』樂志一に「縣鍾磬者曰筥虞、横曰筥、從曰

虞。蔡邕曰、「寫鳥獸之形、大聲有力者以爲鍾虞、清聲無力

者以爲磬虞、擊其所縣、知由其虞鳴焉。』『文選』卷一・班固

「西都賦」に「列鐘虞於中庭、立金人於端闈。」「毛詩」周頌・

有聲に「設業設虞、崇牙樹羽」。毛伝に「植者爲虞、衡者爲

栒。」

③列四縣 『漢書』礼樂志に「高張四縣、樂充宮廷」、注に「晉

灼曰、四縣、樂四縣也。天子宮縣。師古曰、謂設宮縣而高張

之。縣、古懸字。「縣」は中華書局本では「懸」に作る

④奏韶武 『論語』八佾に「子謂韶、盡美矣、又盡善也。〈孔

曰、韶、舜樂。名謂以聖德受禪、故盡善。謂武、盡美矣、未

盡善也。〈孔曰、武、武王樂也。以征伐取天下、故未盡善。〉。

〈 〉内は何晏集解。

⑤鐙金石 『楚辭』招魂に「鐙鍾搖簾、揲梓瑟些」、王逸注に

「鐙、撞也。搖、動也。揲、鼓也。言衆賓既集、箒以相樂、

堂下復鳴大鐘、左右歌吟、鼓琴瑟。」また『文選』卷三三・「招

魂」の張銑注に「鐸、擊也。虜、懸、鐘、格。言擊鐘則搖動其格。揆、撫也。以梓木爲瑟也」とある。『国語』楚語上に「以金石匏竹之昌大、鬻庶爲樂」、韋昭注に「金、鍾也。石、磬也。」

⑥揚旌羽 「旌羽」は羽根飾りのついた旗。時代は下るが用例として、齊の王融「皇太子哀策文」(『芸文類聚』卷一六)に「飾麾輅而南指、轉旌羽而北徂。」梁の江淹「為齊高帝讓前部羽葆鼓吹表」(『芸文類聚』卷六八)に「臣聞國容軍禮、旌羽昭其華。」

⑦縱八佾 『論語』八佾に「孔子謂季氏、八佾舞於庭、是可忍也、孰不可忍也」、注に「馬曰、孰、誰也。佾、列也。天子八佾、諸侯六、卿大夫四、士二。八人爲列、八八六十四人。」

⑧巴渝舞 武舞。『宋書』樂志一に「文帝黃初二年、改漢巴渝舞曰昭武舞、改宗廟安世樂曰正世樂、……其衆哥詩、多卽前代之舊。唯魏國初建、使王粲改作登哥及安世、巴渝詩而已。」

『漢書』禮樂志に「巴俞鼓員三十六人」、顏師古注に「巴、巴人也。俞、俞人也。當高祖初爲漢王、得巴俞人。並趨捷善鬪、與之定三秦滅楚。因存其武樂也。巴俞之樂、因此始也。巴、

卽今之巴州。俞、卽今之渝州、各其本地。」『芸文類聚』卷四三に「三巴記曰、閬中有渝水、賈民銳氣喜舞、高祖樂其猛銳、數觀其舞、使樂人習之、故名巴渝舞。」

⑨詠雅頌 『論語』子罕に「子曰、吾自衛返魯、然後樂正、雅頌各得其所。」「札記」樂記に「故聽其雅頌之聲、志意得廣焉、孔穎達疏に「志意得廣焉者、雅以施正道、頌以贊成功、若聽其聲、則淫邪不入、故志意得廣焉。」

⑩和律呂 『漢書』律曆志に「書曰、『予欲聞六律・五聲・八音・七始詠、以出內五言、女聽。』予者、帝舜也。言以律呂和五聲、施之八音、合之成樂。」「文選」卷一八・馬融「長笛賦」に「律呂既和、哀聲五降。」

⑪于胥樂 『毛詩』魯頌・有駉に「振振鷺、鷺于下。鼓咽咽、醉言舞、于胥樂兮」、毛伝に「振振、羣飛貌。鷺、白鳥也。以興潔白之士。咽咽、鼓節也」、鄭箋に「于、於。胥、皆也。」また『毛詩』大雅・公劉には「于胥斯原、既庶既繁」、毛伝に「胥、相」、鄭箋に「于、於也。」

⑫樂聖主 『漢書』楊惲伝に「報會宗書曰、……伏惟聖主之恩、不可勝量。君子游道、樂以忘憂。小人全軀、說以忘罪。」

和刻本は「樂たる聖主なり」と訓んでいるが、『毛詩』大雅・仮楽に「假樂君子、顯顯令德」、毛伝に「假、嘉也」、鄭箋に「顯、光也。天嘉樂成王有光光之善德、安民官人、皆得其宜、以受福祿於天」とあるので、ここでは「聖主を楽しむ」

と訓む。『隋書』音楽志下、凱樂歌辭三首「述天下太平」に「嘉樂聖主、大哉爲君」と見える。

なお、この作は、二句ごとに文武を対比するように並べて叙しており、文武の樂が調和するさまを詠っている。

化蕩蕩<sup>①</sup> 清風泄<sup>②</sup>

化は蕩蕩として 清風泄す

總英雄<sup>③</sup> 御俊傑<sup>④</sup>

英雄を總べ 俊傑を御す

開宇宙<sup>⑤</sup> 掃四裔<sup>⑥</sup>

宇宙を開き 四裔を掃う

光緝熙<sup>⑦</sup> 美聖哲<sup>⑧</sup>

緝熙を光にして 聖哲を美す

超百代<sup>⑨</sup> 揚休烈<sup>⑩</sup>

百代を超え 休烈を揚げ

流景胙<sup>⑪</sup> 顯萬世<sup>⑫</sup>

景胙を流し 萬世に顯らかなり

(武帝の)教化はあまねく広がり、清らかで恵みをもたらす風がゆきわたる。

英雄を統べ、すぐれた豪傑たちを巧みにあやつる。

宇宙を開き、四方のはてを平定する。

明らかな徳を大いにし、すぐれて才徳ある者を称美する。

百代を超越して、素晴らしい功績をあげ、

大いなるさいわいを伝えて、万世に明らかである。

○押韻 「泄・傑・哲・烈」は入声17「薛」、「裔・世」は去声13「祭」。于安瀾『漢魏六朝韻譜』（河南人民出版社、一九八九年）によれば、入声の「屑薛」韻と非入声の「霽祭」韻が通用する例として、本歌辭が挙げられている（三一二頁）。

①化蕩蕩 「蕩蕩」は、『尚書』洪範に「無偏無黨、王道蕩蕩」、

偽孔伝に「言開闢。」また『論語』泰伯に「子曰、大哉、堯之

爲君也。巍巍乎、唯天爲大、唯堯則之（孔曰、則、法也。美

堯能法天而行化）。蕩蕩乎、民無能名焉（包曰、蕩蕩、廣遠之

稱。言其布德廣遠民、無能識其名焉。）」（『何晏集解』）

②清風泄 「清風」は、『毛詩』大雅・烝民に「吉甫作誦、穆如

清風」、毛伝に「清微之風、化養萬物者也。」また『文選』卷

三・張衡「東京賦」に「清風協於玄德、淳化通於自然」、薛綜

注に「協、同也。淳、厚也。玄、天也。自然、通神明也。言

帝如此清惠之風、同於天德、淳厚之化、通於神明也」、李善注

に「孔安國尚書傳曰、風、教也。」

「泄」は、『毛詩』大雅・民勞に「惠此中國、俾民憂泄」、毛

伝に「泄、去也」、鄭箋に「泄猶出也、發也。」また『淮南子』

本經訓に「精泄於目、則其視明。在於耳、則其聽聰。留於口、

則其言當。集於心、則其慮通」、高誘注に「泄猶通也。」

③總英雄 『漢書』刑法志に「漢興、高祖躬神武之材、行寬仁  
之厚、總擘英雄、以誅秦、項。」

④御俊傑 『孟子』公孫丑上に「尊賢使能、俊傑在位、則天下  
之士皆悅、而願立於其朝矣」、趙岐注に「俊、美才出衆者也。  
萬人者稱傑。」

⑤開宇宙 『莊子』庚桑楚に「有實而无乎處者宇也。有長而无  
本剝者宙也。」『淮南子』原道訓に「橫四維而含陰陽、紘宇宙  
而章三光」、高誘注に「四方上下曰宇、古往今來曰宙、以喻天  
地。」

⑥掃四裔 「四裔」は、四方の遠い地。『左伝』文公十八年に  
「舜臣堯、賓于四門、流四凶族、渾敦、窮奇、檮杌、饕餮、  
投諸四裔、以禦魍魅」、注に「投、棄也。裔、遠也。放之四  
遠、使當螭魅之災。螭魅、山林異氣所生、爲人害者。」また  
『毛詩』小雅・菀柳に「曷予靖之、居以凶矜」、鄭箋に「王何  
爲使我謀之、隨而罪我、居我以凶危之地、謂四裔也。」『文選』

卷一・班固「西都賦」に「原野蕭條、目極四裔。」

⑦光緝熙 「光」は、『周易』坤に「含萬物而化光」、孔穎達疏に「光、大。」

「緝熙」は輝くさま。また徳のあるさま。『毛詩』大雅・文王に「穆穆文王、於緝熙敬止」、毛伝に「緝熙、光明也」、鄭箋に「穆穆乎、文王有天子之容、於美乎、又能敬其光明之徳。」

⑧美聖哲 『左伝』文公六年に「古之王者、知命之不長、是以並建聖哲、注に「建立聖知、以司牧民」、疏に「此説王者之事、或封爲諸侯、或置之羣官。聖哲、是人之雋者、故總言之耳。」

⑨超百代 『論衡』須頌篇に「唯班固之徒、稱頌國徳、可謂譽得其實矣。頌文譎以奇、彰漢徳於百代。』『晋書』劉寔伝に「詔曰、昔虞任五臣、致垂拱之化、漢相蕭何、興寧一之譽、故能光隆於當時、垂裕于百代。」

⑩場休烈 『史記』秦始皇本紀に「皇帝休烈、平一字内、徳惠脩長。』『漢書』宣帝紀に「朕未能章先帝休烈、協寧百姓」、顔師古注に「休、美也。烈、業也。」

⑪流景胙 「景胙」は、大いなるさいわい。「胙」は中華書局本

では「祚」に作る。『国語』周語下に「天地所祚、小而後國」、韋昭注に「祚、福也。天之所福小則得國、大則得天下。」用例としては、『宋書』后妃列伝・文帝路淑媛に「及上即位、……

有司奏曰、……伏惟皇太后懿聖白天、母儀允著、義明八遠、道變九圍。聖明登御、景胙攸改、皇太后宜即前號、別居外宮。」また『文選』卷二・班固「東都賦」に「鋪鴻藻、信景鑠、揚世廟、正雅樂」、張銑注に「景、大也。」

「流」については、『周易』謙の彖伝に「天道虧盈而益謙、地道變盈而流謙」、疏に「丘陵川谷之屬、高者漸下、下者益高、是改變盈者、流布謙者也。』『史記』主父偃伝「事無遺策、而功流萬世。」

「流祚」の用例としては、『三国志』魏書・高堂隆伝に「治道用興、徳與神符、災異既發、懼而脩政、未有不延期流祚者也。」また成公綏「晋四箱樂十六篇・雅樂正旦大会行礼詩十五章」其四にも「肇啓晉邦、流祚無疆」とある。当該歌注⑩参照。

⑫顯萬世 『尚書』太甲中に「皇天眷佑有商、俾嗣王克終厥徳、實萬世無疆之休」、偽孔伝に「言王能終其徳、乃天之顧佑商家、是商家萬世無窮之美。』『漢書』揚雄伝所引「甘泉賦」に

「雲飛揚兮雨滂沛、于胥德兮麗萬世。」

皇皇顯祖<sup>①</sup> 翼世佐時<sup>②</sup> 皇皇たる顯祖 世を翼け時を佐く

寧濟六合<sup>③</sup> 受命應期<sup>④</sup> 六合を寧濟し 命を受け期に應ず

神武鷹揚<sup>⑤</sup> 大化咸熙<sup>⑥</sup> 神武は鷹揚として 大化は咸く熙<sup>ひろ</sup>し

廓開皇衢<sup>⑦</sup> 用成帝基<sup>⑧</sup> 皇衢<sup>こうく</sup>を廓開し 用て帝基を成す

大いに盛んなる高祖は、世をたすけ時をたすけ、

天地四方を安んじて、天命を受け、期運のめぐりあわせに応じられる。

すぐれた武徳は鷹が飛揚するかのとき威光があり、大いなる教化はあまねく広がる。

大いなる道を開き、帝王の礎を築かれた。

○押韻 「時・期・熙・基」は上平7「之」

①皇皇顯祖 「毛詩」魯頌・泮水に「烝烝皇皇、不異不揚」、毛箱樂十六篇「其七に「惟天降命、翼仁祐聖」とあり、魏の三

伝に「烝烝、厚也。皇皇、美也。揚、傷也。」人の少帝を司馬懿・司馬師・司馬昭が補佐したことを詠うの

『尚書』文侯之命に「父義和、汝克紹乃顯祖。」「顯祖」はこ

こでは宣帝司馬懿を指す。『佐時』は、『文選』卷一五・張衡「婦田賦」に「遊都邑以永

②翼世佐時 魏王朝を輔佐したことをいうか。成公綏「晋四久、無明略以佐時」、李善注に「都、謂京都。永、長也。久、

滯也。言久淹滯於京都、而無知略以匡佐其時君也。」陸雲「嘲褚常侍文」(『漢魏六朝百三家集』卷五〇)に「故九賢翼世、而有命既集、五子佐時、匡霸以濟。」

③寧濟六合 『三國志』魏書・高貴鄉公紀に、「聖德光隆、寧濟六合。」司馬昭討伐を企図した高貴鄉公が殺害された後、常道郷公曹璜を明帝の後継として迎えるに際し、群臣が郭太后に対し、「令」ではなく「詔制」としてふれを出すよう求めた上奏に見える。皇太后の徳を称揚する語だが、実際には司馬氏がその背後にいたことを想起させる言葉。「六合」は、『莊子』齊物論に「六合之外、聖人存而不論。六合之内、聖人論而不議」、成玄英疏に「六合者、謂天地四方也。」

④受命應期 曹植「制命宗聖侯孔羨奉家祀碑」(『漢魏六朝百三家集』卷二六)に「於赫四聖、運世應期。」『三國志』魏書・賈詡伝に「陛下應期受禪、撫臨率土。」また、成公綏「晉四箱樂十六篇」其四に「受命應期、授聖德」、張華「正旦大会行礼詩」に「允文烈考、潛哲應期」、また『宋書』樂志四・傅玄「晉聲舞歌・天命篇」に「聖祖受天命、應期輔魏皇」とある。

⑤神武鷹揚 「神武」は、『周易』繫辭伝上に「古之聰明叡知、

神武而不殺者夫。」『漢書』叙伝下に「皇矣漢祖、纂堯之緒、實天生徳、聰明神武。」

「鷹揚」は、『毛詩』大雅・大明に「維師尚父、時維鷹揚」、毛伝に「鷹揚、如鷹之飛揚也。」『文選』卷四二・曹植「与楊徳祖書」に「昔仲宣獨歩於漢南、孔璋鷹揚於河朔」、李周翰注に「漢南、荊州也。鷹揚、謂文體抑揚、如鷹之飛揚也。朔、北也。」

⑥大化咸熙 「大化」は、『尚書』大誥に「肆予大化誘我友邦君」、偽孔伝に「我欲極盡文王所謀、故大化天下、道我友國諸侯。」

「咸熙」は、『尚書』堯典に「允釐百工、庶績咸熙」、偽孔伝に「允、信。釐、治。工、官。績、功。咸、皆。熙、廣也。言定四時成歲歷、以告時授事、則能信治百官、衆功皆廣、歎其善。」

⑦廓開皇衢 「廓開」は、張衡「西京賦」に「廓開九市、通關帶闌」、薛綜注に「廓、大也。闌、市營也。闌、中隔門也。」「皇衢」は、『文選』卷一・班固「東都賦」に「動大輅、遵皇衢、省方巡狩」、李周翰注に「遵天子之衢。衢、道也。」『芸文

類聚』卷五九・曹丕「述征賦」に「伊皇衢之遐通兮、維天綱之畢舉。」

于東南、推步事勢、當其歷數、終構帝基、以協天符、是烈士攀龍附鳳馳驚之秋。」また、傅玄「晋宗廟歌十一篇・祠宣皇帝

⑧用成帝基 『三国志』呉書・魯肅伝に「承運代劉氏者、必興

登歌」に「經始大業、造創帝基」と見える。

光光景皇<sup>①</sup> 無競維烈<sup>②</sup> 光光たる景皇 競きこと無からんや維れ烈

匡時拯俗<sup>③</sup> 休功蓋世<sup>④</sup> 時を匡し俗を拯い 休功世を蓋う

宇宙既康<sup>⑤</sup> 九域有截<sup>⑥</sup> 宇宙は既に康にして 九域は截うこと有り

天命降監<sup>⑦</sup> 啓昨明哲<sup>⑧</sup> 天命じて降監し 昨を明哲に啓く

輝ける景皇帝は、その大業は比類がない。

時弊を正し俗習を救い、うるわしい功績は世を覆わんばかり。

天地はすでに康らかで、九州は整然と治まっている。

天は命ずる、降つて監察し、明哲なる王にさいわいをひろくことを。

○押韻 「烈・哲」は入声17「薛」、「截」は入声16「屑」、「世」は去声13「祭」。于安瀾『漢魏六朝韻譜』(三二二頁)によれば、

入声の「屑薛」韻と非入声の「霽祭」韻は通用。

①光光景皇 「光光」は、『漢書』叙伝下に「子明光光、發迹西

光光如彼」、五臣注に「向日、元、大也。光光、明兒。如彼、

疆。』『文選』卷四〇・阮籍「為鄭冲勸晋王賤」に「元功盛勳、謂彼姜維之類。」

「景皇」は景帝司馬師を指す。

②無競維烈 「毛詩」周頌・執競に「執競武王、無競維烈」、毛伝に「無競、競也。烈、業也」、鄭箋に「競、彊也。能恃彊道者、維有武王耳。不彊乎其克商之功業、言其彊也。」

「維」は中華書局本では「惟」に作る。

③匡時拯俗 「匡時」は、『芸文類聚』卷二六・韋誕「叙志賦」に「自弱冠而立朝、無匡時之異才。」

「拯俗」は、時代が下るが用例として、『芸文類聚』卷三七・沈約「為武帝搜訪隱逸詔」に「若有道映丘園、事浮高尚、可以弭競遷澆、還風拯俗、皆以名聞、靡或遺漏」とある。

④休功蓋世 徐幹「中論」譴交に「當此之時、四海之内、進德脩業、勤事而不暇、詎敢淫心舍力、作為非務、以害休功者乎。」

「蓋世」は、『韓非子』解老に「不敢為天下先、則事無不事、功無不功、而議必蓋世。」『史記』項羽本紀に「力拔山兮氣蓋世、時不利兮騶不逝。」

⑤宇宙既康 「宇宙」は二首前の詩に既出。注⑤参照。

「康」は、『毛詩』大雅・民勞に「民亦勞止、汙可小康。惠此中國、以綏四方」、毛伝に「汙、危也。中國、京師也。四方、

諸夏也」、鄭箋に「汙、幾也。康、綏、皆安也。惠、愛也。」

⑥九域有截 「文選」卷三五・潘勗「冊魏公九錫文」に「綏安九域、罔不率俾」、李善注に「韓詩曰、方命厥后、奄有九域。薛君曰、九域、九州也。」

「有截」は整っているさま。『毛詩』商頌・長發に「相土烈烈、海外有截」毛伝、相土、契孫也。烈烈、威也。鄭箋、截、整齊也。……苞有三蘖、莫遂莫達、九有有截」毛伝、苞、本。蘖、餘也。鄭箋、九州齊一截然。」

⑦天命降監 「毛詩」商頌・殷武に「天命降監、下民有嚴。不僭不濫、不敢怠遑」、鄭箋に「降、下。遑、暇也。天命乃下視下民有嚴明之君、能明德慎罰、不敢怠惰自暇於政事者、則命之於小國、以為天子、大立其福。謂命湯使由七十里王天下也。時楚僭號王位、此又所用告曉楚之義。」『尚書』微子に「降監殷民、用乂讎斂、召敵讎不忘、偽孔伝に「下視殷民、所用治者、皆重賦傷民、斂聚怨讎之道、而又亟行暴虐、自召敵讎不解怠。」

⑧啓胙明哲 「胙」は中華書局本では「祚」に作る。ここでは、「胙」はさいわい。『芸文類聚』卷一五・傅嘏「請立貴嬪為皇

后表」に「有虞始德、觀化媯汭。夏后創業、啓祚塗山」、同  
卷・張華「元皇后哀策文」に「河嶽降靈、啓祚華陽。」なお、  
曹植「文帝誄」に「龍飛啓祚、合契上玄」とあるが、趙幼文  
「曹植集校注」は、「啓」を「踐」に作る本があることから、  
「禮記」文王世子の「周公相、踐阼而治」および鄭注に「踐、  
履也」とあるのを引き、「啓祚」は天子の位に即く意とする。  
「明哲」は、『尚書』說命上に「知之曰明哲、明哲實作則」、  
偽孔伝に「知事則爲明智、明智則能制作法則。」

穆穆烈考<sup>①</sup> 克明克儻<sup>②</sup> 穆穆たる烈考 克く明にして克く儻たり

實天生德<sup>③</sup> 誕膺靈運<sup>④</sup> 實に天は徳を生し 誕に靈運に膺たる

肇建帝業<sup>⑤</sup> 開國有晉<sup>⑥</sup> 肇て帝業を建て 國を有晉に開く

載德奕世<sup>⑦</sup> 垂慶洪胤<sup>⑧</sup> 徳を載すこと奕世 慶を洪胤に垂る

すぐれて威光ある文帝は、英明で俊哲。

まことに天は徳を授け、大いに天命を受けられた。

はじめて帝業を打ち立てられ、國を晋に開かれた。

累世に徳をなし、恵みを後代に及ぼされる。

○押韻 「儻」は去声22「稔」、「運」は去声23「問」、「晉・胤」は去声21「震」。

①穆穆烈考 『毛詩』大雅・文王に「穆穆文王、於緡熙敬止」、  
『毛詩』周頌・離に「既右烈考、亦右文母」、毛伝に「烈考、  
武王也」、鄭箋に「烈、光也。」「烈考」はここでは文帝司馬昭  
毛伝に「穆穆、美也。」

を指す。

②克明克儁 「儁」は中華書局本では「儁」に作る。

「克明」は、『尚書』堯典に「克明俊德、以親九族」、偽孔伝に「能明俊德之士任用之、以睦高祖玄孫之親。」また『毛詩』大雅・皇矣に「貊其德音、其德克明、克明克類、克長克君。」

『尚書』伊訓に「居上克明、爲下克忠。」

「克俊」は、『尚書』立政に「文王惟克厥宅心、乃克立茲常事司牧人、以克俊有德」、偽孔伝に「文王惟其能居心遠惡舉善、乃能立此常事司牧人、用能俊有德者」とある。また陸機「贈弟士龍」詩其二に「篤生三昆、克明克俊」(『漢魏六朝百三家集』卷四九)。

③生德 『論語』述而に「子曰、天生德於予、桓魋其如予何。」

④誕膺靈運 「誕膺」は、『尚書』武成に「我文考文王、克成厥勳、誕膺天命、以撫方夏」、偽孔伝に「言我文德之父能成其王功、大當天命、以撫綏四方中夏。」「膺」は中華書局本では「應」に作る。『芸文類聚』卷一〇・傅選「皇初頌」に「懿大魏之聖后、固上天之所興。應靈運以承統、排闥闔以龍升。」また、『晉書』武帝紀に「乃使太保鄭冲奉策曰、咨爾晉主、我皇祖有

虞氏誕膺靈運、受終於陶唐、亦以命于有夏」とある。

⑤肇建帝業 『漢書』叙伝下に「漢紹堯運、以建帝業、至於六世。」「史記」李斯伝所引「諫逐客書」に「彊公室、杜私門、蠶食諸侯、使秦成帝業。」「芸文類聚」卷六一・劉楨「魯都賦」に「昔大庭氏肇建厥居、少昊受命、亦都茲焉。」

⑥開國有晉 『周易』師に「大君有命、開國承家、小人勿用」、王弼注に「處師之極、師之終也。大君之命、不失功也。開國承家、以寧邦也。小人勿用、非其道也。」

『宋書』樂志二・傅玄「晋郊祀歌五篇」其一に「天命有晉、穆穆明明」とある。

⑦載德奕世 『國語』周語上に「奕世載德、不忝前人」、韋昭注に「奕、亦前人也。載、成也。忝、辱也。」「漢書」叙伝上に「光濟四海、奕世載德」、顔師古注に「載、承也。言相因不絶。」「清輝溢天門、垂慶惠皇家」、注に「翰曰、垂、降。慶、福。惠、賜我皇家。」

⑧垂慶洪胤 「垂慶」は、『文選』卷二八・陸機「前緩声歌」に「洪胤」は、『文選』卷一四・顔延之「赭白馬賦」に「蓋乘風之淑類、實先景之洪胤」、李善注に「劉劭魏明帝誄曰、先皇嘉

其誕受洪胤。」

明明聖帝<sup>①</sup> 龍飛在天<sup>②</sup> 明明たる聖帝 龍は飛び天に在るがごとし

與靈合契<sup>③</sup> 通德幽玄<sup>④</sup> 靈と契を合し 徳を幽玄に通ず

仰化青雲<sup>⑤</sup> 俯育重淵<sup>⑥</sup> 仰ぎては化は青雲のごとく 俯しては育は重淵のごとし

受靈之祐<sup>⑦</sup> 於萬斯年<sup>⑧</sup> 靈の祐さいわいを受くること 於あ萬斯年

右雅樂正旦大會行禮詩十五章 右は雅樂正旦大會行禮の詩十五章

明察なる聖皇帝は、龍が天高く飛ぶかのようなものである。

神靈と符合し、徳は幽玄に通じる。

仰ぎみてはその教化は青雲のごとく高く、俯してはその養育は重淵のように深い。

神靈のさいわいを受けることは、ああ永遠なるかな。

右は雅樂正旦大會行禮詩十五章

○押韻 「天・玄・淵・年」は下平一「先」。

①明明聖帝 『毛詩』大雅・常武に「赫赫明明、王命卿士、毛 下土、喻王者當察理天下之事也。」

伝に「明明然察也」。『毛詩』小雅・小明に「明明上天、照臨 『文選』卷四五・東方朔「答客難」に「聖帝徳流、天下震懼、

下土」、鄭箋に「明明上天、喻王者當光明如日之中也。照臨 諸侯賓服、連四海之外以爲帶、安於覆盂。」ここでは「聖帝」

は武帝司馬炎を指す。

②龍飛在天 『周易』乾に「飛龍在天、利見大人」、孔穎達疏に

「猶若聖人有龍德、飛騰而居天位。」「文選」卷三・張衡「東京賦」に「我世祖忿之、乃龍飛白水、鳳翔參墟」、薛綜注に「龍飛鳳翔、以喻聖人之興也。」

③與靈合契 曹植「文帝誄」(『漢魏六朝百三家集』卷二六)に

「龍飛啓祚、合契上玄。」「曹植」七啓」(『文選』卷三四)に「玄化參神、與靈合契」、李善注に「劇秦美新曰、與天剖靈符、地合神契。」「三國志」蜀書・先主伝に「臣聞聖王先天而天不違、後天而奉天時、故應際而生、與神合契。」

④通德幽玄 『周易』繫辭伝下に「近取諸身、遠取諸物、於是始作八卦、以通神明之德、以類萬物之情。」

陸雲「贈顧尚書」詩(『漢魏六朝百三家集』卷五一)に「厥明伊何、靡妙不研。無索炤灼、有求幽玄。」

⑤仰化青雲 『晉書』皇甫謐伝所引「釈勸論」に「若夫春以陽

散、冬以陰凝、泰液含光、元氣混蒸、衆品仰化、誕制殊微。」「文選」卷一九・束皙「補亡詩」其五に「資生仰化、于何不

養」、李善注に「資、取也。言取生者皆仰德而化也。」

『楚辭』遠遊に「涉青雲以泛濫游兮、忽臨眺夫舊鄉。」

⑥俯育重淵 『毛詩』小雅・蓼莪に「拊我畜我、長我育我」、鄭箋に「畜、起也。育、覆育也。」「毛詩」大雅・生民に「載生

載育、時維后稷」、毛伝に「育、長也。」「莊子」列御寇に「千金之珠、必在九重之淵。」「文選」卷四五・班固「答賓戲」に「欲從整敦而度高乎泰山、懷汎濫而測深乎重淵。」

⑦受靈之祐 『周易』大有に「上九、自天祐之、吉無不利。」

『芸文類聚』卷五一・魏武帝「上書讓費亭侯」に「若錄臣闕東微功、皆祖宗之靈祐、陛下之聖德、豈臣愚陋、所能克堪。」

『芸文類聚』卷五九・曹植「東征賦」に「師旅憑皇穹之靈祐兮、亮元勳之必舉。」

⑧於萬斯年 『毛詩』大雅・下武に「於萬斯年、受天之祐(鄭箋、祐、福也。天下樂仰武王之德、欲其壽考之言也)。受天

之祐、四方來賀。於萬斯年、不遐有佐(毛伝、遠夷來佐也。鄭箋、武王受此萬年之壽、不遠有佐。言其輔佐之臣、亦宜蒙其餘福也。書曰、公其以予萬億年、亦君臣同福祿也。)」

(林 香奈)

(本稿は日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究(B)「漢魏六朝期楽府詩の総合的研究」(二八H〇〇六五〇)による研究成果の一部である。)

(はやしかな・京都府立大学教授)

(かのうゆう・武庫川女子大学教授)

(さとうたけし・広島大学教授)

(さたけやすこ・大東文化大学特任教授)

(かまたにたけし・神戸大学名誉教授)

(やながわじゅんこ・県立広島大学教授)